
ぼくらの選定戦争<開戦編>

マーズ☆マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらの選定戦争＞開戦編＜

【Nコード】

N2937V

【作者名】

マーズ☆マン

【あらすじ】

超能力者が実在する世界。

人類は突如として現れた異次元生命体“エルファス”と半世紀以上に及ぶ戦いを続けていた――

世界中が敵の脅威に晒されているなか、何故かエルファスの出現率が低い平和な国・日本。

変わり映えしない日常を変な友人達と過ごす少年・真堂龍介は、世界最弱レベルの念動力者である。

そんな龍介は友人達が巻き起こすトラブルによく巻き込まれるのだ
った。

プロローグ／鳥と男と少女と球と

西暦20XX年／初春／アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ／PM0…34

——ゴールデンゲートブリッジ上空。

それは言うなれば、巨大な『球体』だった。

朱色の鉄橋の上に大きく影を落とし、その鮮やかな警戒色を薄暗く濁らせている。

『それ』が現れた瞬間、橋を渡ろうと流れていた幾多の車は次々と停止し、熱されたアスファルトの上で衝突を繰り返す。連なった鉄の塊から煌々と炎が上がり、老若男女入り混じった悲鳴が轟く。

この大都市の主要な観光名所であるこの橋が、今まさに地獄絵図に変わろうとしていた。

そしてその様子を『球体』は静かに見つめていた。

自らが現れた場所に鎮座したまま、橋を真下に見下ろす所に幾つもの目を現し、何かを探すように逃げ惑う人々の姿を追う。まるで泡の中に生まれた多くの小さな気泡のごとく、ぎよろぎよろと蠢かせている。

この『目』を持つ球体は、半世紀も前にこの世界に突如として現れた『異次元生命体』である。

その姿形は球形に留まらず、円盤状のものだったり、色鮮やかな雲であったり、立方体であったりと様々だが、ただこれら全てに共通

しているものは『目』呼ばれる感覚器官を持っている事と、なんの前触れもなく突如として現れることと、そして――

○

――その瞬間、人々はつい動きを止め、天を仰いだ。

――球体の目から今まさに放たれようとしている青い輝き。

――死をもたらず、閃光。

○

球体の目から放たれた光が、橋を真っ直ぐ貫き、その真下に広がる
ゴールデンゲート海峡までも青く染上げる。青く、ひたすら青く。

光はどこまでも暖かかった。しかしそれは『力』を持たない普通の
人間のみで、それに該当する者たち以外の身を容赦なく燃え上がら
せる。人も、車も、道路も、橋も、そして海も……。

全てが静寂の彼方にあり、光がゆっくりと消え、風景がその姿をと
り戻していく。

だが、そこにいつもの金門橋の姿はなく、光を浴びた橋とその場所
にいた全ての存在が結晶に包まれていた。

差し込んでくる太陽光を吸い込み、結晶化した全てのモノが無機質
に輝く。

しかしそんな中、凍りついた地面からゆっくりと立ち上がる多くの
姿があった。

結晶化から免れた者達である。

彼らはなぜ結晶にならずに済んだのか……？

その答えは、彼ら自身と、事を済ませても未だに空を支配する異次
元生命体のみ知っていた。

○

人類の敵となる『異次元生命体“エルファス”』が姿を現したのは、今から半世紀ほど前の事である。

彼（もしくは彼女）らが現れた当初は宇宙人の襲来と大きく話題になり、今現在でも各国を代表とする宇宙開発機関が彼らを宇宙人と言いつ張りどうにか話し合おうとしているが、一度として成功した事はない。

これからないだろう。

しかしそんな彼らの情熱はエルファス（宇宙局のだれかがつけた異次元生命体の名前。商標登録済み）の行動原理をいち早く解明し、全世界に対し非常事態を告げる事となった。

それは、

1. エルファスはどこからともなく現れる。

2. 大きさと形に個性がある。しかし、全く同じ姿をしたものの出現例もある。

3. エルファス全てに目があり、そこから怪光線を放つ。

そして、その光を浴びた生物または物質は水晶のような結晶に変わる。

という事である。

しかし、中には光を浴びても結晶にならない人間達がいる。

そんな彼らに共通していることとは、“特別な力”を持っているという事。

ある者は手を触れずに物を動かす、

ある者は睨むだけで蠟燭に火を灯し、

ある者は自らの姿を風景に溶け込ませる。

不可能を可能にし、複雑な理論の組み合わせによって初めて生まれる現象を指一本で生み出す。

すなわち、超能力である。

この世界には、はるか昔からそんな力を持った者が存在している。力の強さやその種類は個人によるが、その人口は全人類の半数以上

と言われている。

彼らが結晶化しない理由は未だ解明されていない。普通の人間とは違うことは明確なのだが、詳しい事は

未だもって不明である。

そして、この超能力はエルファスにとって有効な武器になることが判明し、能力を持った者達による特別な部隊が各国の軍の内に結成された。

それらは出現したエルファスに対して武力を行使する、戦闘機関である。

そして今、サンフランシスコに出現した人類の敵に対し、反撃に打って出るその戦士達が高速で近づきつつあった。

人類は、決して無力ではない。

○

「あゝフライドチキンうめえ。やっぱミシシippiフライドチキンは神だわ」

アメリカ合衆国軍、超能力戦闘ユニット『ミニッツガール』所属、アンジェリカ・ブリタニー・ス皮ースは、タクシー兼自身の武器である戦闘機・F-15“イーグル”のコックピット・・・のハッチにまたがり、両手にしたフライドチキンを満面の笑顔でほおぼっていた。

自身の真上と真下に広大な空の風景を敷き、普通ならば爆風のごとく押し寄せる風圧に自身とフライドチキンが吹き飛ばされ母国の偉大なる大地に激突するであろう所を持ち前の超能力で防ぎつつ、あまりにも絶景すぎる景観のなかでランチを楽しんでいる。

そんな中、F-15パイロットのジェス少佐はコックピットの真上に構えた美少女のパンチラには目もくれず、安定した飛行を続けている。

彼にとっては超能力者との共同ミッションはほぼ罰ゲームと同じで

あり、毎回出撃時には嫌な思いをしていた。それは勿論、彼女たちが嫌いだからではない。

『おいアン、もうすぐ着くぞ！そのチキン捨てろ！というか任務中にメシ喰うんじゃないって何度いえばわかる！？』

「ええ〜？だってさオジサン、腹が減っては戦が出来ぬってよく言うじゃん。どうして何度も言わせんの？ボケたの？」

『少佐と呼べこのバカ娘が！パンツを隠せ！チキンを捨てろ！今すぐ！』

「パンツ見えちゃってるけど気にしないよ！オジサンには眼の保養にいいと思うけど」

チキンの骨をしゃぶりつつ、アンジェリカは「ほらほら」とハッチの上でお尻を前後に動かす。ジェスにとって不快極まりないご褒美だったが、なかなかどうして扇情的である。

彼女は『ミニッツガール』の中でもトップクラスの能力者であり、これまでに対エルファス、対能力犯罪と数多くのミッションに成功を収めている。

現在、合衆国軍内の超能力ユニットには階級は与えられていないうえ、正式な軍人であるジェスは上司にあたるのだが、彼女はまるで親戚の小父さんに対するような態度を続けていた。

それでもあまり大きく問題扱いされないのはひとえに彼女の功績であるところが大きい。

『いかに能力者とはいえ、10代の少女を戦場に連れて行くとは・・・』

「そんなの気にしなくてもいいよオジサン。時代が時代なんだし〜」
コリコリと軟骨の部分をかじるアンジェリカ。ジェスは深くため息をつく。

「それにさ、私うたちの力がないとあいつらとマトモに戦えないでしょ？あいつらって頑丈だし」

『・・・』

ジェス自身、彼女の能力の高さはちゃんと評価している。

ただ、彼女達と任務を行うにあたって、やはり感情的なものが出て来てしまう。大人が守るべき子供を戦場に出す事、それを良しとする上層部、何年も続くこの状況・・・どうにもならない現実の中であくまで忠実に任務をこなしてきたが、やはり胸中にわだかまる不安が知らずと態度に出てしまうのだ。

だが。

「心配しなくても大丈夫だよ。私達はオジサン達のこと信じてるから」

まるで不安などないかの様な笑顔を、ハッチに張り付いたアンジェリカはジェスにしてみせる。

これには流石のジェスも苦笑する。

「私には攻撃力が無いからイーグルが必要だし、オジサンには能力がないから手段わたしが必要でしょ？だからこれでいいの！」

いつの間にか、アンジェリカの手にフライドチキンは無くなっていた。

『・・・今回もしっかりたのむぞ、エンジェル』

「帰ったら映画見に行きたいし、さっさと終わらせよう！」

二人はこんな感じで、何体ものエルファスを葬ってきた。そして、これからもそうするだろう。

多くの仲間達共に。

敵が現れ続ける限り、二人はこの国に多く存在するヒーローの一員として、ひとりの軍人として、空を翔る戦士になるのだ。

「あ、そうだオジサン」

『どうした？』

「アレスがさ、オジサンとこのエリィと付き合ってるの。知ってた？」

『・・・』

「オジサン？」

『帰ってもう一つやる事が出来た・・・スコッチを飲む前にな。お前にも協力してもらう』

「???」

『ミサイルは一発残しておく必要があるな・・・ククク』

「よくわかんないけど、見えてきたよ」

アンジェリカの視界が捕らえた、米粒ほどのエルファスの姿。レーダーにもとづくにその存在を捉えている。しかし、ジェスは目前の敵よりも愛娘を奪った部下のしたり顔が脳内を支配していた。

憎き敵はもはやあのわけわからんボール野郎ではなく、もっとも身近にいるクソツタレだ！

イーグルは飛んでいく。

あまりにテンションあがりすぎて、無意味にアクロバット飛行を決めてしまう。

「うわわわわ！ちょっと、オジサン!？」

『行くぜエンジェル！ロックンロールだ！愛国者の意地をみせろ！』

「私演歌が好きなんだけど・・・」

イーグルは加速する。

すでに事態はのっぴきならない状況まで陥っているが、一度エルファスが現れれば惨劇が起きることはもはや避けられないのだ。

もう何十年も、そんな戦いを続けている。

アメリカだけではなく、世界中どこも同じだった。

そう、ここから遙か西にある、小さな島国をのぞいて――

カリフォルニアの空と大地の間を、炎を吹き上げる鋼の猛禽が翔る。エルファスが突如として姿を消したのは、イーグルのロックオン・サイトが敵を捉えた直後だった。

プ
ロ
ローグ
／
E
N
D

#1／真堂龍介と周りの人たち

西暦20XX年／初春／日本・T県神都市山瀬町／PM0…30

風が強く吹いている。

空は快晴でどこまでも青く透き通り、こんな夜にはきつと星が輝いて見えるだろう。と、携帯端末を弄びながら思った。だが実際はこんな空気の淀んだ都会でマトモに星など見えるはずもなく、たとえば見えたとしてもその輝きは人工衛星か月のどちらかだろう。

もしくは、空を飛ぶ力を持つ能力者（発光もできる）だろうか。

実際にそんな奴見たことないが。

もうそろそろ午後の授業が始まる。昼休み、昼食もとらず校舎の屋上のベンチに寝転がり、端末の液晶画面に流れるニュースを横目に空を仰ぐ。

その内容は、サンフランシスコに異次元生命体（エルファス）が現れ、あの有名なゴールデンゲートブリッジがそいつに攻撃されたというものだった。

まあ、アメリカではよくある事だ。

そして日本は平和だ。

平和で平穏で平坦な、この国では誰にも平等に訪れる可能性のある、昼下がり。

いつそのまま午後の授業をサボタージュしてやろうかと思った、そのとき、

「りゅーーーーーんーーーーうくうーーーーー」

どだだだ、と校舎と屋上の境界に迫り来る悪魔と、その咆哮……。瞬間、ばあん！とまるでドアに恨みでもあるのかと思うような勢いで開かれたドアから、そいつが姿を現す。これで俺が授業に出れる確率は無くなった。

悪魔は俺の姿を捉えると、満面の笑みを浮かべながら走って来たのだった。

「りゅうくん！ゲームやろ！ゲームゲーム！」

「もう授業が始まるんですけど……」

と、いいつつ、仕方なく体を起こす。悪魔・・・ではなく、この俺、真堂龍介の数少ない友人の一人である巫（かんなぎ）優奈は、その両手に携えたカードの束の片方を押し付けてきた。

「カードゲームでしょうぶしょ！これりゅうくんのためにさっきくんであげたばかりなんだよ！」

エヘへと得意げに優奈は笑う。

こいつと対面したとき、まず目に飛び込んでくるのはこの無邪気な笑顔だ。これだけでこの少女に不快感を覚える者はいないだろう。その幼さを残す声と仕草は子供の様なあどけなさ。

そして、青いハートマークを象（かたど）るアクセサリが、まるで無垢な瞳に添えられているかのように頭の両側に取り付けられている。

ふわりと風にゆられ、セミロングの髪と制服のスカートがゆるやかに舞い、今日も元気にかわいいクマの顔がプリントされたフルヒップのショーツが現れる。

「きょうもかぜがつよいね」

「……そうだな」

俺は仕方なくそのカードの束（デッキ）を受け取ると、それを自分の頭上に放る。

傍から見たら女の子から貰ったものを無情に投げ捨てる酷いイケメンに見えるだろう。心配ご無用、イケメン以外ほとんどその通りだ。しかしここからは普通とは違う。放ったカードは空中でばらけ、即座に風に飛ばされようとその身を任せようとする。しかしそうはいかない。俺はその前にカードを全て視界に捉え、“力”を発動する。

「おおー」と優奈の感心する声。優奈の目には風の抵抗を受けず、空中に留まったままのカードの群れが映っていた。

この俺——真堂龍介は超能力者であり、直接物に触れなくても物を動かす『念動力（テレキネシス）』の力を持っている。

「いつみてもおもしろいなあ、りゅうくんのちから」

「こんなことぐらいしか出来ねーけどな」散らばったカードを手元に集める。これでシャッフルは出来ているだろう。カードの内容は確認するまでもない。このカードは全世界に4億人のプレイヤー人口をもつ世界最大のトレーディングカードゲーム『Master of Galaxy（通称・mog）』である。

優奈はこのゲームの熱狂的愛好者で、しかもプロの資格を持つ猛者だ。

だが俺は違う。ルールを覚えるのが面倒くさいゲームはやらない主義なので、いつもテキストに相手をしてやっているのだ。なので、カードの中身なんていちいち確認するまでもない。しかし。

「んじゃ、ゆうなのせんこうからだよ！」

と、当たり前の様にベンチに置いた束（カードデッキ）を引こう（ドロー）としている優奈の手を、テレキネシスで止める。

「先攻後攻ジャンケンしろよ！常識だろーが！」

……悲しいかな、ほぼ毎日相手をしているとルールというものはいつの間にか刷り込まれてしまうのだ。門前の小僧、習わぬ経を読むとはこの事だ。ゲームの前にジャンケンで先攻後攻を決める事はあらゆる対人遊戯のお約束ごとであり、真っ先に行われる儀式である。どちらかを勝手に決めるという事は、如何なる権力者であろうと決して許されない！

「いいじゃんどっちでも。りゅうくんどうせすぐまけちゃうし」

「ほっとけ！せめてジャンケンくらい勝たせろよ！」

弱者の持つ底意地を、この悪魔に見せてやる！

「午後の授業を奪われた俺の怒り・・・今こそ解き放つ！」

大げさに天に向かって突き出す拳、太陽の輝きを受け、光を放っている（ようなイメージ）！

「じゃあいくよ、じゃーんけーん・・・」

負けました。

ついでにカードゲームにもは負けました。

やはり、満面の笑顔の悪魔もとい優奈の前で、大げさに膝をつく哀れな俺……。笑うなら今のうちだ。

「くそくそジャンケンでも勝てねえなんて……」

「じゃあもっかいする？」

「やらねえよ！」

せめてジャンケンだけでも勝たせてくれるつもりだったのか、しかし大きなお世話だ。

俺はデッキを優奈に帰し、先ほどまで銀河の運命を賭けた決戦の場だったベンチから立ち上がり、背伸びをする。「もっかいやろ！」と制服の袖を引っ張る優奈の手をやさしく解き、言った。

「放課後でいいだろ？ お前も早く教室……じゃない保健室に戻れよ」その言葉に明らかな不満顔を見せる優奈。さっきの笑顔はどこへやら、唇を尖らせて抗議する。

「だってみかせんせい、ゆうなとあそんでくれないだもん。プリントとかパズルとか、もうあきちゃった」

「お前なあ……」

——巫優奈はこの学校において最も重要視されている少女である。その扱いはまるで保護動物を扱う様に慎重だった。別に珍しい能力を持っている訳ではなく——そもそも優奈は普通の人間だ——それに、社会的適合能力はまるで皆無——初対面でも殴れると言ったた奴がいた——な上、自分の事しか優先しないワガママでエゴイスト——は言いすぎだろうか——の塊。そんな彼女がどうして特別なのか？

巫優奈を極めてシンプルに言い表すなら、優奈は『天才』である。一をきけば百を知り、常人より遥かに高い知能指数（53万あるとか…本人談）を持ち、常人よりすぐれた感性（ラクガキがルーブル美術館に飾られた）

を持ち、常人より優れた記憶術（一度見た聞いたものは絶対忘れない）を持つ、冗談の塊のような存在。それが巫優奈である。この事により、彼女は全校生徒の98パーセントから嫌われていて、一時期酷い苛めにあっていた。俺の記憶が正しければ去年彼女（と俺）が入学して間も無くの頃だ。

大した人間がいなくごく普通の学校に突如として降臨した悪魔は台風のごとくその猛威を振るい、多くの生徒にトラウマを植え付け、登校拒否にした。

頭の中がほとんど知識のみで埋まり、しかも精神年齢はほぼ子供のそれ。若干コミュニケーション障害で誰にも遠慮が無く、人によってはその言葉一つ一つに不快感を感じてしまう。

こんな奴が教室にいれば、海面のクラゲのごとく浮いてしまうのは当然であり、生徒達の不満はついに暴力にシフトしたのだ。

彼女に対し話しかけられれば無視は当然、しつこければ突き飛ばすなどの防御行動。

そして優奈の机は授業が終わり教師がいなくなった所で教室の外に運び出される。

優奈が作ったものの、関わったものの、少しでも仲良くしていた者、その全てに憎悪は向けられた。

仕方ないとも言えなくはない。

怒りを向けた者達にも、少なくとも「そういう事情」はあった。

だが、優奈はありのまま、最初から最後まで自分にとって「普通の事だった。

自分が何をされているのか解っていなかったのか、それとも『理解』していて自分に対する仕打ちに納得していたのか。彼女はイジメに

対し最初から最後まで成されるがままだった。おそらく後者の方だと俺は確信している。

「きにしてないよ」と笑顔で彼女言った。

大したことではない、と。

彼女が怒ったり泣いたりしているところを、これまで見た事がない。どうにも影で泣いたりしているようなイメージが沸いて来ないのだ。巫優奈とは「そういう」女の子である。

いるべき場所が違うなど、何度言われた事か。

そもそも彼女にふさわしい場所はここ以外に沢山ある。
なぜここなのか――

そんなこと俺も知らなければ興味もない。ただちょっと煩わしい奴がいて、そいつが特別だっただけ。どんな奴がどこにいたかが、他人にとって迷惑だろうがそんなのそいつの勝手だろう。

だからあんまり大げさに騒ぐ事は時間の無駄だ。

――と、あまりに周りがうるさかった上に少しでも優奈に同情していた俺は、つい皆の前でそんな事を言ってみたのだった。

すると、今度は怒りの矛先は当然俺にも向けられる事になり、そしてその事にリミットブレイクしてしまった俺は教室で能力を爆発させ、彼女と同等の存在――浮いた奴になってしまったのだ。

しかし、この事が原因で優奈に対するイジメが教師達にバレてしまう。

そんな事、中国の人達や動物愛護団体の人から見たらジャイアントパンダにラリアットをぶちかますくらい言語道断な行いであり、だがそんな恐れを知らない一般ピープルの生徒達の不満をなんとか解消するべく、アホな先生達は優奈に保健室登校させるという無難な対処をすることで事態を収束に向かわせたのだった。優奈はもはや保健室の主であり、生徒達は学校にいる内は仮病が使えなくなってしまうった。

ちなみに俺に対する処置は一切無く、一年たった現在でも俺は海面のクラゲ同様、浮いた存在である。

もともと人付き合いが得意ではなかった為、別にそれに対しては不満は無く、自業自得だと納得している。だが学校のお約束事につき合わされ、無理矢理グループを作らざるをえなくなった時、このデメリットは威力を発揮する。覚悟はとっくに出来ている。いつでもこい。でも体育の時間にだけは来るな。

……優奈に対しての考査は以上だ。これがきっかけで俺と優奈はよく遊ぶようになった。

「りゅうくん、もっとあそんでよお。ゆうな、いつもたいくつなんだよ？たいくつすぎたいへんなんだよ？こまってるんだよお？」

「おい離れろよ」

「えへへへ、やうだよー」

「お前な……」

まるで駄々っ子の様に……ではなく駄々っ子そのものになった優奈にしがみ付かれ、どんどん怒りのヴォルテージがハイに近づく。いくらその豊満なバストを押し付けてこようと、それが原因で冷静になったりムラムラしてきたりしない。こいつは天然でこうしてくるのだ。狙いではない。万が一俺にやましい気持ちはあっても、優奈にはない。

「わかったわかった！俺の負けだ！」 「じゃああそんでくれるの？」

「ああ、千年後にな」

「じゃあすぐだね！なにしようかなあ。やっぱりカードかなあ」

第三者から見たとき、その人はこの光景をどう思うのだろうか。

恋人が何かを求めている？もしくは可愛い妹が兄に対して何かをせがんでいる？

俺はこの状況にとっくになれてしまった為、せいぜいおっぱいの感触を堪能するだけだが……。

最初の頃はとうだったっけ？

「りゅうくん!!」

「おわっ! 急にでかい声だすな!」

「きょういっしょにかえろ。いいでしょ?」

「どうなの? と右肩から顔を覗かせてくる。シャンプーのいい匂いがする。」

「今日は放課後黒霧と約束ある。それが終わってからな」

「そっかあ。じゃあほけんしつでまってるからね!」

あまり行きたくないけど。俺は優奈からすこし強引に離れ、教室に向かう為に屋上の出口を目指す。

彼女はすぐ後ろにぴったりと憑(つ)いてくる。

「この悪魔め。はやく保健室に戻るのだ」

「うへへ。ならばそのたましいをわれにさしだすのだ」

「二つしかない貴重なタマをくれというのか」

「タマじゃなくてたましいだよ」

なんのとりとめもない、いつもの日常。

なんだかんだ言っ、こうして俺は結局優奈と仲良くサボっている。どこで気があったのだろうか、毎日一緒に過ごしている内、そんなつまらない理由は忘れてしまった。

当たり前の様に傍にいる友達――それがどれだけ大切な存在なのか、あんな事が起こってしまうまで、この時の俺には到底気づくはずもなく、サボりの言い訳を考えながら屋上を後にするのだった。

○

「失礼しましたあー……っ」と

職員室の扉を静かに閉め、放課後の静かな廊下に出る。

気分はさながら刑期を終え出所する事となった犯罪者のようだ。

罪状は授業に対してのサボタージュ。悪魔に捕まったんですという一風変わった言い訳はとづくに通じなくなっており、その事を含め

た内容で説教されてしまい、人生の貴重な数十分を永遠に手放してしまう。

まあ、べつにいいけど。

「さて……と」

これから向かうのは黒霧との約束がある図書室だ。どうせろくな用事じゃないんだろうけど、行かなかったら後で何されるかわからない。だがその前に、優奈に一言断ってから向かうとする。彼女の用事が済むまで時間がかかるかもしれないし。

職員室からほんの目と鼻の先にある、保健室。なんの心構えもしないなかった俺の前に、その扉を開いた瞬間、間髪入れずその光景が目飛び込んでくるのだった。

「可愛いわ優奈……とてもよく似合ってる」

「えへへ、ありがと〜りさちゃん」

「ほら、こうすればもっとよくなるわ」

「おおお〜ウサミミだぁ〜」

保健室にいたのはメイド服に身を包んだバニーガール……ではない、優奈と、腰元まで伸ばした黒髪の美しい少女、黒霧紗夜（くろぎりさや）で、その二人がほぼゼロ距離で抱き合っている姿が俺の目に飛び込んできている。

二人はきゅっきゅウフフしながらじゃれ合っている。まるで仲のいい猫の姉妹のようだが、はたして黒霧には明らかな欲望がその眼に宿っていた。

「そういえば優奈、あの猿はまだなの？」

「おさる？ おさるがどうしたの？」

「真堂龍介って名前のチンパンジーよ。あの猿、この私との約束を破って図書室に来なかったから」

「りゅうくんならそこにいるよ」

「まあ、もうどうでもいいけど……って、え？」二人はこっちを向

く。

俺は開いたままの扉に背中をあずけ、カウボーイさながらに人差し指と中指を閉じたピースサインをおでこの所に掲げ、「よう」と挨拶する。

「……受け狙いの？ だったら残念だけど、ちっとも決まっていないわ。猿には相応しい挨拶が他にあるでしょう？」

「お楽しみの所を邪魔しちゃったのは悪かったが、そんな言い方する事はねーだろ。俺と比べられたサルが可哀想だ。というか何故お前がここに居る」

「勿論サルに罪はないわ。罪があるのはあなたでしょう、猿」

「俺は猿じゃねえ。質問に答えろ」

「バナナがあるけど」

「くれ」

黒霧が自分のカバンから取り出したバナナを俺に手渡す。優奈はとつくにそれを頬張り、やはり満面の笑顔を浮かべていた。しかし、なぜこの女はバナナを持っているんだ？ 貰ったそれを剥きつつ考える。遠足にでも行ったのか。だがそれよりも。

「すげえ格好だな……」

優奈の上から下まで眺めながらバナナをかじった。

彼女の格好は、いわゆるメイドと言われる人たちが着るコスチュームであり、パフスリーブの黒いワンピースと袖のない前掛け付きエプロンドレスでその姿を現している。しかし、その頭上にはメイドの象徴とも言えるホワイトプリムではなく、なぜかうサミミ。ウサミミカチューシャなのである。しかもスカートの部分から伸びた足は網タイツに包まれている。黒タイツがデフォルトだと確信している俺にとって、違和感が拭いきれない。

しかし、ここである事に気づく。

「ま……まさか、そのメイド服の下には！？」

「ふふ……さすがね」

何かに感づいたらしく、黒霧は優奈に近づき、がばあ！と膝まであ

るスカート部分を大きくめくる。

そしてそこに現れたものとは――ハイカットになっていてお尻側の布地面積があまりにも少ないウルトラローライズである――ブラジル水着と呼ばれるものだった。

「って、なんでだよ！バニースーツかと思ってた！！」

絶対そうだと思ってたのに！！

「お尻もすごいよ」

「――」

くると優奈を後ろに向かせる。

俺の期待は瞬間に砕け散っていた――ほとんど丸出し状態な大胆すぎるそのお尻が目飛び込んでくる。

そして編みタイツ。

絶句する。

「ふふ、どうかしら？興奮するでしょう」

黒霧は得意気だが、優奈は少し恥ずかしそうな顔で、まだバナナを食べている。

「おしりがスースーするよう……もぐもぐ」

「真堂君が喜んでるわ、優奈」

「ほんとう？りゅうくんはこんなぱんつがすきななの？」

「大好きに決まっているでしょう？ちなみにこれは水着よ」

もみもみ、もみもみと優奈の尻をまさぐる黒霧。優奈は「くすぐったいよ」なんて身をよじりつつも、まだバナナを食べている。おそらく三本目くらいじゃないか？あ、今四本目に手を伸ばそうと、黒霧のカバンをガサゴソ、ガサゴソと漁り始める。

「りさちゃん、バナナがもうないよ」

「そう。ごめんなさい。」

栗霧は顔を紅潮させ、ほんの少しだけ息を荒げながら優奈の尻をもみ続けている。どうみても変態です。本当にありがとうございました。

そんな黒霧は優奈の腰に腕を回し、下半身にしがみ付く形で尻に手

を伸ばしている。当の優奈は今自分に起きている異常事態にまるで興味がないかのように、黒霧のカバンの中を物色し続けている。取り出したノートや手鏡、筆箱や何かピンク色をした「ヴヴヴ……」と震える変なモノには興味がないのか、次々床に放り投げる。人の物なんですが。

「優奈……ベッドにいきましょうか」もみもみ。

「え、なんで？」ガサゴソ。

「二人だけで楽しい事をするためよ」もみもみもみもみ。

「たのしいことならりゅうくんもいっしょにやろ！」ガサゴソガサゴソ。

「残念だけど、猿は参加してはだめなの。観るだけよ」もみもみもみ。

「りさちゃん、いつまでゆうなのおしりさわってるの？おしりすきな？」がさがさこそこそ。

「可愛い女の子のお尻は国宝級の美術品だもの」もみ（以下略）。

「そうだったんだあ。じゃあ、ゆうなのおしりはどれくらいのかちがあるの？」ガサ（以下略）。

「そうね……アントニオ・カノーヴァ作の彫刻『アモルの接吻で蘇るプシュケー』くらい」（以下略）。

「すごい！じゃあゆうなのおしりはルーヴルびじゅつかんにかざれちゃうんだ！」（以下略）。

「毎日撫でにいくわ」（以下略）。

何だこの状況は……いったい俺はどうすればいいんだ？

黒霧のセクハラ（と呼ぶには度が過ぎてている）か、優奈の宝探し（こういうと聞こえがいい）か、どっちを先に止めるべきなんだ？

確かに美少女二人がいちゃついている光景にときめかない男はいないだろう。だが、これは少し雰囲気異常すぎる。

「おい、お前らな……」と、俺がようやく口を開いた——その時だ

った。

「あなた達、なにしてるの!？」

突然外から響いた怒声に、その場にいた全員に衝撃が走る。

咄嗟に振り返ると、そこにはこの状況で一番会いたくない人物が立っていた。

黒霧は思わず、優奈の尻に申し訳程度に張り付いた水着のわずかな場所を掴み、引っ張ってしまう。

「ひゃん!!?」

その衝撃は彼女にとって未知なるものであったらしく、ビクウツ!と体を硬直させた方がいいが、何故かバランスを崩しそのまま仰向けに倒れてしまう。勿論、これまで彼女が取っていた体勢から黒霧も道連れになり、優奈を押し倒すような形で倒れこむ。そんな二人がもと居た足元には、バナナの皮があった。

「お……おまたがあ……」

「むぐっ!？」

優奈は顔を真っ赤にして内股になり、例の場所を押さえるが、そこにはちょうど黒霧の頭が来ていたのでそれごと押さえる形になってしまう。さらに、倒れたまま両足で彼女の頭を挟み込んでホールドする形に持っていく。もがく黒霧。マトモに呼吸が出来ていないようだ。優奈は紅潮したまま、自分の身に起きている事態に対して軽くパニックになっているため、黒霧を殺しにかかっている事に気づかない。

「おい、優奈!」

「りゅうくうくん……なんか……なんかへんだよお」

「~~~~~!!!!!!」

「いや黒霧がヤバイ!」

二人に駆け寄ろうとした、その時だった。

廊下に居た保険医・綾小路美香は俺の横を通り抜け、保健室をレス

リング場にしていた二人を引き剥がす。さすがの美香先生も状況を理解するのに少し時間がかかったのだろう。その為、すこし対応が遅れてしまい、黒霧を本当にベッドへ寝かせる事になってしまう。そして俺はこれから始まるであろう新たな惨劇をいち早く察知し、すぐこの場から立ち去ろうとする。

だが。

「真堂くん」

「ひゃいっ!？」

振り向くと、怖い笑顔を浮かべた綾小路先生が、どこへ行くの?と無言のメッセージを送って来ていた。

どうやら、俺はまた二人の奇行の被害者になってしまいうらしい。仕方ない、と内心ため息を吐きつつ、保健室と廊下の境を閉じた。

○

「それで、結局どうなったの？」

ずず、と出汁を多く含んだうどんをすする少女・要蒼（かなめあおい）。昨日の放課後、保健室で本当にあったはた迷惑な話を彼女に聞かせつつ、俺もうどんをすする。天ぷらうどん最高!

今日のお昼は食堂で、俺の数少ない友人の一人である彼女と共にランチをとっていた。おばさん達が厨房の中で忙しそうに動き回っているのを視界の隅に捉えつつ、カウンター席に並んで座った俺達は箸を止める事無く会話を続ける。俺達の他にも飢えた生徒達でひしめく食堂、ここは校内でも最も賑やかな場所だ。恐らく、どの学校でもこういう所は賑やかだろう。

「優奈は先生に大説教、黒霧は出禁くらった。信じられるか?保健室に出入り禁止って……」

「……多分、それはボクのせい」

「は? 何で要が?」

彼女はまだうどんとアブラアゲが残ったドンブリの上に箸を置き、

少し気落ちした顔をする。

彼女が好物のきつねうどんを食べている時、こんな顔はした事は今までなかった。少なくとも要と話すようになるまでは。

「あの服はもとも紗夜がボクに着せようとして持ってきた物だったんだ」

「……」

なんとなく、そうじゃないかと実は俺も思っていた。何故なら、この要と黒霧は『とても』仲がいいのだ。

「黒霧の奴、俺に用事があったハズなのに、優奈と保健室に居たんだ。そしてあの格好……」

「……多分、あの服を着たボクを真堂に見せたかったんだとおもう」「へ？」

「昨日、紗夜と約束してたんだ。放課後一緒に真堂にイタズラするって。でもボクに急用が出来たから……」

「なるほどね……」

黒霧は要から急遽優奈に獲物を変えたのか。放課後は大抵俺と一緒に居るし、その事を利用した訳だ。

「でも、よかったんじゃないか？結果的に。要が恥ずかしい格好しなくて」

と言うと、要は首を振って否定する。

「色々な服は着ていて楽しい。紗夜の持っている服は可愛いから」

「ま、まあ……服だけはな……」

「でも……」と、要は顔を赤くする。

「誰かの目の前であんな事するのは……恥ずかしい」

「恥ずかしい……か」

一体、二人つきりで居る時はどんな事をしているのだろうか。

思い切って尋ねてみようとした、その時。

「てめっふざけんなよコラァ!!」

「そっちこそなんだよ!? ああ!?!」

賑やかなこの場を一齐に静まりかえらせる声。二人で同時に振り向く。周りの生徒のほとんどがすでにその現場を注視していた。見ると、男子生徒の二人が互いの胸倉を掴み合い、今にも殴り合いを始めそうなほどの血気を発散させながら睨みあっている。

「笹原が誰と付き合ってるって!? 嘘ついてんじゃねえよっ!」

「俺はその現場にいたんだよ! 事実だ離せコラァッ!!」

「ありえねえんだよっ! んな事っ!!」

周りの者は二人を止めないのか、それとも話の内容のほうが気になるのか、その二人を傍観する生徒達

で食堂の空気は一変している。しかし、話に興味がないのか全く意に介さない者も多く、ましてや新しく食堂に入ってきた者は一度その場を見ただけで食券売り場に足を運んで行く。

「笹原って……あのお嬢様の?」

「笹原って言ったらこの学校に一人しかいないだろ」

笹原詩音——彼女はいわゆる『お金持ちのお嬢様』であり、この学校でもトップクラスの美貌を持つ少女だ。才色兼備で文武両道、品性も良く誰に対しても親切丁寧、まるで神様の悪ふざけで作ったようなこの世界のバグだと言った者もいるほどだ。勿論いい意味に違いない。

「しかも俺達と同じ能力者だろ? 金があるなら『星帝』に行けばいいのに」

「そこは家庭の事情だと思う」

「まあ……だろうな」

『星帝』とは、ここ神都に名高い超名門『能力者育成』学校だ。勿論普通の人間も通う事も出来る。

あらゆる面で優れた力を持つ人間を集めているという話で、特に優れた力を持つ者は待遇の良い扱いを受けるらしい。今となってはあまり興味はないが、とある知り合いが何人かそこに通っていて話を聞かせてもらっていた。

しかし名門というだけあってかなり厳しいらしく、校則のせいであ

まり自由はないのだという。そんな話を聞く度、『選ばれた』の自分じゃなくてよかったと思うが――

「あそこは『セイヴズ』育成機関でもあるから、多分両親が反対したんじゃないかな。あそこには行くなって」

「なるほど」

セイヴズ――各県に支部を構える日本最大の超能力部隊。主な活動は超能力によって起きた犯罪の対処。この国にエルファスはまだ現れていた頃はそいつらとも戦っていた。

「厳しいだろうな。まだここらは平和でいいけど」

ドンブリに向かい、昼食の続きを始める。もう後ろの二人に興味は失せていた。誰が誰と付き合おうがそいつらの勝手である。箸で掴んだ海老天を大きく待ち構えた口に運ぼうとした、その時。

『ユー達イ!! つまらないファイトはもうやめるんだッ!!』

――ぼちゃん、と箸から離れた海老天がドンブリの中的大海原に還っていく……。

隣にいた要が、心底イヤそうな顔をしていた。こんな顔は『奴』が現れた時、この学校の在校生ならばそのほとんどがこんな顔をするに違いない。たった今海老を食べ損ねた俺もそんな顔をしている。この食堂にいる生徒みんなも。

――声の主は食堂の入り口に立っていた。

――声の主は少年だった。

――彼はギターを構えていた。

――彼は超能力者だった。

――そして彼は、世界最強の『自信』を心に持っている。

――そしてイヤでも、彼の声が食堂を中心に学校中に『響き』渡る

『ユー達の熱意は確かにオレに伝わった！！たった今！この瞬間にだ！納得いかない気持ちもわかる！悔しい気持ちも良くわかる！！でもそんな熱意をバイオレンスにシフトしてはダメだ！！』

彼——音宮仁（おとみやじん）は自身の能力を使い、声を爆音の様に響かせた。一斉に耳を押さえる生徒、爆心地に近い者は失神していた。正直、あまりに声が大きすぎて何言ってるかよく聞こえなかった。

だがしかし、それでも奴は止まらない。

『熱意とは力なんだ！心から生まれる無限のエネルギーだ！だから、そんな力こそ正しく使うべきなんだ！！だから——』

……賢明な者なら、この後奴が言う言葉が頭に浮かんだに違いない。地獄はここから始まる。

『だから歌おう！！！皆で！！！行くぜえ——————』

仁は手にしたエレキギターを構え、弦めがけてピックを下ろす。それはミサイルの発射スイッチを押す事に等しい。死神が振り上げた鎌は、いま振り下ろされたのだった。

ピックが弦に触れた瞬間、爆音が響き渡る。仁が何を歌っているのかは不明だが、確かな事はコイツはオンチだという事。カラオケに何度か行った俺は知っている。ギターは確かに上手いんだけど、歌は壊滅的にヘタクソなのだ。作詞もでき、作曲もでき、ギターテクニクも拔群で、歌に対する情熱は無限に等しい。そんな彼は超絶オンチ。あと暴力がキライ。

そう、コイツの前でケンカや言い争う事は、すなわち死を意味する。コイツは何に影響されてか、本気で『歌』で世界を平和にする事ができると信じているのだ。

たとえば能力者同士のケンカの前でも歌うだろう。
たとえば攻撃してくるエルファスの前でも歌うだろう。

宇宙人・宇宙怪獣・異次元超人・ヴィラン・悪魔・怪人・妖怪・魔獣・邪神・旧支配者・雷おじさん――

そんな奴らの前でも、コイツは歌うだろう。

カラオケに行った時以外、その身に宿った力で……。

「……ん？」

「……」

他の生徒同様、耳を塞いでいる俺と要。その彼女が、俺に口パクで何か言っている。その可愛らしい顔には困惑の色が浮かんでいた。この騒音の中だ。何を言っているか聞こえないが、その口の動きに注目する。

（は・や・く・と・め・て）

「……」

首を横に振って、拒否。

（は・や・く・と・め・ろ）

いや、だから、無茶だっつの。いやいやする。肩をすくめる。そして、要の瞳が深い赤に染まる。

（こ・ろ・す・ぞ）

「うつ……」

冷や汗が落ちる。本気で怒っている。無茶振りもいいとこなのだが、こいつの力はかなりえげつない事を思い出す。どうやら、やるしかないらしい。

俺は仁を見た。ここカウンター席から奴までそここの距離があるが、十分俺の力の射程内だ。

奴のギターを注視し、集中力を高める。異変はすぐに起こった。

『あ、あれ！？ギターがああああああああ！！これは一体！？』

宙に浮かんでいく仁の相棒。それを追おうと手を伸ばすが、本体から釣り下がったストラップにさえ届かない。集中力が途切れ、奴の能力は解除された。そして食堂に静寂に戻る。

仁はギターを取り戻そうと必死だが、それと同時に辺りを見回して

いる。そこで要と並んで座っている俺の姿を見つけ出し、笑顔にな
って言った。

「ドラゴン！新曲が出来たんだ！！聞いてくれ！！」

「恥ずかしいあだ名で呼ぶな！！」

こう返した俺に、奴が駆け寄ってくる。来るんじゃねえと言いたい
所だが、そうもいかない様だ。次第に食堂に怒気が満ちていく。生
徒達の視線が俺たちに集まり、居心地の悪さがどんどん高まる。

失神した生徒に駆け寄る者、ちゃんと耳が聞こえているかどうか確
かめている者の姿に直接関係ない俺にも気まずさを覚えさせる。し
かし、そんな事お構いなしに仁はこう言った。

「ドラゴン、今度の曲には自信がある！是非Y U — N A —（優奈）
にも聞かせたい！！」

「まずはこの事態をなんとかするのが先だろ……」

「事態？何の事だ？」

「お前……いや、もういい。とりあえずここから出た方がよさそう
だな」こいつはいつもこうだ。自分のやった事が悪い事だと思っ
てない。自分の歌でケンカを止める事が出来ると信じている。

確かにあの二人のケンカは止まったが、直接関係ない周りの者にも
被害が及んだ。

「やり過ぎなんだよお前は。鼓膜が破れた奴がいたらどうするんだ
？」

「心配するな。俺は音を操る力とは別にテレパシーも使える。だか
ら人の心に直接響かせる事も出来る。どんなにポリウムを上げよ
うが、鼓膜を傷つける事なく『俺の音』を聞かせられるんだ」

「耳塞いでも曲が聴こえたのはそのせいだよ、はた迷惑な……」
こいつが多重能力者（デュアル）だったとは、なんと恐ろしい。

しかし、さっきから被害をこうむった生徒達は直接文句を言わず、
視線で抗議してくる。俺たちが嫌われているのは何も力を持ってい
るだけじゃない。恐らく、関われば何をされるか解らない恐怖心が
その心に刻みこまれているからだろう。

中にはそんなこと意に介せず、直接文句を言ってくる者もいる。正直、そういう人の存在はありがたいが、今この場にはいない様だった。

だがそんな人たちが来る前に、ここから立ち去らなくてはならない。だが、その前に。

「天ぷらうどんがまだ残っている！」

俺の大好物、450円で二匹も海老天が付いてくる。海老本体より衣の方が分厚いのはご愛嬌だが、うどんの出汁を吸い込んだその衣はなかなかどうして捨てがたい。最初の一匹は食べ始めの頃に平らげているので、ドンブリには後一匹残っているはずだ。

「エビちゃんおまたせ〜〜〜と」

元氣よく席に戻った俺だったが、しかし、

「なん……だと……」

残ってねえ。

何も残ってねえ、だと？

「!？」

ハッ!？と危機に直面したスリラー映画の主人公さながらに隣を向く。

「……」

分厚い衣を解かれ、剥かれたままの姿の海老の姿が、今、尻尾ごとの要の口に吸い込まれて行った。

モグモグと可愛らしく口を動かした後、海老をもはや誰の手にも届かない闇の底に押し込む。

俺の海老天は二度と帰ってこない。

二度と帰ってはこないのだ。だが、

「ぺっ」

と、あろうことか、要は海老の尻尾をドンブリに吐き出したのだった。

「お前……何してんの」

「もう食べないかと思って。勿体無かったから」

何事もなかったかのように、そう言って自分のドンブリのアブラアゲを箸で掴む。

この女は、人の好物を奪っておきながら、自分の好物は最後の最後まで残していたのだ。

「ふざけんなあああああああああああああああああああ！
！！ うわあああああああああ！！俺のエビちゃんがあああああ
ああああああ！！ わああああああああああ！！！！！」

俺はいきなり叫びながら要に掴みかかり、そのアブラアゲを強奪しにかかる。今度は何だと周りの生徒の注目が集まるが、そんな事は関係ない。力の限り、要の体を拘束し、大好物を取られまいと必死で守るその手に手を伸ばす

「やつ……離して……」

「ドラゴン！落ち着くんだ！！俺の歌を聞くんだったッ！」

「うるせーこのバカ!! リン・●ンメイの爪の垢煎じて飲んでろタコ!!」

「ボクのアブラアゲは誰にも渡さない……っ！」

「テメー人の海老食つといて言えた事かよ!？」

「離してっば……えっち！」

こんなバカ騒ぎは結局昼休みが終わるまで続き、仁の歌のせいで駆けつけた教師に捕まってしまった俺達は、結局放課後に説教を受ける事になってしまったのである。

1 / END

#2／真堂龍介は美少女文庫の主人公になれない

「そう、それでどうなったの？」

「俺と仁は一週間、食堂に行けなくなった」

「じゃありゆうくんはあしたからおひるどうするの？」

「テキトーに家から持ってくる」

「自業自得」

「ほとんどお前のせいだろうが！！そしてお前も！！」

「ん？」

放課後、屋上に集まった俺達は、帰るまでの時間をここで潰していた。

ここに四つしかないベンチの一つに女の子三人が並んで座り、その向かいの位置にあるベンチには、作曲活動中の仁の姿がある。俺はその丁度真ん中に居て、地べたに座っている。何をしているかという、食堂での件についての反省文を書いていた。

「まったく、なんで俺はこんな目ばっかにあうんだよ。悪いのはそのオンチと食いしん坊のせいなのに……」

酷い歌を聴かされた挙句に、好物の天ぷらうどんの海老天まで奪われ、その上さらに反省文である。

教師曰く、一番騒いだのは天ぷらを取られた被害者である筈の俺らしい。

仁は『いつものこと』とまるで日常の風景の一つに数えられ、あろう事か全くの不問である。

これには納得できない。仁にはいつか昼飯をおごらせてやろう。

「残念だわ……」

「？ なにが？」

黒霧を見る。奴は美少女二人に挟まれて得意気な顔で言った。

「貴方がもし美少女文庫の主人公だったら、こんな可愛い私達を好きにできるのよ？」

と、優奈と要の脇から手を伸ばし、それぞれの胸をもみみし始める。一連の行動があまりにスムーズすぎて思わず見蕩れてしまう。それほど見事なセクハラ行為だった。

「本当に可哀想だわ。もし私がヒロインだったら、貴方を慰めてあげるのに」

と、二人の豊かな胸と控えめな胸を同時にまさぐる。

「ひゃん！ りさちゃんおっぱいだめだよお！」

「んう……紗夜……」

身をよじらせる二人だったが、優奈はくすぐったそうにしているだけで、要は行為の意味を理解している様にみえる。全くこいつらときたら。

「どう？ うらやましいでしょう？ 変わってあげてもいいのよ？」

「結構です。とういか、よく人前でそんな事できるな」

今更だがシンプルな疑問をぶつけてみるも、黒霧は得意気な顔のまま、こう言い放った。

「流石に人の多い所では目立たない様にするわ。それに貴方達の前なんて慣れているもの」

「結局どこでもやるんじゃないか！」

「なにか文句でも？」

黒霧は二人を強く抱きしめ、感触とそれぞれの香りを満喫している。こんな始末におえない奴とどうしてこんなに話す様になったんだ？ 少し思い返してみるが、出てこない。数少ない能力者同士だからだろうか。しかしこのメンツの中で能力者じゃない優奈と一番中がいい気がする。

「りさちゃん、そこだめだよお」

「ふふ……わるくないでしょう？」

「あおいちゃん、たすけてえ」

優奈は黒霧を挟んで向こうにいる要に助けを求めるが、当の本人は頬を紅潮させて俯いている。時々体を震わせて、何かに反応しているようだ。

「おい黒霧……どうして同姓同士でそんな事してんだよ。毎回スキンシップにしては度がすぎてるだろ」

「わかってないわね。同性同士だからこそできる事があるんだから」と、黒霧は手の位置を胸から腹部へと移動させ、更にその下へ――

「おい黒霧！」

「なにかしら？」

「もうその辺にしとけよ。二人とも困ってるだろ」

俺は立ち上がると、とりあえず優奈の手を引っ張り、黒霧から開放する。その途端、俺の体に優奈がしがみ付いてくる。

「おい、なんだよ」

「えへへ、ありがとーりゆうくん」

「いいから離れろ。それに、お前もちよつとは嫌がれよ」

優奈はニコニコしたまま、俺の腕を抱きしめている。黒霧の顔を見ると、眼を細めてなにかを考えている様な面持ちで、要にセクハラしながら俺達を見ていた。

「よし！できたぞ！」

と、後ろで仁の声が上がった。皆でそっちの方に向くと、譜面を持った仁が嬉しそうな顔でギターを肩に掛ける。

「皆、聞いてくれ！新曲『ガール・ミーツ・ガール』！！」

ギターをジャカジャカき鳴らしながら、リズムをとる仁。相変わらずギターテクだけはすごいが、歌声の酷さはここにいる皆が知っている。

「ここで歌うつもりみたいね」

「仕方ないだろ」

「ゆうなはとくとうせきできこ！」

優奈以外はあまり乗り気じゃない面持ちで、しかし、それでも期待しつつ仁に耳を傾ける。オンチに眼を瞑れば歌詞もなかなかののだ。まるで放課後の吹奏楽部の演奏の様な、どこことなく寂しさと懐かしさ感じさせる空気変わる。

仁の歌声は、屋上全体を支配していた。

「あるうひゝクマのなかゝもりさんにゝであつたあゝ」

「森さん熊の中で何してたんだよ」

「じんくんのまねゝ」

優奈はギターを掻き鳴らす真似をしながら、川沿いの土手を歩いて
いる。そんな優奈の隣で今夜の献立を考えながら、俺は携帯のニュ
ースを眺めていた。

「アメリカのヒーローが日本に来るんだと。能力者の学校に講演に
来るのか？」

「じんくん、ほんとうにうたがじょうずだねえ。きょうのおひる
にもすつごくおおきなうたがきこえてきて、みかせんせいがおどろ
いてひっくりかえっちゃったんだよお」

「ロンドンにエルファスカ……」

「ゆうながおおわらいしたら、みかせんせいがおこって……りゅう
くんきいてる？」

「あ？何か言った？」

携帯を閉じ顔だけ優奈に向けると、優奈は両頬を膨らませ、理由は
定かではないが明らかに不満げな顔を浮かべていた。

「なんだよそのハムスターみたいな顔……」

もしくはフグ？

「りゅうくん、ゆうなのはなしきいてなかったでしょ！もう！」

ガオオと唸りを上げ、突然優奈が飛び掛かって来るのを受け止め、
車道に入らない様に白線の内側に降ろした。

「道路で暴れるなバカ。流石にぶつかってくる車は持ち上げられな
いんだから」

「りゅうくんがゆうなのはなしをきいてなかったのがいけないんだ
よ！」

ムスーと唇を尖らせた優奈の脳天に軽く手刀を叩き込む。

「ふぎゃ！いたあい」

両手で打撃箇所を押さえた優奈はそのまま俺の足に蹴りを入れてくる。

「こら、やめやがれ」

「やだ！あやまれ！ゆうなをいじめたことをあやまれ！」

蹴りそのものは大した事ない威力だが、非常にうっとおしい。

優奈との帰り道は大抵こんな状況に陥る。このバカ娘は車が側を通るのにも関わらず奇妙な踊りを見せたり、歌いだしたりするので非常に危なっかしい。しかもその事を注意すると、「ちゃんとけいさんしてるもん」とインテリぶって口ごたえする。

「お前を助けてやったんだぞ。感謝しろよ」

「ゆうながりゆうくんにたすけられることなんかないもん」

「黒霧のセクハラから助けてやっただろ」

「あれはちがうもん。それより、おなかすいたねえ」

何が違うんだ、とつぶやき携帯の時計を見る。もう夕食を摂ってもいい時刻がそこに映されていて、周りの景色もそのトーンを夕暮れに近づけていた。それぞれの家に続く分かれ道が近づきつつあり、俺は携帯をしまつて優奈に言った。

「じゃ、この辺だな。また明日な」

「りゆうくん」

手を振って別れようとした俺の手をとり、優奈は言った。

「これからりゆうくんのうちにいってもいい？」

「は？」

お、俺の家だと。

「何の用だよ。今バナナはないぞ」

「そんなのいらないもん。はやくいこ！」

「おい！」

優奈は制止の声を無視し、俺の家の方へいきなり走り出す。しかも速い！

「というか、あいつ俺の家知ってたのかよ……」

既に姿が見えなくなった優奈を思いつつ、俺は歩く速度を速めた。
あいつが道に迷う事をほんの少しだけ、期待しながら。

○

静かな住宅街にひっそりと建つ、築10年程のアパートが今俺が住む家だ。学生が一人住むにはちょうどいい1LDKの部屋で、風呂もちゃんと付いている。俺たちが通う山瀬高校にも一応寮があるものの、そこは風呂もトイレも全て共同なので、あまり他人と関わりたくない俺は両親――の代わりである院長に頭を下げ、アパートに住む事を許してもらう。

その際姉達にも大反対された上に「心配だから」と一緒についてこようとした義妹をなだめるのに一ヶ月も有した。

全て入学前の事だが、あの頃はまだ少しの『希望』があった。

穏やかな高校生活を穏やかに過ごし、穏やかな友人達（文科系）に囲まれ、穏やかな青春を謳歌する。

まあ、優奈や黒霧に出会った事で俺のささやかな願いは数週間で悪夢に変わってしまったが、それでも一年は過ごしてこれたのだ。

「これからどうなるんだろうな……」

淡い希望と不安を織り交ぜた思いを胸に、アパートの階段を上がる。
そこで。

「……あれ？」

ある事に気づく。

俺の部屋の扉は外からも見えている。だが、その部屋の前に居る（はず）の優奈の姿を見ただろうか。しかし部屋がある通路に来てても、優奈の姿はない。

「あいつ結局帰ったのか？」

なんて甘いことを考えつつ、自分の部屋の前に来た。そこで、

「……!？」

鍵を取り出しドアノブに手を掛ける。がちやり、と普段鍵をかけている場合ありえない音と感触。凍る俺の背筋。急いで玄関から自室に飛び込んだ俺を待ち構えていたのは、本棚に向かって座り込んでいる、はたして優奈の後ろ姿だった。

「お前何やってんだああああ!!」

「あっ。おかえりー」

「おかえりじゃねえ!!」

背後に駆け寄り、後ろから侵入者の両頬を力の限り引っ張る。更にその頭上から一体何をやっているのか見越してみると――

『あなたの恋人を120%満足させるセックス』

『これで彼女もあなたにメロメロ!!』

この二つの見出しで始まる、エッチの為のエッチな特集に載ったエッチの極意を克明に綴ったエッチな写真だらけのエッチな本――すなわちエロ本であるそれを、優奈が熱心に読んでいた。

「りゅふくんいふあいよ」

「こんなの読んでんじゃねえ!! つうかどうやって入ったんだよ!」
「?」

雑誌を無理矢理引ったくり、これ以上悪ささせない為本棚から引き離す。優奈はすぐさまベッドに移動し、まるで自分の家でくつろぐかのごとく寝転んだ。

「えへへ、りゅうくんのおいがするよお」

「いやどうやって入ったのか答えろ!」

「ピッキングにきまつてるじゃん」

ごろごろ、ごろごろベッドの上で回る優奈。スカートがめくれてクマの顔がプリントされたショーツが覗くが、俺は頭にきてそのクマの所を遠慮なくひっぱたいた。

「いたあい!!」

「この侵入者が! でてけ今すぐ!!」

「やだ! ここでねる!」

「デメーいい加減にしやがれ!!」

俺は思わず優奈の上に飛び乗り、再びその頬を掴み、モチをこねるかの如くこね回す。しかし、優奈は何一つ言わず、ただじいっと俺の眼を見つめている

「……」

「ど……どうしたんだよ」

優奈の眼差しはどこまでも真っ直ぐだ。あまりにもそれが直線過ぎて、全てを見透かされているんじゃないかと思うほど。ベッドに遠慮なく投げ出された両手、スカートから伸びた細めの足、いつもは顔の両サイドにある青いハートのアクセサリ。どれも全てがいつもの優奈を作り上げているモノだが、その瞳はどこまでも深く、俺の顔を覗き込んでいた。

言葉が出ず、胸の内でなにか言えよと思った、その時。

「あのほんにのつてたこと、する？」

「……え？」

優奈が手を伸ばし、俺の頬に手を重ねた。

優奈は微笑んでいる。

そしてそのまま、真っ直ぐ見つめてくる。

もともと静かだったこの部屋から、完全に音が消え去った——気がした。

その瞬間、俺は体温が一気に上昇するのを感じ、一気に優奈から離れた。

「りゅうくん」

「あっ、えっ、えっとメシ！メシ作るからテレビでも見てろ！」

優奈の顔も見ず、リビングから逃げるように出て行く。

あいつはそのときどんな顔をしていたのだろうか。

ジュウウ、とベーコンの焼ける音と香ばしい香りがキッチンを満たしていた。

二人分の目玉焼きはもうすぐ出来上がる。味噌汁とご飯は今朝からの余りものだったが、一人暮らしの学生の俺にとって、節約されたメニューが安定した生活を築く。

それに、優奈なら食べてくれるだろう——なんて少しにやけながら、出来上がった料理を皿に乗せ、リビングに運ぶ。

「おい優奈、メシできたけど——」

その優奈がいない。どうやらまだ俺の部屋にいるらしい。まさか寝てたりしているのか？

「優奈、なにして……」

部屋に入ると、優奈は仰向けになり、一冊の古びたノートを広げて読んでいた。

そのノートの表紙には——『ぼくのかんがえたひっさつわざ』と書かれている。

「ねえりゅうくん、『ギガンティックハンマーキック』ってどんなわざ？」

「！」

「『ドラゴニックブラスター』って？」

「！！」

「この『フェニックスブレイズウィング』って——」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

俺はお隣さんの迷惑も考えず、力の限り咆哮し、再び優奈に突撃した。

「それは俺の知られざる歴史だ！誰の目にも触れてはならない遺物なんだああああああ！！」

その手に『黒歴史ノート』をしっかりと掴む。周りを見れば、本棚から放り出された本で散らかり、自分でさえどこにしまったかも忘れてしまったエロ本や漫画まである。そして、俺が自分の力に慣れ

てきた頃毎日の様に考えていた『必殺技』やその練習方法の記されたノート。

今となつては全てが懐かしい。そして恥ずかしい過去――

「りゅうくんこの『墮天』^{フォールダウン}やって！」

「離せ！こいつを解放するんだ！！」

「みせてよひっさつわざ！！できるんでしょ！」

「できるか！俺の能力なんて欠陥だらけでそこに書いてある98パーセントは妄想なんだよ！」

――俺の念動力^{テレキネシス}は欠点がある。

まず、“生物”は動かせない。例えアリの様に小さな虫であろうと、自分の意思ではピクリとも動かす事が出来ない。そして次に制限されるのは“重量”だ。

『俺は自分の体重より重い物』を動かすのに時間がかかる。

前に冷蔵庫を動かそうとして、数十分かかってようやく数センチ浮かせる事が出来た。

テレビや雑誌に出てくるような俺と同じ能力者は皆、自動車や大きな岩を自由自在に動かしているというのに、何で俺だけ――

「は――な――せ――！！！」

「や――だ――！！！」

これは俺の卑しい願望の塊だ。

こうできたらいい、こうなったらいい――

かつて俺の周りの人達には、氷や風、炎等を自在に操る力を持った者達がいた。

いや、“者達”なんて他人行儀な言い方はよそう。

俺と一緒に育った、俺と殆ど似た境遇でその家に集まった『兄弟』達。

俺は羨ましかった。俺の持っていない『強い』力を持った、彼らが――

「お前いい加減に……！」

「あ」

びり。

そんな音が俺と優奈の耳に届いた瞬間、その二人の手に掴まれた忌まわしきノートは真つ二つになった。

そして、落ちる。

俺と優奈の間に、沈黙が訪れる。ちらりと優奈を見ると――呆然と
していた。

そんなに残念だったのか？しかし、がっかりしているようには――

「おい優奈、気にしないでいいぞ？俺はせいせいしたけど……」

「あ……」

「いやー残念だったなあ、ははは、こいつは俺のいわゆるハズカシ
ー歴史というやつで……」

「あ……ああ」

「誰にも見られたくなくて……優奈？」

優奈はなぜか敗れたノートを握り締め、震えている。

そんなに気にしているのか？ いや、でも――

「おい、ゆう——」

気にすんな、と優奈の肩に手を置く。さあ晩飯食おう——と、言いかけた、その時——

[illegible]

「な……! ? おい! ?」

「いやあああああああああああああああああああああ！
」

優奈は突然、あまりに突然に絶叫して自分の頭を抱え、うずくまつ

てしまった。

なんだ。

なんだ――これは？

こんな優奈、初めて見る。

いつも笑顔を絶やさないはずの彼女が——こんな——

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいいごめんなさいゆるしてゆるしてゆるしてゆ
うなをゆるしてりゆうくんごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いいいいいいいい!!」

「お、おい優奈！？ 落ち着けよ！ なんだってんだよ！？」

瞬間、冷たい衝動が俺の背を射抜く。

光の無い目はまるで焦点があつてなく、目の前の俺ですら見ていないかのようだ。

「やだ、やだやだやだやだやだああああああ！い
やあああああああ！」

「おい！優奈落ち着け！！怒ってないだろ！？俺は！」「どうしたらいいんだ？一体なにが起こっている。」

「ああ……ああああああああ……」

「優奈！」

「た……たすけて……」

「優奈……？」

「たすけてよお……アイちゃあん……ゆうなじやダメだよお……り
ゆうくんゆるしてくれないよお……りゆうくんにきらわれたくない
よお……りゆうくんにきらわれちゃったら……ゆうな……ゆうなは
……『私』は——」

かくん、と優奈の全身から力が抜ける。

何度も揺さぶっても、何の反応もしない。

これじゃまるで……

「おい、優奈？ 優奈っ!？」

「……」

俺の全身から——ゆっくりと血の気が引いていく。

嘘だろ？

優奈の体は温かい。心臓だって、動いている。その鼓動は確かに伝わってくる。

しかし、その体からは力という力が伝わって来ず、全身を俺に預けてきていた。

「おい……優奈」

こんな時に、俺は、眠った様に目を閉じた優奈の顔を、可愛いなんて思ってしまった。

まるで母親の腕に抱かれて眠る赤ん坊の様な、穏やかな寝顔。

俺はこの手に優奈を抱いたまま、その頬に手を触れようとした——その時、

「う……」

「優奈!？」

優奈がゆっくりと目を開く。そして、俺の顔をゆっくりみる。

まだ寝ぼけ眼だが、それを見た瞬間、胸の中によく安堵が戻ってくる。

はあ、と深いため息がその証で、優奈を体から離し、その顔を改めて見る。

「まったく……驚かせんなよお前は……まあお前に驚かせられる事なんかしょっちゅうだけど」

「……」

「おい、優奈？」

「……何ですか」

優奈は俺の目を真っ直ぐ見つめてくる。光の無い、目で。

「ど、どうしたんだよ、さっきは。ビビっただろ」

「……ごめんなさい、龍介」

「いや、別にいいんだよ。気にすんな。さあメシ食おう」

「……はい」

優奈の肩を叩いて立ち上がらせる。何故か妙な違和感を胸に抱えたまま――

○

リビングの小さなテーブルに、二人向かい合って座っている。

卓上に並んだのはベーコンに添えられた目玉焼き。味噌汁、それとごはんの三つだ。

まるで朝食の様な品揃えだが、一人暮らしの生活とは大体こんなものだろう。

テレビにはしょうもないバラエティ番組が映し出され、そこでは若手の芸人達が自分の未来をかけた芸を必死でこなしている。それを見て笑ってやるのが視聴者のやるべき事だろう。

という訳で。

「はははは、なんだこいつらつまんねええええ！」

「……」

ゲラゲラ一人で爆笑する俺。それとは対照的に、優奈は静かに俺の作った夕食を食べている。

実は、ホントはテレビの中の連中はとてもつまらない。無理して笑っているのだ。そして無理して笑いながら、ちらちら横目で優奈の顔を見ていた。

「マジつまんねえ何なんだこいつら俺の方が百倍面白い！そう思うだろ！な！？」

「……そうですね」

「やめろやめろ！芸人やめちまえてんだよ！なあ！」

「……そうですね」

「はははは、マジくだらねえ……」

「……そうですね」

なんだ。

なんだ、この優奈は。

こんな優奈、みた事が無い。

目に光が無い。

笑顔がない。

まるで彫像の様に静かだ。

「……」

これはギャグなのか？こいつなりの、俺達の間を取り戻そうとする努力なのか？

いや——違う。

優奈はいつだって自由に奔放だ。誰に頼まれるでもなく、誰に望まれるでもなく、ありのままだ。

だが——これは違う。

少なくとも、俺の知る優奈ではない。

「なあ——」

俺は、そのきっかけを今まさに掴もうとしていた。

「お前、誰だよ」

「……」

まるで、その言葉を待っていたかのように、箸を止め、俺の顔を見る。優奈は真っ直ぐ俺に視線を合わせ、ご飯粒の付いた口を開く。

そして——

「始めましてになりますね。私は、『アイ』といいます」

彼女——優奈ではなく、“アイ”はそう言った。

○

「……ごちそうさまでした。大変美味しかったです」

ぺこりと丁寧な頭を下げ、食器を持って立ち上がる。そしてそのま

まキッチンに持って行き、皿を洗いはじめた。

「……マジかよ」

あんな優奈の姿、いつも一緒にいる美香先生や黒霧が見ても驚くだろう。

というか、二人は既に知っているのか？この『もう一人の優奈』を。確かに俺は優奈と殆ど毎日一緒に居るが、それは昼休みや放課後などの長い時間の間で、授業中ではまず会わないし体育の時間も優奈は外に出てこない。

その時間は保健室か図書室に籠って、美香先生と勉強やらなんやらをしている筈だ。たまに授業をさぼった黒霧に図書室で会っている様だが――

「美香先生なら知ってるかも……」

明日相談してみよう、と決断した所で、優奈――いや、『アイ』とやらがリビングに戻ってくる、

『アイ』はやっぱり光の宿らない半開きの寝ぼけ眼で俺を見て、言った。

「龍介……お風呂に入りますか」

「え？あ、ああ、そうだな。入ってもいい時間かもな。ははは……」
他人行儀全開な俺を横目に、『アイ』は風呂場に向かった。そこはトイレと一つになった簡単な所だが、毎日綺麗にしてあるのが俺の密かな自慢である。

しかし、どうしたものか。

「どう接すればいいんだ？」

いまだ『アイ』と言う豹変した優奈の事が信じられず、頭を捻る。俺の中では『これは優奈の悪戯』だという考えが未だに大半を占めていて、どうにかしてそれを暴こうと考えを巡らせているのが今の俺だった。

「しかし、どうしてあんなったんだ？」

きっかけはどうやら俺の黒歴史ノートを破った時だった様だが。別に大切な物でもなかったし、見られて困るものだがそこまで酷い

ものではない。年頃の能力者なら誰でも経験はあるはずだ。

「第一あれ書いたの小学生の時だし……」

「龍介」

「俺だけが書いたんじゃないかったし……って、おわあ！いつの間に！？」

背後に『アイ』が立ち尽くしていた。『アイ』は俺を無機質な眼で見つめている。一体何を考えているのか。

「お風呂の用意が出来ました」

と、淡々と告げる。

「あ、ああ……じゃあ入るか」

「……」

ダメだ。何を言っているやら解らない。俺は物事をハッキリさせるのが苦手らしい。それとも自分自身が知りたくないのか。だが、この事はハッキリ伝えておく必要がある。

「な、なあ。さっきのノートの事なんだが」

「……はい」

「気にしないでいいからな、あんなの。ただのガキの落書きなんだし……」

「……」

俺はそれだけ言って、さっさと風呂場に向かった。

風呂場は『アイ』が綺麗にしてくれていた。この場所は毎日寝る前に風呂のお湯を抜き、綺麗に掃除のが日課だった。

だが今日はいつも以上に綺麗にしてあり、とても気持ち良く湯舟に浸かる事が出来た。

「はあ……」

しかしこれからどうするべきか。このまま優奈——『アイ』を連れて帰るか？

それとも泊めてしまうのか？

「いやいやいや、泊めるのは無いだろ」

いくら友人とはいえ、相手は女の子だ。気軽に『じゃあ泊まってく

？』なんて言う事は俺には出来ない。

優奈なら言えそうだが、あいつと四六時中ずっと居るなんてどう考えても頭が痛くなる。

優奈が普段どんな私生活プライベートを送っているのかは不明だが、風呂から上がったなら、優奈を家に帰してやらなければならない。

「でも……」

さっきまでの優奈（アイ）の様子から、このまま家に帰してもいいのだろうか考える。

どう考えても尋常な様子ではないし、あまりに謎が多すぎる。せめて、いつもの優奈に戻ってほしいが――

「お湯加減はいかがですか」

「うん……悪くない……って、なんで居るんだよ!？」

いつの間にか、浴槽とトイレを仕切るカーテンが開かれ、『アイ』の姿があった。

しかも、いわゆる『産まれたままの姿』すっぱだかである。

「キヤーッ!!」

と、『俺』が叫んで異性に見られたくない“おとこのこのだいいじなところ”を隠し、頭まで湯船に浸かる。そして、浮かびあがる。

「おっお前なんで居るんだよ!？」

「……お背中を流そうと」

「そっ、そんなサービス誰が頼んだ!早く出てけ!」

「……」

年頃の男子には嬉しすぎるイベントなのだろうが、状況が状況なのでテンパるしかなく、しかも毎回不意打ちの様に現れるので対処に困る。もちろん、この時も『アイ』の方は向いてない。俺は限りなく紳士のつもりなので、“おんなのこのからだ”がいきなり目の前にあるとソッポを向いてしまうのだ。

「は、早く出て行けよ!」

「……いやです」

「はぁ!？」

「『優奈』は貴方に好かれないと思っています。貴方に必要とされたい。貴方に必要としてほしい。貴方に、貴方を貴方が貴方……」
ぶつぶつ言いながら、『アイ』はゆっくり湯船に足を浸ける。

この風呂は勿論一人用なので、俺は自然に膝を曲げて縮こまる。

『アイ』はついに両足をつけ、恐らく俺を見下ろしているのだろう。目を瞑った俺には気配でしかその様子を探る事が出来ない。だが、その視線だけはひしひしと感じる。

「……龍介」

「は、はい!？」

「龍介は『優奈』の事、どう思っていますか」

頭上から声がかかる。

どう? どうとは?

質問の意図はともかく、俺は優奈に対する今の思いを呟く事にした。

「ゆ、優奈は……俺にとっての優奈は……なんつうか、妹っていうか、そう、手のかかる妹だ。ほら、俺ってちょっとした事情で兄弟が多いから、妹みたいに思ってた。同年代だけど、そう、妹だよ」

「……」

「でも――」

優柔不断な俺の、恐らく底の底に眠っているだろう、この言葉。

多分、今言うのは恐らく早すぎるだろうし、実際そこに『恋愛感情』が含まれているかは定かではないけど――

「俺は、優奈が好きだ。好きだと、好きなんだと思う」

「……そう」

『アイ』が呟く。

「……ですが、私は貴方が嫌いです」

冷やかな声。俺は少しだけ、目を開く。お湯の温度がやけに温く感じる。

「私は貴方が嫌いです。『優奈』の事だけを見てくれない貴方が、『優奈』を必要としない貴方が、『優奈』を愛していない貴方が――殺したいほど憎い」

「……」

それは確かに殺意だった。一瞬、風呂のお湯が冷たく感じるほどに。

「お前は……誰なんだよ」

余りにも今更過ぎる質問だ。優奈が豹変した時にしておくべきだったに違いない。

だが、しかしもう遅い。遅すぎたのだった。

「私は『アイ』。優奈を守るために生まれた人格……」

そういうと、『アイ』は風呂から静かに出て行き、俺一人残される。俺はようやく足を伸ばし、ふうう、と大きく息を吐いた。

『アイ』——優奈の別人格。

あいつはいつも笑顔だった。他人からどんな事をされても、どんな事を言われても、あいつは笑顔で、たまに怒ったりするけどすぐに笑顔に戻って——泣いたり、悲しんだりしている所を見たことが無かった。

『アイ』——とは『哀』なのか。

喜怒哀楽の、哀。

優奈に欠けている感情——

風呂から上がって、リビングに戻ると、『アイ』の姿は無く、書置きに「帰ります」と小さく書かれてあった。俺は自分の食器を片付けると自室に戻り、散らばった本やら雑誌やらを片付けると、すぐに寝てしまった。

食堂で歌われたり、天ぷら取られたり、友人が豹変したり——今日も変な一日だった。

○

「ん……」

眼を開くと、何故か周りがまだ真っ暗だ。おかしい、俺は規則正し

く朝6…30頃に起床するのに。

「どこだよ……」

床が冷たく、何故か大理石の床みたいに硬い地面に寝ていたらしい。しかも、結構狭い場所らしく、頭上や左右から何となく圧迫感を感じる。ここは廊下なのか。

「……」

とりあえず立ち上がると、俺は両手を前に突き出し、辺りを探りながら歩き出した。

と、すぐさま床と同じ感触の壁に触れる。やはりどこかの廊下であるらしい。

「まじでなんだこれ」

自分が何故こんな所に居るのか、さっぱり思い出せない。

確か、『アイ』が帰った後、自分の部屋で寝たはずだ。

「じゃあ、これは夢……？」

自分の意識がある夢を見るのは初めてだ。朝になっても覚えているだろうか？

とりあえず、俺はこれを夢だと確信し、歩いてみる。

「暗いな……」

しかも、無音。この空間には自分の声しか響いていない。

ただただ真っ直ぐ歩いているが、一体どこに繋がっているのか、一寸はおろか何メートル先まで真っ暗で、この道に終わりは来るのか――目が覚めるのが先か。

「……ん」

光だ。

わずかな光明が、ここからずっと先に見える。

それは黄昏時に見える一番星のごとく小さなものだったが、確かな輝きを放っている。

俺は砂漠でオアシスを見つけたかのような安堵を得て、それが幻か疑う事も忘れ走り出した。

その光とは一体何なのか、そしてここはどこなのか。

光がだんだん大きくなる。

それはやはり出口であるらしく、近づくにつれ長方形の形になっていく。

加速する。夢の中だからどんなに急いでも疲れない。

ましてや地面から足が離れ、飛んでいるかの様な浮遊感に囚われ、ただ何も考えず心の赴くまま光を目指す。

そして――

「――っ」

外に飛び出す。

ぼやけていた視界は、次第に明るくなり、懐かしい焼け焦げたアスファルトと燃える鉄の匂いが全身を包んだ。目を見開くと、そこは地獄だった。

互いにくっつき合って原型を殆ど留めないまま、その役割を終えた自動車。

燃え盛る道路。

燃え盛る人間。

結晶に変わっていく人間。

結晶に変わっていく車。

結晶に変わっていく炎。

子供が血まみれになりながら親の姿を探し、親が血まみれになった体を引きずり我が子の姿を探し、ペしゃんこになった車の下から真紅の血が流れ、同じ色をした炎の中に消えていく。

それら全てがその姿を殆ど留めたまま、青白い光の中に包まれ、次の瞬間に結晶に変わっていく。

地獄の空には巨大な怪物が居た。

目から蒼い光を放ち、人間を、車を、道路を、炎を結晶に変えていく。

この光景を、俺はよく覚えている。

つい最近サンフランシスコで起こった異次元生命体の攻撃によるもの――ではなく。

10年前。

日本に最後のエルファスが現れた時、俺はそこに居た。父と、母と、母の胎内にいた妹と一緒に。

奪われた、俺の家族と供に――

「……」

俺は、ただ呆然とこの光景を見ていた。

あれから何年にもなるし、記憶から忘れようとしていたものだ。

何もできなかった自分。

何もしようとせず、両親が結晶になっていくのを見つめている自分。

この様な地獄を作り上げた存在と■■■■■っている自分。

いや、今となっては全てが曖昧な記憶の中にある。

何故今自分がこんな所に居るのか？

何故今こんな夢を見るのか。

「……」

今なら助けられるのか？

あの時救えなかった家族を、周りの人達を――

「……」

――今なら――俺は――

『……け』

いや、俺の力は、全然大したものじゃない――

自由に物を持ち上げる事が出来るなんて、自分の体重より遥かに少ないものだし、ひっくり返った車なんか何時間掛かっても数センチ浮かす事すら出来ない。

俺の力じゃ誰も救えない。

俺の力何かじゃ、何も守れやしない――

俺は、ヒーローには成れないんだ。

『龍介……』

「誰だ……さっきから俺を呼んでるのは」

あちこちから轟音が響いている中で、かすかだが確かに聞こえていた。

それは俺の頭の中に直接聞こえていたが、俺は聞こえないフリをしていた。

周りの景色が、霞んでいく。

それは俺の目に溜まった涙のせいだけじゃなく、空間自体が歪んで形を変えようとしているからだった。

声に導かれるまま、悪夢の先へ足を一步踏み出す。

するとそこは先ほどの地獄とは比べ物にならないほど美しい、大草原だった。

風が駆け抜けていく。余りに広く、そして空も澄み渡っている。

こんな場所、地球上で見る事が出来るのはモンゴルくらいだろうが、少なくともこの場所は実際あるモンゴルの草原とは全く関係ない筈だ。

なぜなら、モンゴルの草原に幾つもの巨大な塔は建っていないし、空に卵のような球体が浮かんでいる事も有り得ない。その球体――俺からすぐ近く、他の物よりも低い場所にあったそれに近づき、中を見てみる。

「……なんだ、これは」

胎児だ。

球体の中には胎児が入っていて、しかもその胎児の背に小さな翼が生えている。

まるで、天使の卵であるかの様だ。

そんな卵が周囲に無数に浮かんでいる。ここより遥か空にも卵が満ち溢れていた。

シュールというか、不気味というか、さっきまでの地獄絵図より幾ばくかマシだが、それでも不安はぬぐい切れない。それよりも、この悪夢はいつ終わるのだろう。自力で何とか起きようとしても、目が覚める事が出来ない。

自分の体ごと、この世界に来てしまったかの様だ。

『龍介……』

「それと……さっきから誰なんだよ！お前は！！」
叫んでも目が覚めない。いよいよ焦りだす。

「明日も学校なんだぞ！！ここから出せ馬鹿野郎！！」

死ね、くたばれと汚い言葉を吐き散らす。さっきの思い出しくな
かった地獄を見せられて、相当に頭に來ているようだ。冷静にそん
な事を考えながらも、俺は止まる事が出来ない。

見ず知らずの謎の声に向かって、全力で叫ぶ。

「ここはどこだよ！！てめーは誰だ！？俺に何の恨みがある！！ふ
ざけんな！！」

「静かにしなさい！！」

「ああ！？」

突然の幼い声に振り向くと――少女がいた。白い質素な服を着た、
小学生くらいの少女だ。

しかし、その背中には純白の翼が生えている。

この風景に見事にマッチングしていて、どこか幻想的な印象を得る。

「……お前誰？」

「ふん。あんたなんか名乗る名前はないわ」

と、少女は腕組みしてそっぽを向く。

俺は近づいて、その丸い頬を摘むと、遠慮の欠片もなく力一杯抓る。

「~~~~~~~~！！」

少女は声にならない声を上げるが、俺は極めて冷静に事を続ける。

「誰だって聞いてんだろクソガキ。年上に対する礼儀がなってねー
ぞ」

……大体こういう言い方をする大人ほど実際大したことが無いヤツ
なのだが、ここは置いておく。

「は……はにやしにやしゃいよ！」

「うるせークソガキ。お前は誰だ。ここはどこだ」

ついに両手で少女の頬を抓る。しかも、力の限り引っ張る。しかし
奴が涙目な事に気づくと、流石に力を緩めた。が、その時。

「! ! ? ! ! ? ? ? ! ! ? ? ?」

「ふん。レディの顔を何だと思っているのかしら。それは制裁よ、真堂龍介」

[~~~~~! !]

「さて、そろそろ本題に入ろうかしら。ここにニンゲンが来れる事なんて滅多にないし、あんたがここに居られる時間ももう残り少ないし。それに、あんたにとって危機も近づいている」

「は……危機……だと」

「選択の時よ、真堂龍介。あんたの選択次第でこれから全てが変わる」

「なんだよその安っぽい三流RPGに出て来る様な台詞は」

「どういう意味だよ……」

「あんたの行動次第で、あんたの周りの者の運命さえも変わる」

「なんだそりや……」

少女の足が頭から離れ、ようやく引いてきた痛みに立ち上げる。少女を見つめると、少女は真っ直ぐ、俺を見つめていた。そこにふざけた様子が全く見られないのは俺でもすぐ解った。

「あんたの真の能力は念動力なんてチンケなもんじゃない。あんたが動かしているのはありとあらゆる存在の『運命を動かす』能力なの」

「運命を動かす……って、んな馬鹿な」

呆れて嘆息する俺に構わず少女は続ける。

「その力を使うには、あんたの意思の力が不可欠よ。あんたの意思に『エルゴ』は宿っているの」

「は？ エスカルゴ？」

「えい！」

「どわっ！ あぶねえ！！」

わかりやすくボケた俺に、再び容赦のない突っ込みが入りそうになるが、ギリギリで回避する。

「やるわねお兄ちゃん……」

「は？ いまなんて？」

「な、何でもない。とにかく危険が迫っているの！ すっごく危険！」
少女は手足をバタバタさせて訴える。

その様子が可愛く思えてしまい、俺は無意識に少女の頭を撫でていた。

「な！ なにするのよ！」

「いや、なんとなく……」

「なんとなく触っても痴漢になることしらないの！？」

「でも顔真っ赤だぞ」

「えい！」

「だから股間はやめろ！！」

俺は少女に掴みかかり、二人で取っ組み合いになる。草原の上を転げ周り、死ね、お前が死ね、バカ、アホ、ロリコンなどの子供じみた口げんかを繰り広げ、しばらくしてお互い汗だくになったまま起き上がる。

「はあ……はあ……で、お前誰なんだよ……ここどこだよ」

「今更な質問ね……私が誰なのか言えないけど、言っても信じない

でしょうけど、とりあえずここは安置所っていうところ」

「……安置？」

周りに浮かんでいる卵を見る。

「あの卵は『再誕』を迎えようとしているの」

「再誕……？」

「邪悪の手から守るため、ここに置いてあるの」

「邪悪ってなんだ？」

「あなた達の言うべきところの異次元生命体エルファスかしら。でも、『選定官』の方じゃなく、『執行官』の方だけ」

「……えっと」

意味が良くわからない。この娘はエルファスを知っているようだが。
「『選定官』は『終末』にむけてニンゲンを選んでいるの。再誕を迎えるべき『原罪』を持たない人間を。しかし執行官は違うの。どんな命だろうと破壊する」

「……」

「終末は日に日に近づいているわ。運命の少女も生まれちゃったし、後は原罪を持つニンゲンがどれだけ残るかなんだけど……聞いている？」

「聞いているには聞いているけど」

「起きてここの事をどれだけ憶えていられるかわかんないんだから、しっかり聞いておくのよ」

「んな事言われてもそっちの専門用語ばかりで理解できる訳ないだろ！視聴者置いていくな！」

「ああもう！なら洗いざらい喋ってやるわよ！まず私の事から！」

「お前の事からかよ！」

今更だな！と立ち上がった少女に言う。その時風が吹き、腰まで伸びたウェーブがかった髪が、日の光を浴び金色に輝く。それを見たとき、俺は再び、どこか懐かしい感じを覚えた。

「なあ……」

「私は……って、なに。時間がないから質問は手短に」

「お前さ、どこかであつた事ある？」

「……」

少女は目を少し見開く。しかし、

「会ってる訳ないでしょ」

顔を背け、ふん、と鼻であしらう。その生意気な横顔も、どこかで見た様な……。

「……だよな、気のせいかな」

誰かに似ている気がしたんだが。

少女は少し悲しそうな顔を見せた後、再び俺を見て、言った。

「私……貴方に会う前に、ママのお腹の中で死んじゃったんだもん」

……

……

……

……は？

「お前何言ってた……って……なんだ、夢か」

——体を起こすと、カーテンの隙間から差し込んだ光が丁度顔にかかり、眩しさに目を細める。

昨日は訳がわからん一日だった。優奈はどうなっただろう。

「まあ……学校行つて見ればわかるか」

ベッドから降りて、リビングに向かう。

その時、ふとベッドの方を振り向いた。

「……なんか、変な夢を見てた、様な……」

自分の声に驚いて目が覚めたのだから、何かの夢を見ていた筈だが、はたしてどんな夢だったか。

夢を見ていたのか、本当は見えていなかったのか。

朝食を作り終える頃には、そんな事づくにどうでもよくなっていた。

優奈に会ったら何を話そうか、そんな事ばかり考えている。

『アイ』についてもおしえてくれるだろうか？

今朝のニュースに、どこかのビルが炎上したという映像が映し出されていた。

俺は特に何の感慨も浮かばず、朝食をとって学校に向うのだった。

今日も俺の平和な一日が始まる事を、願って。

#2／END

#3／お嬢様の逆襲

気分は極めて最悪だった。

昨夜の優奈の豹変について、保健医の綾小路美香先生に何か聞こうかと考えていた。

一学年の頃から付き合っている先生なら、もしかすると俺の知らない優奈を知っているのではないか。

そんな事で頭の中を一杯にしていたから、校門に近づくにつれ自分の身にも危険が迫っている事に全く気づいていなかったのだ。

「よう真堂。ちょっとツラ貸せよ」

と——いまどきの不良でさえあまり言わないようなテンプレ的なお誘いが、校門を抜けたばかりの俺に降りかかる。その声のあった方を向くと、案の定そこには不良がいた。

彼——石動獅子は浅黒く焼いた肌に薄焦げたような金髪をオールバックにさせ、ピンセットやら細めのバンドやらでデコレートし、その顔は霊長類よりも爬虫類の方に極めて近い。百人が彼と会話したあと百人全員がこう言うだろう。

『初見で殴れる奴』と。

こんな感想をこの学校の生徒はみな持っていて、彼は誰もが認めるこの平和な山瀬高校に数少ない不良である。

勿論、俺も嫌いだし最も関わりたくない人間であるのだが——

「先輩……はよざーす」

「おう。授業始まるまででいいからよ、ちょっと相談に乗ってほしいんだわ」

と、むりやり肩を掴まれ、連れて行かれる。勿論人気の無い方へ。俺は誰か助けられないか、周りを見るが、目を合わせた皆がすぐに視線をそらしていく。

おそらく、俺と先輩の二人に関わりたくないのだ。薄情だと思うも、

自分が第三者だった時の事を考え、仕方ないと諦める。

肉食動物に捕食される草食動物を助ける仲間が居るだろうか？アフリカのヌーの大群やラガゼルやら、群れの中で生活している彼らでも、自分の命が一番大切なのだ。

誰か助けてくれ。ワニでもカバでも、なんならキリンさんやゾウさんでも……。

「おら、はやく来いって」

「わ、わかりましたから、離してくださいよ」

こんな時なのに仁は居ない。俺は諦めて先輩に従うしかなかった。

○

こうしてやってきたのはお約束というか体育館の裏である。

先輩は階段に腰掛け、早速ポケットからタバコを取り出し、口に咥えた。

俺は一連の動作を立ち尽くしつつ見つめ、先輩が口を開くのを待つ。というか、話があるなら早くしろ。

と胸の中で呟く。勿論、はっきり口に出しては言えない。

「いやー、まじ俺困ってんだよなあ。いや金の話じゃねーよ？」

ブハア、と豪快に煙を吐き出し、先輩は得意気な顔で言う。殴りてえ。

ちなみにこの人に五千円貸してあるが、未だもって返ってきていない。

「いやー、この前うちの女子にコクられちゃってさあ、ああうちつつても三年じゃあねえんだ。お前んとこの学年」

「はあ……」

いったいどんな酔狂な奴がこの爬虫類に愛を告げたのだろうか。

第一、不良に憧れている女なんて見た目もほぼ不良に近い、どこかの部族の様に無駄に手足の爪が派手な奴とか髪が異様な姿を醸し出しているような奴だろうが（↑俺の偏見）、この学校にそんな連中

が居るなんて聞いた事がない。

髪を薄く染めたり肌を軽く焼いたりしている奴なら見たことあるが。その点に関して言えば、この先輩は本当に貴重な『不良』のカテゴリに属している。ただし、誰もありがたがらない。というか居なくとも構わない。

「まじビビるぞ。俺も最初はドッキリかなんかと思ったがよ、実はマジっばいんだわ。一応はまだキープしてんだけどよ」

げへへ、と煙を吹きながら笑う。殴りてえ。

「で、誰なんですか、そのアホ……じゃなかった、その子」

「おう、聞きてえか？聞きてえよなあ。ああでもどうすっかなあ」
「……」

すでに俺の頭の中では数回コイツを半殺しにしていた。

もう間も無くホームルームが始まるというのに、コイツはいつ喋るのだろう。帰っていいかな。いいよな。

「ああやっぱ言うわ。えっとな、笹原っているだろ？あの金持ちのその子だ」
「……………」

「……………え？」

笹原——この学校ではたった一人にしか当てはまらない苗字。

笹原、詩音。

超絶お金持ちで超絶美少女、超絶頭良くて超絶運動もできる超絶優等生がこんな超絶バカヤンキーに、告白した、だと？

「嘘だああああ！！ありえねえ！！笹原がこんなバカに!？」

「ああ!？テメー今なんつったあ!?!？」

「いえ、なんでもありません、バカヤロウ先輩」

罵倒は常に副音声でお送りするのが紳士の常識。たまに本音が漏れてしまうのはご愛嬌である。

しかし、その衝撃たるや、この俺に本音を漏らさせてしまう程のもので、恐らく彼女を知っている生徒が聞けば、皆このようなリアクションをとるに違いない。

と、ここで昨日のお昼、食堂で騒ぎの発端となった男子生徒達の会話が思い起こされる。

「ところで先輩、告白された所、誰かに見られました？」

「ああ？ そうだな。下駄箱の所で告られたからな……聞いてた奴がいるかもなあ」

そうだったのか。しかしよりによってこの爬虫類とは。じゃあもうやはり付き合っているのか？

「で、話はこっからなんだが」

吸い尽くしたタバコを階段に押し付け、そのまま茂みの向こうに投げ捨てる。喫煙者の常識から程遠い行いだ、先輩は気にした様子もなく続ける。ちなみに、先輩は勿論未成年者だ。

「お前、今付き合ってる女、いねえよな」

「……いませんけど」

「なら笹原と付き合え」

「へ？」

一瞬、頭が空虚になるが、確かに先輩の言った事は俺の幻聴ではないらしい。

先輩はおもむろに携帯電話を取り出すと、その画面を俺に見せ付けてくる。

それは全ての携帯端末に存在するであろう『アドレス』で、そこには全て、女子の名前が映し出されていた。

「なんすかこれ」

「今俺が付き合ってる女達だ」

「はああああ！！？」

軽く10人以上はいる。『りーこ』やら『あーこ』やらあだ名で登録されている。

「う、嘘でしょ！？ 10人同時交際とかどっかの部族じゃあるまいし！」

「カッ！ まあパンピーのお前がビビんのも無理はねえ。まあ俺程の男になりゃあ勝手に女が寄ってくるもんだからな。まああゝパンピ

「のオメエーにはわかんねえだろーがよお」

二回言うな。

二回言うな。

二回言うな。

先輩はさらに得意気に調子づいて言った。

「んでよ、流石にこれ以上増えられるのも困りものなんでな、お前に預かってほしいんだわ、笹原を」

「ど、どういう事なんすか」

「だ〜か〜らあ〜、俺が手を付けるまで他の野郎から守れっつう事だよ！なんかよ、やっぱお嬢様っつうのは他の女とは違うみてえでよ、世間知らずっつうか男を知らねえっつうか、金もってる女なんて遊びまくってるもんなんだが、笹原は別格みてえなんでよ。まだ処女らしいんだわ。まだ男と付き合った事が無いんだと」

処女——青少年のみならず、男なら誰でも反応してしまう単語だ。しかしこの肉食獣にとって処女なんて恰好の獲物だろう。

先輩の世のお嬢様に対する偏見を可能な限り込めた言葉は俺を不快にさせるだけだ。

「でよ、俺実は処女とか苦手なんだわ。何かと扱いづれーし。遊びなれてる女のほうが扱いやすい」

「そ、そうなんすか」

「まあドーテーのお前にはわからん事だろうが、とにかく処女はめんどくせえ。昔一回付き合ったことがあるが、別れる時がすげえ面倒だったのよ。だから知り合いに押し付けてやったわけだが」

「……最低だな」

「あ？今何か言ったか？」

「それより先輩、俺に笹原をどうしろって……」

「だから他の野郎から手エ出されないように、お前が付き合うんだよ！もう笹原に話は付けてある」

「ええ！？」

いったいどういう事なんだ？

「ただし手は出すな。キスもチョメチョメも駄目だからな。手エ出すなっつっても手エ繋ぐくらいは許してやる。お前もそのくらいの経験はしといた方がいい。でもそれ以上は駄目だ。子供だからな」失礼な、俺も女の子と手を繋いだ事ぐらいある。

しかし、急にそんな事を言われても、俺がどうすればいいんだ？

「で、でも先輩、笹原から告白されたんですよね？ だったら他の女と付き合ってる事教えれば……」

「バカかお前は！ なんで俺が告られたくらいで他の女と別れなきゃいけないんだよ！！ 告白されたら付き合うだろ！ ふつうは！」

普通は付き合っている恋人は一人だけだと思います。という言葉が込み上げてくるが、吐けない。

「でも他の彼女は……」

「大勢の女の付き合う事が男の——いや、俺のステータスだ！ 他の女とも断じて別れん！ 少なくとも俺からはな！！」

と、先輩は立ち上がって叫んだ。その態度に一変の曇りは無く、ありとあらゆるものがあるのままで、そこに凄まじい自信が生まれている。なんというか、あまりに堂々としすぎていて感動すら覚える程だ。やっぱ殴りたい。

「まあ、他の女達にも俺が他に付き合っている奴が居る事言ってねえんだけどな」

ニヤニヤ笑いながらそう言った先輩に対し、先ほどの感動が虚無に消えうせる。

堂々とハーレムを満喫している訳じゃない様だ。

「なんすかそれ……しかしよくバレませんね」

「うまくやってるからな。ヒヒヒ」
殴りてえ。

「先輩……」

「まあお前はいろいろよくしてくれる後輩だからよ、俺が笹原喰うまでしっかり教育してやってくれや」

「一体何を!？」

「男” っちゅうもんをだよ！性的な意味じゃあねーからな！じゃ、
ヨロシク
4649」

と、軽く手を振りながら先輩は去っていき、体育館裏には俺一人が残された。もう急いでもホームルームに間に合いそうもなく、いたいどうしたものかと考えつつ、この場を後にする。

○

笹原詩音はこの学園で最も人気のある女生徒で、言い方はあれだが不良なんかとは決して釣り合う人物ではない。

軽くウェーブのかかった髪は風に吹かれる度に辺りの注目を独占し、一片の曇りも無い瞳と常に柔和なる微笑みを浮かべた唇は多くの男子を魅了してやまず、トップモデルもかくやと言わんばかりのプロポーション――

誰も彼女と釣り合いがとれると確信している者はいない。だが、僅かな可能性に縋り、告白する者が後を絶たないのも事実であり、彼女に告白する事であるグループの仲間になる事を認められた者までいる程だ。

しかし――そんな名誉の戦死を遂げた彼らの屍の上に、なんの敬意も無く立つ男がいた。石動獅子先輩である。

先輩が何故あの笹原に告白される事になったのか――それは告白した彼女自身から明らかになるだろう。

「どうなるんだろうな……はあ」

『笹原をキープしておく』なんて恐れ多い事、一体どの口が言うのか。

それに、笹原本人も了解しているなんて、話が全く見えない。

「本人に会えば解るか」

と、俺は彼女が在席しているであろう2－B組の教室のドアに手をかける。

確か、ここには要も居たはずだが。

「おじゃましま〜す」

と、顔が出せるほど小さくドアを開く。明らかになる教室の雰囲気——生徒達それぞれがお互いのグループの中で会話をしていたり、一人で予習や読書をしている者も居る。なんの変哲もない、どこの教室と変わらない雰囲気だ。そんな中に要と笹原の姿は無い。

「いない……まあ、後でいいか」

先輩が話をつけているなら、向こうからアプローチを仕掛けてくるだろう。

「なら……保健室だな」

本当は先にこっちの問題から片付ける必要があった。

笹原の件は放課後にでも何とかするとして、昨日の優奈の事を美香先生に聞きに、保健室に行こう。

「あいついるのかな」

保健室の前に来た。そのドアに手を掛け、遠慮なく開く。そこには——

「あ……」

「ゆ、優奈っ!？」

今まさに、体操服から制服へと着替えを行おうとしていた優奈の姿があった。

体操服をたくし上げ、胸の下まで裾を持ってこようとしている。

そこにはどこも引き締まっていない、ぽっちゃり気味のお腹と、青いブラジャーが見えている。

しかし、俺を見た瞬間、優奈の顔はたちまち笑顔になり、着替え途中のまま、俺に飛びついてくる。

「りゅうくん!」

「うおわっ! な、なんて恰好してんだ!」

「えへへ、みかせんせいがうんどうしなさいっていうから、おそと

であそんでたんだよね。えっとね、ちようちよがたくさんいてねえ……」

優奈は俺を強く抱きしめたまま、楽しそうに――嬉しそうに言った。この優奈は、いつも俺が知っている優奈だ。

俺はその事実を確かめ、安堵するままに優奈の頭を撫でようとした、その時だった。

「優奈ちゃん、今日のお昼はどうす……って、なにしてるの!？」

「こ、こんにちわ美香先生……」

またもや見事なタイミングで現れた先生にぎこちない笑顔を見せる俺。

先生は嘆息した後、保健室のドアを静かに閉める。

○

「それで、今日はどうしたの？」

「えっとですね……」

ちらり、とベッドの上に仰向けになりながら、なにか分厚い本を読んでいる優奈を横目で見る。

俺と先生は椅子に腰掛け、俺は昨日実際にあった出来事を先生に離すタイミングを伺う――優奈は本に夢中になっていて、こっちに気づく様子はまだない。俺は椅子をひっぱり、色々な医学の本や資料が規則的に並べてある先生の居る机に近づく。先生はお茶を飲みながら、何かの資料に目を通している。

そして、出来るだけ小声で、先生に言った。

「あの、昨日優奈がですね……」

「あの子がどうかしたの？」

「シッ！小声でお願いします……!」

優奈の方を見るが、まだ本に夢中だ。

「……あの子に内緒なのね。で、どうしたの？」

先生は髪をかきあげ、顔を俺に近づけてくる。そのときふわりと軽く香水の香りが俺の鼻に届く。

「え、えっと……『アイ』ってやつの話なんですが」

「……！」

率直に本題を離し始めた俺は、その単語が出た瞬間に、明らかに先生の表情が変わるのを見た。

なんというか——知られたくなかった事を知られた時の様な、気まぐずい様な、そんな顔だ。

やっぱり先生は何かを知っている。確信が俺の中に生まれ、少しずつ肥大化していく。

「先生……」

「真堂君、その話……詳しく聞かせて」

先生は俺の目を真っ直ぐ見て言った。そのあまりの真剣さに少したじろいでしまう。

しかし、俺は少しでも優奈の真実に近づきたい——なんて、俺は少しだけ、感情的になっていた。

優奈の豹変と、『アイ』と名乗る謎の人格。

昨日の一件について先生に話す内、その表情がどんどん変わっていく。

もちろん、優奈にエッチな本を読まれてしまった事と、俺の黒歴史が刻まれたノートを見られてしまった事は伏せておき、とりあえず大事な事が書かれたノートを取り合った末に破れてしまった——という事しておく。

「……とまあ、こんな事があったんですよ」

「……そう」

美香先生の表情が硬い。明らかに触れられなくなかったモノに触れられてしまったという顔だ。

やはり、この人は『アイ』や優奈の秘密について多くを知っているのだ。

確信が俺の心の中で肥大化していく。

ふと優奈を見ると、さっきまで読んでいた本を投げ出し、ベッドに大の字になって眠っていた。

おおよそ女の子らしからぬフォームで熟睡していて、制服がみだれてお腹もショーツも丸出しだった。

「……ったく」

俺は先生が何かを言い出す前に、優奈に布団をかけてやる事にした。先生の机から離れ、四つ並んだベッドの二番目、優奈が独占している場所へと向かう。そこには英語でタイトルの書かれた分厚い本や、色々な数字が羅列している紙などパツと見て何をしているのか全く解らないものが散らばっている。

俺はそれらを隣のベッドに移し、優奈の腹を隠す。

「風邪ひくぞ、バカ」

「うにゃ」

優奈の口が開き、寝言とも唸り声とも取れる声が漏れる。さらに、

「んふふ……りゅうくん、それウナギじゃないよお……」

と、口の端から涎をたらし、笑顔を浮かべている。一体どんな夢を見ているのか。

俺は優奈に布団をかけると、その頭を撫でやる。優奈はまた「んふふ」と呟く。

「真堂君」

「はい？」

先生に呼ばれ、振り向くと、先生は険しい顔で俺を見ていた。

そして、おもむろに口を開く――

「申し訳ないけど……暫くの間、優奈ちゃんには関わらないでおい
てほしいの」

「――え」

一瞬、何を言われたのか解らなかった。

優奈に関わるな……？

先生は、確かにそう言った。そう言っていた。

「どうということなんです」

「……これは貴方には関係ない事よ。本当に悪いけど、私と優奈ちゃんの間でしか解らない事なの」

「そんな……」

納得できるか、という言葉を飲み込み、何故先生がこんな事を言うのか頭をひねる。

先生と優奈の関係——そういえば先生がこの学校に来たのは俺達が入学してきた頃で、最初の始業式で紹介されていた。それから優奈は保健室登校を始めたから——

「先生と優奈って昔からの知り合いなんですか？」

「ええ……」

先生は悲しげな顔で目を伏せる。そこには決して意地悪で俺と優奈を引き離すという意思は無く、本当に申し訳なさそうだ。

「ごめんなさい。優奈ちゃんはいつも貴方と遊びたい気持ちで一杯なの……それが……どうしてこんな……」

「先生」

「何……？」

「先生がそういうなら、暫く優奈には会わない。勿論納得した訳じゃないけど、俺だっていつも優奈の面倒見てる訳じゃないし、優奈には優奈の事情がある……」

自分で言ってて、言い訳がましい自分に少しだけ腹がたつ。でも、俺がどうした所でこれ以上は美香先生に迷惑がかかるだけだ。先生と優奈の関係に何があるのか、俺にはどうでもいい事だ。

しかし——それでも、これまで優奈と俺との交流の中で、ほんの少しでも築き上げてきた『信頼』があるはずだ。

それを先生が知らない訳がない。

俺に関係がないからといって、その全てがないがしろにされていいものじゃない。

「……別にいいすよ。優奈なんか俺の数ある友人の一人に過ぎないし、あいつにはいつも付きまとわれて少し迷惑だったし。まあ女子の方じゃ好きな方ですけど、好きって言ってもキャラ的なものだし、

でも調子に乗りすぎなんですよね。勝手に俺の部屋に入ったりするし。不法侵入っすよマジで——」

これ以上は言うべきじゃない。そもそも、本心ですらない——事実ではある——しかし、俺の口は閉じる事なく、苛立ちのまま、何の価値も無い無意味な悪口を紡ごうとして口を動かす。すぐそばで聞いている当事者にも気づかず。

「真堂君……気持ちは解るけど、後ろ……」

「え？」

振り向くと、そこには立ち尽くした優奈の姿があった。一体いつ起きていたんだ？

優奈は口をギュッと紡ぎ、これまた始めて見る——怒りの表情を浮かべていた。

眉をひそめ、閉じられた口の奥ではきつと歯を食いしばっているだろう。その瞳には明らかな怒りの色が浮かび、そして恐らく——悲しみも出てこようとしている。あの、『アイ』という少女が。

心臓が高鳴り、まずい、と思った時にはもう遅く、優奈はその手にしていた分厚い辞書を俺に投げつける。俺は視界一杯にそれが広がるのを認めた瞬間、鼻先に痛烈なダメージを負う。

「ぐあっ！！！」

かなり痛い。とんでもなく痛い。こいつ、どこにこんな力を隠し持っていたのか。俺は鼻を押さえ、しゃがみこむ。だがそれだけでは終わらず、優奈は掴みかかってくる。それに抗う暇もないまま、俺は押し倒され——頬に、思い切った平手打ちを受ける。

「ばかばかばか！！りゅうくんのばかぁ！！なんで、なんでなんでなんでええ！」

なんで、どうして、と繰り返す優奈。ビンタの雨も降り止まず、優奈の怒りも留まる事を知らない。

「りゅうくんはゆうなのともだちでしょお！？なんでそんなひどいこというのお！ゆうな、りゅうくんにひどいことしたことないよお！いじわるいったこともないよお！それなのに、なんでなんでなん

でええ!!」

「な……おまえ勝手な事言いやがって!ぐはっ!お、お前、人んち勝手に入ったり、誰にも見られたくないもの勝手に見たりしやがって!ぐあ!」

こ……こいつ、なんて力だ!こんな力を隠していたとは……!

優奈は自分勝手なことを喚きながら、俺を殴り続ける。その時保健室の扉が開かれる。

「な……一体何事なの?」

黒霧の姿がそこに現れた。こいつ、ここにはしばらく出入り禁止だった筈だ。というか先生は助けてくれないの?

「先生、これは一体どういう事なんですか?」

「それは……優奈ちゃん、もうその辺にしておきなさい」と、先生が優奈の肩を叩く。

が、優奈はそれでも止まらない。

なんでここまで——必死なのか。どうして、こんなに悲しい目をしているのか。

「りゅうくんのばか……ばかあ」

「優奈……」

優奈のラッシュがようやく止まり、俺の制服の胸倉を掴んだまま、俯く。

泣いている——様に、見えた。

しかし、涙は出ない。その顔は、昨日見たばかりの顔だ。優奈が豹変するまでの、悲しみに満ちたものだった。

「りゅうくんのばか……もうきらい……」

「お前な……わがままにも程があるだろ……」

「わがままじゃないもん……りゅうくんのばか……」

優奈は立ち上がる。そして、俯いたまま、開かれたままの保健室から出て行く。そこで、

「いたっ!うう……ぶつかちゃったよお」

ドアに体をぶつけ、フラフラと歩いてどこかへ行ってしまう。

俺は立ち上がると、並んだ黒霧と先生を見る。

「……」↑（黒霧。呆れたような顔で俺を見ている）

「……」↑（先生。どこか悲しそうな顔で、優奈が出て行ったドアを見ている）

「あゝいてえ。これ絶対腫れてるだろ……」

「そうね。まるでオタフクみたいよ。全くいい気味だわ」

「事情を知らない奴が言うな」

「事情を知らなくても何となく解るわ。あの子があんな風になるなんて、今まで一度も見たことないもの」

それは俺も同意せざるをえない。

俺が言い過ぎた事は事実だし、優奈を傷つけてしまった事も事実だ。原因を作ってしまったのは、殆ど俺だ。しかし、それに至るまでの事実は存在する。

黒霧はさっきまで優奈が眠ってたベッドに腰掛けると、美香先生に向かつて言った。

「先生、彼女が現れたのよね」

「ええ……」

先生は一度俺を見た後、黒霧を見る。

「まさか、真堂君がきっかけになるなんて——あの子、よっぽど追い詰められたのね。真堂君に」

「俺に——って、お前、まさか『アイ』の事知ってるのか？」

俺の問いに、黒霧は微笑んで肯定する。

黒霧まで、なんなんだ？ 優奈の何を知っているっていうんだ？

「なあ……あいつについて何か知ってるなら教えてくれよ」

一度先生を見た後、黒霧に聞く。しかし、黒霧は首を振って言った。

「貴方に言っても仕方ない事よ。だから言わない」

こいつもか——

仕方ない、関係ないと俺の気持ちを完全に無視した言葉が続き、イヤでも怒りのゲージが上昇していく。

ついさっき、その片鱗をぶちまけたばかりだというのに、なぜこう

も腹が立つのか。

俺は軽く拳を握る。足元に落ちた分厚い辞書を念動力で持ち上げ、乱暴に机の上に置いた。

テレキネシス

「そうかよ。なら別にいいけど……俺だって少しはアイツの友達のもりでいたんだけどな。ほんと俺の周りは理解しがたい奴ばかりだ！」

そう吐き捨てる、俺は二人の間を通り、この嫌な空気に満ちた場所の出口に向かう。

この瞬間にも後悔は始まっていた。後悔するなら言わなければいいのに。

それでも、口から出た言葉は二度と取り戻せない。

二人がどんな顔をしているのかわからない。俺の言葉にどんな感想を持ったのか——俺が保健室の扉を閉めるまで、二人の声が俺に届く事はなかった。

廊下には一人、心の弱い俺だけが歩いている。全く、最悪の気分だ。「しばらく会うな……か」

アイツと会わない一日を想像してみる。

俺の脳裏によぎったのは、屋上のいつもの場所で、特にすることもなく携帯電話をいじっている俺の姿だ。

自分の事ながら、その寂しい情景にため息が出るが、いつもの事だと無理矢理納得させ、教室に向かう階段に足をかけた。

○

放課後。

俺はいつもと違った気持ちで屋上に居た。

やっぱここにいるのか——と思う。しかし、俺は一人でここに居る訳ではない。

石動先輩との約束。

その為に、『学園のアイドル』と一緒に屋上の風を浴びているのだ。

「えっと……」

まず、口を開いたのは笹原詩音の方だ。柔らかな風にウェーブがかった髪が揺れる。そこが乱れぬようそっと手で押さえる仕草でさえ絵になっている。

「真堂君……石動先輩からお話は伺っていますか……?」

鈴を転がすような、上品な声である。

「あ、ああ。あの話、本当だったんだな……」

俺の中に期待していた『実はドッキリでした』という期待が瞬時に蒸発し、先輩に対する怒りが新たに産声を上げた。

そして同時にくる失望感――

「そうなんです」

笹原は両手を合わせ、微笑んだ。思わずその仕草に胸が高鳴る。俺は危うく恋に落ちそうになり、深呼吸する。

事の発端は、保健室での一件の後、教室に入ろうとした所を笹原に呼び止められた所から始まる。

俺はそれまで今朝の事を完全に忘れており、最初は何故笹原が俺に話しかけてくるのか首を傾げてしまった。

あの忌まわしい先輩と、それまで忘れていた約束の事を思い出したのは、笹原自身の口から「恋愛相談に乗ってほしいのですが……」という言葉であり、その瞬間廊下にいた他の男子生徒達の視線が一気に俺に集まる。俺は事実を受け止め理解する事に数十秒を要したが、何とか放課後に約束を取り付けると、そそくさ教室に入ってしまったのだ。

そして現在――再び俺と笹原は対峙している。二人きりでだ。しかし、現実やはり俺に非情で、話の内容は酷く腹の立つ事である。

すなわち、先輩との事だ。

「実は私、石動獅子先輩に告白をしました。しかし、今の私では駄目だと断られてしまって……」

と、笹原は悲しそうに目を伏せた。

あの笹原にこんな顔をさせるなんて、とより一層先輩に対する怒りが高まるも、そもそも何故笹原が先輩に好意を抱く様になったのか、まず事の発端から聞く事から始めるとして、一度呼吸を整える。

「あの、笹原」

「はい」

「笹原はなんであの先輩に告白しようと思った訳？ 笹原って結構他の男子から告白されてるよな」

「はい……」

またも悲しそうな顔をする。

「真堂君の仰る通り、これまでこんな私に好意を伝えてくれた方は大勢いらっしゃいます。ですが、我が笹原家のしきたりにより、そういった方々との恋愛絡みでのお付き合いは出来ない事になっているのです」

「……どういう事？」

シキタリ？ 『掟』がするのか？

笹原の様に立派な家柄ならそういう種の掟があっても不思議ではないが、俺が気になったのはまるで彼女自身がその事が気に入らないといった風に告げた事にあった。

「笹原家の女は全て、『強者』の下へ嫁入りを果たすという掟があるのです。家督を継ぐのは全て長男のみで、すなわち私のお兄様が家を継ぐ事になっております。ちなみに『強者』というのは『他者を思い労わる事が出来る者』の事です」

「ええ……！？」

思わず叫んでしまう。

掟そのものに驚いてしまった事もあるが、それよりあの先輩がその『強者』に該当するかどうか考えてもありえない事実によるものだ。

他者を思い労わる——あの先輩が？

ねえよ！と叫びそうになるが、それでも笹原の話を最後まで聞かな

くてはならない。

「す、すみません！私の家の事など今はどうでも良い事なのに、ぐだぐだと……」

心底申し訳なさそうに頭をさげる笹原。俺はそれをいさめるべきだった、逆、逆に納得してしまふ。

成る程、人気があるわけだ――と。

笹原の姿勢には他者への敬意が絶えず存在していた。

それは誰に対しても礼儀正しく接し、そこには社交的なものは少なからずあれど、決して卑屈などない『真の貴族』がもつ精神から来るものだ。

事実、こんな俺や取るに足らない存在である先輩にたいして敬意を払っている。

是非彼女の爪を煎じたものをあいつ等に飲ませてやりたい。誰かとは明言しないけど。

「い、いや笹原が謝る事じゃないから！確かに驚いたけど、笹原が先輩に対してそんな感慨を抱く様な事があったんだろ？」

「……！」

俺がそう言った瞬間、笹原は顔をあげ、ぱあっと笑顔の花をさかせつつ、俺の手を握る。

「そうなんです！真堂君の仰るとおりです！」

と、更に俺に詰め寄り、お互いの息がかかりそうな程の距離まで顔を近づけてくる。

その美貌、そのハートマークを映す瞳に危うく恋に落ちそうになるが、なんとか、なんとか耐える。というか、近すぎるんですが……。

「わ、わかったから落ち着いてくれ――」

「すみません、興奮してしまつて……」

笹原は俺から手を離すと、一呼吸置き、馴れ初めを話し始めた。以下、彼女の回想である。

<<笹原の回想>>

「ぼっぼぼぼ、ぼぼくぼく……」

「あの、ちゃんと聞いてますから……」

「あのあのあのあの、あのあのあ、貴方の事を好きにしたい、じゃねえ俺！」

——目の前の少年は取り乱しているのか、顔を真っ赤にして何を言っているのか全く聞き取れない。

しかし、笹原詩音に何を言わんとしているかは、彼女自身全て理解していた。

「ぼくぼくぼぼくぼくあなあなああた貴方の事が好きなんです！！つつつつ付き合ってくださいささささい！」

「……」

告白自体、される方にとっては悪いものではない。それは殆どの女子がそう思うに違いない。

しかし、他者の好意を受け入れるという行為は誰もが簡単に行える事では無い筈だ。

相手が良く知った者ならそれなりの感情は抱いているだろうから、結論を出すのはそう長い時間は必要としないだろう。だが、詩音の目の前にいる少年は今まで一度も会った事の無い人物だ。

いや、厳密に言うのなら廊下で何度かすれちがった事はあるだろう。そんな人物にいきなり愛を伝えられるという事は、詩音にとっては珍しい事じゃない。

だからこそ、確かめる事がある。

これまでの男達は皆、自分の家柄や自分の容姿にしか興味がなく、それらは上塗りされたただのメッキに過ぎず、本当の詩音自身に目を向けてくれようとした者は誰一人としていなかった。

目の前の少年は知っているだろうか——実は詩音が高級なフランス料理よりもカップ麺が好きな事を。

目の前の少年は知っているだろうか——実は詩音の趣味が武術の鍛錬であるという事を。

目の前の少年は知っているだろうか——実は詩音自身に家督を継ぐ権利は無く、家では兄以上の待遇を受けていないという事を。詩音は超能力者だ。

幼い頃から些細な事がきっかけで能力を発動させてしまい、家族や関係者に迷惑をかけてきた。それはその時の彼女自身ではどうする事もできなかったのだが、父の言葉をきっかけに力のコントロールをが出来るようになる為、太極拳を始め、数多くの中国武術の修行を始める。

そして、厳しい修行による肉体と精神の著しい成長により、僅か数年足らずで能力も自在にコントロールできる様になった時、詩音は始めて父に認められ、“掟”の存在を知るのだった。

『強者』の下につく事——それが笹原家の長女に科せられた鉄の掟である。

しかし、『強者』言ってもどんな『強者』とは明言されていない。それなので自分の心で見極める事が重要になるのだが、しかし、詩音はそれを言葉通りの意味に受け取ってしまった。それ故に、今から詩音は少年に『戦い』を挑まなければならない。

詩音にとって戦いとはすなわち『武術』を用いたものである。互いの拳を交え、本当の笹原詩音という女を相手に知ってもらうのだ。

つまり『決闘』という訳なのだが……

「どっどどどどこが好きっていういういういういううううととととと」

「……」

弱そうだ。

とても、弱そうだ。恐らく『丈夫力』ますらわちから 2くらいだろうか。

ますらおちから

——丈夫力とは、簡単に言えば戦闘能力の事で、詩音が勝手に名付けたものである。

しかし、それでも実際闘ってみなければ、相手の真の實力は図る事が出来ない。

もしかしたら目の前の少年が『陳家太極拳』の達人かもしれない。なので、まず『テスト』から始めるのだ。実は、大概の挑戦者はこのテストで脱落する。

そのテストとは——自分の持つ超能力を使う事だけで、簡単に解ってしまうのだ。

詩音は少年をぶっ飛ばす前に——己の力を発動した。その瞬間、

「……！？じ、地震！？うわわうううわああああああああ
！！」

少年の足元から、上に突き上げるような振動が襲う。まるで彼の周りだけで地震が起こっているかのようで——実際、その通りだった。少年は立っていられず、四つんばいになり、終いには地面に倒れこんでしまう。それほど大きな地震であるにも拘らず、校舎はおろか窓ガラスさえ微動だにせず、木々や花壇の花々も風に静かに揺られるだけであった。

「……残念です」

詩音は握り締めた拳を解く。それと同時に彼の周りで起きていた謎の振動はピタリと止み——静けさが戻ってくる。詩音は少年に「ごめんなさい」と一言だけ告げ、その場を立ち去る。

この程度の“振動”に耐える事が出来ないなんて、自分と闘うにはほど遠い。詩音はそう結論付ける。

残された少年は自らの身に起きた不思議な現象と、告白の失敗による二つの衝撃に暫く呆然しづれんしやとしていたのだった。

そしてまた、あらたな屍しづれんしやが生まれる。

笹原詩音に告白すると、謎の現象に見舞われる——詩音に考慮するか、それは告白したものだけが知る事のできる真実である。

詩音の『振動を操る能力』により、決闘の前のテストに受かった男子は未だかつてゼロである。そして詩音自身、自らの持つ力と今まで学んできた武術の『おいしい所だけ』を集めて編み出した『武神争覇』を披露出来る相手に会えず、とってもガッカリした面持ちでいつもの告白イベントをいつもどおりの結果で終える。



詩音は多くの人々で賑わう商店街を、気落ちした面持ちで歩いていた。

彼女の横を通り過ぎて行く男達は皆振り返り、恋人と居る者も関係なく、憂いを帯びた美少女の顔を見てため息をこぼす。

「はあ……」

詩音は退屈だった。それは普段の学生生活から来るものではなく、自分と対等以上に闘える力を持った武道家に出会わない事からだ。能力の制御の為に始めた修行はいつの間にか自分の趣味に変わり、いまや一日も欠かさないライフワークとなった。

父に頼んで色々なジャンルの武芸者と拳を交えてきたが、これまでに一度も自分を満足させた者はいない。

強くなりすぎてしまった——と、自分でも実感している。

そして同時に『本当の強さ』とは何なのか——と頭に度々よぎる。

詩音を憂鬱にさせているものは紛れも無く自分自身の心から生まれるものだったが、しかし彼女はそれに気づく事が出来ない。

「帰って新しい『必殺技』を考えましよう……」

と、誰に向けたものでもない独り言を呟き、自分の家へと足を向けた。

その時だった。

「オラッ！早く出しやがれッッ！！」

「ヒイツ！ユルシテクダサイ！！」

と、頭にターバンを巻いた褐色の男に絡んでいる屈強な体つきをした男の二人が、明らかに揉め事を起こしているのが見える。

そこは店と店の間に広がる路地で、その前を通り過ぎる者達は皆一度は「なにごとか」と伺うも、すぐさま知らぬ顔で過ぎていく。

まあ、訳のわからない男達の揉め事など自ら関わろうとする者など滅多に居ないだろう。ある超能力ミュージシャンを除いて。

詩音はその男と同じクラスだったが殆ど会話をした事がなく、またしようとも思った事すらない。

詩音は『歌う事』が嫌いな女の子だった。勿論友達とカラオケに行ったりもしない。

なぜなら彼女もまた、オンチだからである。

音楽の話で盛り上げられるのはクラシックのみである。

「これは……」

詩音は二人の男達を見る。明らかに助けが必要なのはターバンの男の方だ。そして、周りの誰もその人を助けようとする者はいない。

「コッ、コレガナイトワタシノカゾクハシンジャウアル！ドウカオナサケヲ！ドウカッ！！」

「インド人か中国人かハッキリしろよ！！」

「ワタシ、アナタトオナジチキュウジンネ！オナジチキュウジンドウシ、テヲトリアツテイキルノガニンジョウアルヨ！！」

インド人（？）は必死に男に訴える。ここは自分が行くしかない、と詩音の中で決意が固まると同時に、屈強な男と一戦交える事が出来るかもしれないと内心期待を込め、拳を握る。その目は完全に捕食者の目である。

しかし、いきなり相手を殴るのは犯罪行為であり、デュエルに発展する前に説得が必要である。その事自体、半分はバトルの為の建前であるから適当に考えつつ、二人との距離を詰める。だが、その時だった。

「俺の財布返しやがれ！！このドロボーが！！」

「オウルシオラー!!」

「え……?」と詩音の足が止まる。

見ると、屈強な男がインド人(?)の男から財布を取り上げていた。それは自分の持ち物であつたらしく、インド人(?)の男は彼からその財布を盗んだ窃盗犯だつたのだ。その時、詩音に電流に似た衝撃が走る。

「犯人はどこです!？」と警官が駆けつけ、「こいつです!おまわりさん!」と屈強な男がインド人(?)を掴みあげ、「シャチョー!サービススルカラー!!」とインド人(?)が涙を流す。

「あっお前!またやったのか!!」

「ウルシテクダセエ、ダンナァ!!」

「お前これで何回目だと思ってるんだ!？」

「エート、タシカ4回……」

「40回目だ馬鹿者!!」

「そ、そんなにやってたのかよ!警察しっかりしろよな!何の為に俺達の血税使つてんだよ!!」

「……君。年いくつ?」

「え?18ですが……」

「君、税金払ってないでしょ……」

「あっ、いけねえそうだった!」

『ハハハハハハハハ』

三人の笑いが暢気に木霊する。

詩音は愕然としていた。

自分は罪もない男を殴る気でいたのだ。

詩音は力の無い足取りで、その場を立ち去った……。

○

力とは何なのか。

優しさとは一体なんなのか。

今まで自分は何をしていたのか。

己の曇った眼は現実を映さず、物事の本質を掴む事が出来ない。

泣いていたインド人(?)は何度も罪を繰り返していた。

屈強な男はカツアゲをしていたのではなく、犯罪者から自分の大切な物を取り返そうとしていた。

自分は——もしかしたら犯罪の片棒を担ごうとしていたのではないか。

いや——もしかしたら、ではなく、あのまま彼らのやり取りを見ないまま突っ走っていたら、確実にそうになっていたに違いない。

詩音の目から、大粒の涙が溢れ出していた。

あまりに情けない。

あまりに惨め過ぎる。

そして、あまりに愚かだ。

「うう……ひっく」

流れ出したものを止める力さえ、今の詩音には無かった。

ただ、力なく歩き続けるだけだ。

家に向かう道さえ間違っているのだが、今の彼女が気づく事が出来ない。

通りかかった電柱の下で、ダンボールの中で寂しそうに震える子猫に気づかぬまま歩く。

だが——その時だった。

「おいおい、ひっでえ事しやがるもんだ」

「……？」

突然の声に振り返る。その声は自分にかけられたものではない事は確かだった。

何故なら、振り向いた所には自分と同じ学校の制服を着ていた男子が居て、その彼はダンボールから子猫を取り上げ、あやしていたのだ。

その男子生徒は金髪のオールバックにピンやらなんやらを取り付け、肌を先ほどのインド人(?)に近い色に焼き、校舎裏で告白してき

「あ、あのっ！」

「ああ？」

『ニャン！？（美、美少女！？）』

これが全ての始まりだった。

涙はすでに止まっていた。

目の前にいるのは、百戦錬磨のプロレスラーと同じ丈夫力ますらおちからを持った少年——すなわち、詩音にとって運命の男である。

自分はこれから彼に思いの限りをぶつけるだろう——そう確信していた。

どこまでも勘違いをしたまま、笹原詩音の恋物語が今幕を開けるのだった。

#3／END

#4／お嬢様の拳く衝撃！甘い玉子焼き＞

目の前には、頬を桃色に染めた笹原がいる。

正直、今の話の一体どこにあの先輩に惚れる要素があったのか、俺にはさっぱり理解出来なかったが、ただ一つ、理解できた事がある。笹原詩音はアホの子だという事だ。

この一言で一体どれだけの男子達を敵に回せるのか、想像に難くない。しかし、逆を言うならばそれだけ彼女の外見だけ好きになっている男達が多いということになる。

ついさっきまでの俺もそうだったが、話を聞いてしまった身として言うならば、逆に親近感が生まれてしまったということだ。これは別に悪い事ではない。

目の前の美少女は別に違う次元に住んでいる訳では無く、恋愛に対するちよつと変わった価値観と感性を持った女の子なのだ。

俺はそう結論付ける。実際俺の周りに居る様な奴らと殆ど変わらない、普通の少女だった。

……俺の周りには、やっぱり変な奴しかいない（勿論自分を除いて）。

でも、こんな笹原だからこそ、あの爬虫類先輩とくつつけたくないという気持ちがどんどん大きくなる。

笹原にはもつと相応しい相手がいるはずだ。

数え切れない程多くの女の子と同時交際するような日本男児の風上にも置けない奴と、くつつける訳にはいかない。笹原が傷つくだけだ。

何とかしなければと考え始めた所で、笹原が先に口を開いた。

「真堂君は……結構女生徒のご学友の方がいらっしゃいますよね」

「へ……？　そうかな？」突然の質問に虚を突かれ、何を言おうか全て飛んでいってしまう。

「はい。黒霧さんや要さんとも仲が良い様ですし、あの巫さんかなぎとも

仲がよろしいのでしょうか？」

「ま、まあね」

確かに付き合いの多い女子と言える。

しかし、笹原は何故こんな事を言ってくるんだ？

「それに、この前生徒会長の三日月先輩と親しげに話しているのを見ましたし、保健医の綾小路先生や風紀委員の久遠さんとも話をしていました」

「そ、そんなことあったかな……」

思い返そうにも、委員会の連中や教師との会話は結構良くなる事なので、日にちまでは特定できない。

「なんでそんな事聞くんだ？」

「あ、いえ、別に真堂君に女の子の友達が多い事は悪い事ではないんですが、その、もし真堂君の事を気にしている女の子が居るとしたら、自分以外の女の子と親しげに会話する真堂君を見てどう思うか……と」

「え……」

「あ！私は違いますよ！？これはちゃんとした相談なんですから……うん、誰も見てません……えっと、でも色んな女の子と親しげにしていると、言われのない中傷を受けてしまう事もありますし……これから私の相談に乗ってもらう訳ですから、その、周りの人達にはちゃんと説明した方がいいと思って……私のせいで真堂君が悪く言われるのは嫌ですから」

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！

『恋愛相談を受けていたつもりが恋愛に対する余計なお世話を焼かせていた』

な……何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。

なんて、どこかで聞いたようなフレーズが自然と出てくるほど、衝

撃的な事だった。

何言ってんだコイツという言葉が思わず飛び出そうになる。

というか、笹原は俺と女子が話しているのを見るたび、こんな事を思っていたのか……。

「笹原……」

「はい？」

「俺の事どう思ってるかなんてそっちの勝手だけど、今は俺の事なんかどうでもいいだろ」

少し言い方がキツかったかもしれないが、早く問題を解決して開放されたい。なんかもう、俺の中で笹原の評価が下がりっぱなしだ。これ以上笹原の残念な部分を見たくないという、自分勝手な気持ちだが――

「す、すみません！大きなお世話でした……」

悲しげに目を伏せる笹原。さすがに心がチクリと痛む。

だが、気を取り直し、話を解決に向かって話を続けよう。

「で、笹原は結局先輩とどうなりたいんだ？」

「え、ど、どうとは？」

「付き合いたいんだろ？あの先輩と」

「え――っ、『突き合う』！？『突き合う』んですか……！？」

「え？そうしたいんじゃないのか？」

笹原は両頬に手を当て、おろおろとしだす。ほんの少し顔が青ざめているようにも見え、かなり戸惑っている。

「俺変な事言ってるやないよ……？」

「突き合う……ですか。先輩の体が持たないかも……」
「は？」

一体、今彼女の頭の中ではどのような想像が生まれているのだろうか。

というか、完全に俺が言った言葉の意味を理解しているのか――普通は『付き合う』とは交際するという意味の筈だが、笹原の様子を

見るに、何か別の意味に捉えている様に見える。

「なあ笹原、付き合うって意味、解ってるよな？」

「ええ、拳と拳のぶつかり合いですよね」

「――え？」

今、何と言ったんだ？

笹原は『？』と小首をかしげ、俺の目を真っ直ぐ見つめてくる。その様子はとても可愛いものだったが、やはり、彼女は何か大きな勘違いをしている。

「あの笹原、『男女交際』の意味解ってるよな？」

「男の人と女の人が付き合う事です」

「そう、それだ。で、付き合うって意味なんだけど……」

「男女の垣根なく、互いの技をぶつけ合う事です」

「えっ――」

絶句する。

何を言っているんだ、コイツは。

笹原は勿論大真面目で、これ以外に答えは無いと信じきった顔で、俺を見ている。

「それ、絶対世間一般の『交際』とは違うぞ……」

「え！？　どういう事なんですか！？」

笹原は目を丸くして驚く。

自分の知識が間違っていた事を知り、戸惑いを隠せない。一体どういう風に『恋人関係』を捉えていたんだ？

「笹原は先輩になんて告白したんだ？」

「はい……私に『貴方の事を教えてください』と言いました」

「それ……愛の告白じゃないよな……」

「え？『愛の告白』！？」

笹原の顔が真っ赤になる。今度はあわわ、なんて言いながら視線を泳がせたりモジモジしたりと落ち着きが無い。

やはりさっきから笹原との会話がうまく噛み合っていない。

笹原は先輩の事が好きじゃないのか？

「笹原は先輩の事が好きなんだろう？」

「ええ！？ち、違います！」

「違うって……どういう事だ！？」

「その、先輩に言ったのは先輩が好きと言う意味ではないんです。ただ、私に男性を見る目が無いので先輩に教えてもらおうと……」

「なん……だと」

もう既に、笹原は間違いを犯している。

唯一度、猫を可愛がっていた見た目の最悪な男に教授を乞おうとした事。

そして先輩自身がそれを告白と勘違いしてしまったという事だ。

この最悪な勘違いが、今のこの状況を作り出している。

しかも笹原は男女交際についても何か大きな勘違いをしている。

「笹原、恋愛って何かわかってないだろ」

「だ、だからそれを教えてもらおうと……！」

先輩が俺に言っていた事をようやく理解する。

先輩が言っていた『教育』とは、『恋愛』について何も知らない笹原に、一から恋愛について教える事なのだ。『普通の女の子』にしろという、かなりの無茶振りなのである。

恐らく先輩は直感か何かで笹原の異常性を理解したんだ。

数多くの女の子と交際している先輩なら、『女』を知る先輩なら――それくらいできても不思議は無い。

彼女を本質を理解しつつ、それをなんとかする様俺に押し付けてきた――そうしか考えられえない。

というか、ありえないのは笹原自身だ。

あまりにも恋愛に対する常識が無さ過ぎる。一体どういう教育を受けてきたんだ？世間知らずにも程がある。しかし、ここで諦めたら先輩絡みで後々面倒な事になるに違いない。

それに、笹原の今後を考えたら色々苦勞しそうだ。きっかけはどうあれ、ここで俺が何とかしたら、今後笹原に告白する男子にチャンスが生まれるだろう。

石動先輩なんかよりもちゃんと笹原を思ってくれる男が。

俺は一息つく。

そして、改めて彼女に向き直った。その時、

「真堂君、わたし、石動先輩に言われました。私が先輩の事を良く知る為に、真堂君が『男』について教えてくださると」

笹原は——どこからか指貫グローブを取り出し、両手にはめる。ふうっ、と大きく息を吐き、その場で軽く飛び跳ねたり、両手を高く挙げ、なんだかよくわからない舞をしたりする。

まるでなにかのウォーミングアップをしているかのようだ。しかし、なぜ？

「真堂君も私と同じ『超能力者』ですよ——ならば、ある程度、武術の心得はある筈」

「はあ!？」

ゴキキ、と笹原は拳を固め、俺に向ける。

そして、先ほども俺に見せていた、『一応』可憐な乙女の眼差しは今——獣のそれに変わっていた。

「勝負です、真堂君。私と——『突き合って』ください!そして、

私は真堂君を通して男性というものを理解します!!」

「え、ええええええええええええええええ!？」

——ひゅん、と右の頬を何かが掠めた音がする。

それは風を切る音に間違いはなかったが、その正体が解るまで、俺は数秒を有した。

いつの間にか笹原と俺の距離は短くなっており、伸びきった笹原の腕がゆっくりと短くなる。

そこで俺はようやく理解した。頬を掠めた何かは彼女の腕だった。俺の視界に捉えきれないスピードで打ち込まれた拳が、俺の頬を掠めたのだ。

しかし、疑問は残る。

笹原は今の一撃を俺に当てられた筈だが、何故当ててこなかったの

か。

「お、おい笹原！待て！お前はとんでもない勘違いをしている！！」
「勘違い――？」

「そうだよ！お前は根幹から恋愛について間違っている！！」

「否！」

「はい？」

「間違っではおりません！私のはかつて、ストリートファイトで出会った父に破れ、気に入られた父の下に嫁入りを果たしました！母はこう私に言っております！『軟弱な男には心を許すな』と！！」

「それ世間一般の恋愛じゃあない！！」

「それでも、私は知りたいんです！」

「じゃあ今すぐ戦闘体勢をやめろ！」

笹原は完全に『拳と拳を交えたと相手が解る』と思い込んでしまっている。

まずはそこから何とかするべきなのだが、一体どうすればいいのか。

「勝負！！」

「うわあああ！まで、おちつけええ！」

笹原はそう言いながら、連続で拳を突き出す。まるでそれが無数に分かれて見えるほど、すさまじいスピードである。

本物だ――笹原は本物の武術家だった。その攻撃に一切迷いが無く、的確に急所を突いて来ている。

だが、しかし、この俺には一切届いていない。

「――な、なあ笹原、何やってんの？」

「……練習、というか、私の実力を見てもらおうと……」

ほんの少し顔を赤らめ、未だにラッシュを打ち込む。そこに幻の敵でも居るかの様だ。

俺には半歩も届いていない。

最初の一撃からして、確実に俺に当てる事ができた筈だ。

「笹原、お前……」

「こ、これを本当に当ててしまえば、真堂君が大変な事になりますから、見てもらうだけです」

「そ、それは親切に……」

なるほど、本当に闘うのではなく、己の実力を見せ合う『演武』のようなものらしい。

どこからみても唯のシャドーにしか見えないが。

笹原は唐突に拳を止め、今度は俺を見る。やはり真剣な表情だ。つまり、俺にもやれと……。

「っ……」

ちなみに俺は一度も武芸たしなんだ事はなく、ケンカだってしても殆ど負けばかりで、自分で言うのもあれだがすっごく弱い。暴力事になんて一切関わりたくない平和主義者だ。

しかし、ここで何か見せないと——と心に決め、笹原を見据えた。

それは完全に俺の負けず嫌い……と言えば聞こえはいいだろうが、本当は少しこの状況が楽しくなってしまっていた。そうなれば、笹原だけにやらせる訳にはいなくなるのも無理はない。

俺は昔、中国の格闘映画で見たうろ覚えもいいたこの構えを思い出しながらとる。

まず両腕を高く挙げ——両手を閉じ、手首を軽く曲げる。そして左ひざを曲げ、片足立ちになる。

たしかこんな感じだった筈だが。なんの構えだったか忘れてしまったが、絶対廊下とか人通りの多い所では出来ない。恥ずかしいからだ。

「なっ——この構えは——!？」

笹原の目が驚愕に見開かれる。

正直こんな顔をするとは思わなかった。どこかで見覚えでもあるのだろうか。

俺はほんの少し恥ずかしさを覚えるが、今更構えを解く事はできず、この姿勢をキープする。

重心が安定しないため、片膝立ちになった右足がプルプルと震え、

限界に近い事を知らせてくる。

「“五獣拳” 鶴の構え……！」

笹原の目つきが、更に鋭くなる。

ヤバイ——と背筋に冷たいものが流れた。そのまま、俺は硬直する。俺はなにかマズイ事をしてしまったのだろうか。

「……御見それしました」

と、笹原は構えを解き、静かに呟く。

「まさか真堂君が五獣拳の使い手だとは知らず……」

そして——両手を広げ、ゆっくりと両掌を重ねあわせるように胸の前に持ってきて、拳を強く握る。その形は陰と陽が交じり合った『大極』を描いていた。

そして、低く息を吐き、大極を描いた拳を俺に向け、言った。

『武神争覇——大極功』

「お、おい笹は——」

俺は最後まで彼女の名前を呼ぶ事ができず、いつの間にか天を仰いでいた。

ぶっ飛ばされていた、という表現が恐らく正しいのだろう。

本当に何をされたのか解らなかった。

パンチとかキックとかチャチなものじゃ断じてない。

本当の“拳”というものを味わった……。

○

——どうやら、また夢を見ているらしい。

俺が見る夢なんて、どうせいつものアレだ。

10年前、俺が家族を無くした時の事——

俺は『その子』の手を取り、炎の合間を走り続けていた。

その少女は長い黒髪を振り乱し、火の粉に焼かれた肌に流れる汗を片手で拭う。

しかし、それでも片方の手は先を走る俺の手にしっかりと繋がれて

いた。

俺がその子と出会ったのは、確かにあの地獄だった。

父親も、母親も、生まれる前の妹も失い、誰かの助けを求め歩いて
いた時——泣いているその少女に出会った。

異次元生命体エルファスに家族を奪われた、同じ境遇の少女。あの場所にはそ
んな人達が多く居た。

俺とその子は青い光を浴びても無事だった。つまり、今思えばあの
子も超能力者だったのだ。

俺とその子は二人で身を隠した。俺はその子の身を抱きしめ、異次
元生命体ルファスが去るのを心から願った——

結局、あの子とは保護された病院で離れ離れになった。

お互いの名前を教え合った筈だが、病院を退院し、孤児院に入っ
てからの生活の中でその子の顔も名前もすっかり忘れてしまった。

「……君、真堂君」

「っ……」

優しい声に苗字を呼ばれた。目を開くと、そこには笹原の顔があり、
俺を見下ろしている。

どうやら俺は仰向けに寝転がっているようで、感触からベンチに寝
かされているみたいだ。

しかし、後頭部が妙に柔らかい。頭の後ろに何かを敷いているよう
だが——

「ごめんなさい、真堂君……つい本気になってしまった」

「え……」

笹原が何を謝っているのかよく解らなかった。

頭に敷いているのはどうやら笹原の膝であるらしい。

つまり、俺は膝枕をされているようだ。

「笹原、これは——」

「まだ動いては駄目です！」

体を起こそうとして、笹原に止められる。彼女の力はやはり強く、俺は簡単に押し留められ、再び笹原の膝に厄介になる。笹原の胸と顔が視界に映る。

ベンチに腰掛けた笹原は俺に膝枕をし、ずっと気がつくまで看病してくれたみたいだ。

「笹原、足、痛くないか……」

「心配ありません。鍛えてますから」

と、笹原は柔らかに微笑む。さっきまでの彼女とは全く違う表情をしていた。

それにしても、随分心地のいい膝だった。

恐らく、何人もの男子が夢見た膝枕だろう。

「ごめんなさい、真堂君。つい本気になってしまいました……」

「いや……いいんだ。俺がふざけてあんな恰好したから……しかし、何されたか解らなかった。あれが笹原の能力なのか……？」

「いえ、あれは私の能力とは関係ないもので……」

「そ、そう……」

背筋が寒くなる。じゃあ笹原は能力抜きであんな技を？ 男一人軽くぶっ飛ばす技を？

笹原は本当は世紀末から来たんじゃないの？

「……」

「笹原……？」

笹原の目に、涙が溜まっている。

俺は夕焼け空をバックに映る笹原に見とれてしまい、何故笹原が泣いているのか解らなかった。

「私は……また大きな過ちを……」

「……笹原」

「真堂君が本物の拳士と勘違いしてしまって……私は最低です……」

「解ったかよ、笹原」

「え……」

俺は笹原の目に溜まった涙を、伸ばした手の指で拭っていた。自分

でも何故こんなキザったらしい事をしたのかわからないが、とにかく言いたい事があった。

「恋愛なんて人それぞれだけど、笹原みたいに極端なものは多分滅多にない。自分の思いを拳に乗せて打つなんて、完全にそっち方面じゃないか」

「……」

「今まで笹原に告白した奴らだって、ケンカの強さなんか関係なく、ただ自分の笹原が好きだって思いだけで突っ走ってお前に告白したんだと思う。笹原がどんな奴なのか上辺だけでろくに知ろうともしないでな……」

「！」

はっ、と笹原が大きく目を見開く。何か自分に思う所があったのか。俺は彼女が何かを言い出す前に、続ける。

「お前が石動先輩に何を見たのか知らないけど、あの最低なんだよ」

「え……？」

「何人も彼女が居るくせに、告白した笹原まで付き合おうとしてたんだ。お前が先輩に対してどんな思いを抱いたのか、どんな告白をしたのか知らないけど……あの人みたいに女の子を玩具みたいに扱う奴とは、付き合わないでほしい。お前が振ってきた男達の中や、これからお前に思いを伝えようとする奴の中にきつと本当のお前を解ってくれる猛者がきつというはずだから……」

「真堂君……」

笹原は戸惑っている。

当然だった。急にこんな話をされても戸惑うだけだ。

本当なら、先輩の事だって話す事じゃあないが、先輩の顔を思い出す度、どうにかして懲らしめてやろうという歪んだ欲望が膨れ上がってくる。

「だからな、笹原。お前はやっぱりお前のままでいいんだ。先輩から普通の女の子にしろなんて言われたけど、笹原は笹原だもん……」

：誰かに無理矢理合わせなくてもいいんだ」

そう言って、俺は体を起こす。そして、笹原の方を見ずに、歩き出した。

「真堂君、まだ動いては駄目です！お帰りなら今すぐ家の者を――」
「いいんだ。これから先輩に謝ってくるから。じゃあな」

笹原の声が追いかけてくるが、片手で制し、その場から走り去る。
俺はこれから先輩に殴られるだろう。しかし、笹原の拳に比べれば、蚊が刺した程にも感じない筈だ。

笹原がどんな顔をしていたのか解らないが、俺は言いたい事を全て言い切れたので、満足してその代価を支払っていく。

「……真堂君……」

笹原が納得してくれたかは解らない。

しかし、ただ一つだけ言える事は、笹原の恋愛観にほんの少しでも亀裂を入れる事が出来たのではないか――と思う。

○

「りゅうくん……」

屋上にたった一人、巫優奈かなぎの姿があった。

落下事故を防ぐた為のフェンスに手をかけ、夕焼け空に彩られた町を眺めている。

結局、保健室での一件から龍介に会えず、保健室を飛び出したまま、そこに戻る事もなく図書室でずっと寝ていた。

龍介が何故あんな酷い事を言ったのか、どう考えても解らない。

自分が何か酷い事をしたのだろうか――と、優奈は頭を捻る。

「ううん……やっぱり、りゅうくんちでエッチなほんみちやったからかなあ」

腕組みして考える。心辺りはそれくらいしか思いつかない。

「ゆうながカードでいつもかっちゃってるからかなあ」

うーん、うーんと深く考え込む優奈だったが、その姿からはどう

見ても真剣さは感じられない。

しかし、彼女自身はいたって大真面目に、物事を真剣に考え込んでいるのだ。

誰かに気に入られようとする『あざとさ』はどこにもなく、それゆえ他者に誤解を与えやすいのだ。

世界レベルの知能を持つ優奈だったが、その頭脳を普段の生活で生かす機会は殆どなく、特にこの学校に来てから毎日が――楽しかった。

何も考えなくていいからだ。

ここには、優奈を苦しめる実験や、優奈を悲しませる者もない。自分の見返したくない過去に触れる者は誰一人いないのだ。

真堂龍介が、その最もたる人物だった。

いつも何を考えているか解らない顔で空ばかり見ている。

それなのに、優奈が騒ぎの中心になってしまうと、必ず手を差し伸べてくれる。

「……」

優奈は自分の胸に手を当て、龍介の顔を思い浮かべる。

それは今優奈を包んでいる景色よりも鮮明に浮かんだ。

「りゅうくん……えへへ、りゅうくんはバカだから、あしたにはふつうどおりにおはなしできるよねえ」

優奈の顔に笑顔が浮かぶ。

それは打算的なものではなく、優奈と龍介の毎日の交流の中で育まれた『信頼』であった。

優奈自身がそれを自覚しているかはわからないが、確かにそれは心地よくて優しい感情に違いなく、優奈はほんの少し気落ちしていた心を持ち直す。

「あしたはなにしておそぼうかなあ」

軽い足取りで屋上を立ち去る優奈に、さっきまでの杞憂はどこにも無かった。

優奈の抱く淡い希望は、叶うことが無い事を知らずに。

あれから三日――俺の日常生活は、石動先輩から相談を受け、優奈から離れる様に言われ、笹原と拳を交えてから劇的に変わった。自分の周囲で起きた事ながら、何が起こったのかさっぱり理解できない。

「ど、どうですか、真堂君」

「あ、ああ。うまいよ」

ここはいつもの屋上。いつも優奈と駄弁っているベンチに俺と笹原詩音の姿があった。

しかも、並んで腰掛け、二人で仲良くお昼ご飯を食べている。

俺は購買で買ったヤキソバパンを仕舞い込み、笹原が用意したお弁当をいただいている。

こうなったのも数分前、買ったパンをいつもの場所で食べようと思った時、笹原から急にお誘いを受けた事から始まる。別に昼飯と一緒に食べる事に抵抗など無かったが、笹原が自作の弁当を俺に差し出した瞬間、状況は一変する。

「こ、これ作っただけですけど……」

と、可愛いピンクの包みを差し出したその指には痛々しく無数の絆創膏が巻かれていた。

「あまりこういうのには慣れていなくて……」

と、開かれた弁当箱に敷き詰められた一面の玉子焼き。玉子焼きしかないのである。

「真堂君、玉子焼きは好きですか？」

と、少し不安げに、上目遣いで聞いてきた美少女を拒める男はいらんだろうか。

指に巻かれた絆創膏は補強用なのかな？とアホな事を思いつつ、笹原のくれたお弁当を食べる事にした。

そして現在、ようやく弁当箱の半分を空にした俺を『胸焼け』が襲

っていた。

甘い。この玉子焼きはとにかく甘いのだ。

「お砂糖と、生クリームと、蜂蜜を隠し味に使っているんです……」
と、ニコニコしながらいう笹原を、俺は責める事が出来なかった。
殆ど糖分で占められた玉子焼きをかじりつつ、ヤキソバパンに最後の望みを託しつつ、食事を続ける。

その間、笹原は真剣にその様子を見つめている。正直、喰いづらい。

「これ、笹原が作ったんだよな……」

「はい！そうなんです！」

とても元気よく答えた笹原はとても可愛い笑顔を見せている。

こんな状況、学校中の男子が見たら血の涙を流しながら悔しがらるだろう。

しかし、今この屋上に居るのは俺と笹原と――

「ねえ蒼、あのだらしない顔を見て。ふふ、さっきから鼻の下を伸ばしすぎよね」

「……バカ丸出しだとおもう」

向かいのベンチに座った、黒霧と要の二人だ。

二人は俺達をジロジロ見ながらお互い用意した昼食を食べている。

俺はその様子をなるべく見ずに、自分の食事に集中する。

正直、かなりキツイ。

この状況もだが、玉子焼きの甘さが信じられないほど強いのだ。

まるで砂糖に蜂蜜とイチゴジャムとカスタードクリームを混ぜたみたいだ。

甘いものが苦手な人はほんの数口程でアウトだろう。

俺は甘党なのでもう少し耐えられるが……。
だが。

「うっぷ」

「真堂君？」

「……」

込み上げてくるもの――それは胃がこれ以上の甘味を拒絶している

証だ。

だが、そこで全てを吐き出してしまえば、この先俺の未来はきっとよくないものになるだろう。

目を白黒させながら、口を手で押さえ、必死で来るべき運命と闘う。この運命を受け入れる訳にはいかない。抗うべきだ。

運命を受け入れた瞬間、俺は敗北する。

「（くっ……どうすればいい！？もうヤツがそこまで来ている！！）

」

それはたった今胃に落とし込んだ玉子焼きと、朝食の成れの果てだ。

「真堂君？どうされましたか？」

笹原が俺の顔を覗き込んでくる。

心配そうな顔で、しかも妙にその距離が近い気もする。

「（や、やばい、どうすれば——そ、そうだ！）」

俺は『切り札』の存在を思い出し、制服のポケットに入れたヤキソバパンの存在を思い出す。

今こそ、コイツの力を借りる時だ。ソースの辛味で玉子焼きの甘味を打ち消し、

そしてヤキソバとパンの質量でこみ上げてくるものを押し留め、胃に流し込むのだ。

俺は計画を瞬時に立てる。そして、実行に移そうとポケットに手を伸ばした——その時だった。

「（ヤキソバパンが——ない、だと！？）」

ポケットに手を当てると、そこにヤキソバパンの存在は無い。確かにここにしまっていた筈なのに。

「半分に分けましょう」

「うん」

向かい側から聞こえるその声にハツとしてその方を向く。

なんとそこには、仲良くヤキソバパンを半分わけにしている黒霧と

要の姿があった。

先ほども二人が食べていたと思われる弁当の空箱は、二人が座っているベンチの横に並べて置かれている。

「久しぶりね、これを食べるのは」

「なかなか手に入れないから」

「こんなものをどうして必死になって取り合うのかしらね？」

「さあ……いただきます」

と――要と黒霧が仲良く分けたヤキソバパンを口にしようとした、その時、俺はすかさず『能力』を発動する。

その瞬間、二人の手からヤキソバパンがふわりと浮き上がり、二人の手の届かぬ空に上っていく。

「あっ！」

と、珍しく物静かな要が大きな声を上げ、飛び去ったヤキソバパンを掴もうと手を伸ばす――が、残念！

黒霧はこの現象の正体に真っ先に気づいていた。まあ、当然だが。この空間に念動力テレキネシスの能力を持つ人間は俺しかないし。

飛び去ったヤキソバパンが二つとも俺の手に戻る。俺はこみ上げてきたものを何とか飲み込み、その『切り札』を掴んだまま、二人に向かつて言った。

「お前らいつ盗んだんだよ！？」

「まあ、盗んだですって」

「……」

黒霧がとぼけた顔で言った。要は要でもものすごく恨めしそうな目を俺に向けてくる。

「お前らしかないだろうが！つうか、犯人は黒霧だろ！」
とぼけた黒霧を指差して言う。

「何の事かしら？」

「とぼけんな！要の『能力』じゃ俺のパンを取る事はできない！つまり、未だどんな力を持ってるかわからんお前だけだろ！」

「ふふ……そうね。その通りよ」

黒霧はあっさり薄情する。そして、こちらに向かつてゆつくりと歩いてくる。俺は咄嗟とっさに手を後ろに回し、パンを隠す。

「そんな事より、貴方の方こそどういうつもりなのかしら」

「な、なにがだよ」

黒霧はちらり、と笹原の方を見た。

「せっかく『恋人』がお弁当を作ってきてくれているのに、貴方はパンを食べようというの？」

「は？」

今、何ていったんだ？この女は。

「ねえ笹原さん、真堂君とはいつから付き合っているのかしら」

「えー？い、いえ、『突き合った』事はありませんが」

笹原の返答に、黒霧はほんの少しだけ驚いた顔をした。意外だったのだろうか。

「じゃあ、なぜこんな物の価値をわかってないサルにお弁当を？貴方が作ったんでしょ？」

「はい。真堂君にはお世話になりました……」

と、笹原が俺の顔を見た。どうやら、こいつらに説明が必要と判断してみたかった。

俺達の仲に誤解が無い様にする笹原の配慮なのだろうが、説明するのは俺の役のようだ。



「……という訳で、俺は先輩に思いつきりぶん殴られてさ……」

と、二日前まで真っ赤に晴れ上がっていた右頬を撫でる。なんだかんだいって石動先輩はケンカが強く、俺はケジメとして一発殴られるだけで済んだ。

先輩自身、あまり笹原に思いいれが無かったらしい。今付き合っている彼女達で精一杯だとも言っていた。

なら最初からキープするとか言うなよ、とは言えず、笹原と話せる

ようになったただけでも良かった事にし、この事件は終わった。筈だった。

今日、今こうして笹原と昼食を摂る様になるとは俺自身も全く予想してない出来事だったのだ。

「そんな面白そうな事があったなんてね。だから最近、優奈とも会ってなかったという事なのね」

腕組みしながら、ベンチに座った俺を冷ややかに見下ろす黒霧。随分と御幣がある言い方をするが、そこには突っ込まない事にする。

「私が悪いんです！私が最初から最後まで真堂君に迷惑をかけてしまひ……」

「いや、笹原は悪くないだろ。悪いのはあの先輩だって」

「いえ、私が男の人を見る目が無いばかりに、真堂君に迷惑を……」

「いや、その話をしたら埒が明かなくなるから……」

と、俺と笹原は互いを尊重するあまり、自分に非がある事を言い合う。黒霧はそんな俺達を見てため息をつく。

「蒼、それ美味しい？」

「うん」

何か隣でござござやっているかと思えば、俺と笹原が言い合っている間に、要が笹原の玉子焼きを頬張っている。しかも、美味しそうに。

俺はギョツとして笹原から要に向き直り、要に言った。

「そ、それ甘すぎるのによく平気で……」

「平気。美味しいから」

「マジかよ……」

要の食欲に改めて驚く。こいつ、どんな胃袋をしているんだ。

あまりに美味しそうに玉子焼きに夢中になる要を見ていた時、突然肩を叩かれる。見ると、黒霧が無言で俺の後ろを指差していた。

なんだ？と後ろを振り向くと、そこには、目に涙を溜めた笹原の顔があった。

瞬間、マズイと脳が危険信号を灯す。

「あ、いや、これはな、笹原……！」

俺は慌てて笹原をなだめにかかる。だが、俺が要に言った事は事実なので、どう言っているのか考える。

しかし——俺が言い訳する前に、予想外の反応が笹原から返ってくる。

「ごめんなさい！」

「え？」

彼女は深々と頭を下げる。

「私の玉子焼きが至らない事をあえて隠して、それでも頑張って食べて下さったんですね！！本当に、本当にありがとうございます……！！！」

「ええと……」

俺が思っていたものとは正反対の反応に、言うべき言葉完全に失ってしまふ。その時、「はあ」という黒霧のため息が聞こえたので、そっちを向く。すると、腕組みした黒霧が何か言いたげに俺を見ている。

「な、なんだよ、黒霧」

「いいえ。貴方ってやっぱりそうなのと思って」

「意味がわからん……」

「別に分からなくても構わないわ。けれど、貴方がそんなだから、優奈を深く傷つけるのよ」

黒霧はそれだけ言って、玉子焼きを全て食べ終えた要と一緒に屋上から去って行った。残された空っぽの弁当箱を残して、結局俺は半分も食べる事が出来なかった。

「言い訳がましく聞こえるけど、俺は全部食べるつもりだったからな。すこし塩分が欲しかっただけで……」

半分になったヤキソバパンの一つを笹原に渡す。笹原は涙で赤くなった目を丸くし、恐る恐るそれを受け取る。俺が先にパンをかじると、笹原も続いてそれをかじる。玉子焼きの後味が残る口内に、ソースの香ばしい香りと味が広がっていく。

「ヤキソバパン……初めて食べました」

「そっか……いつも弁当だっけ」

「はい、家のメイドさんに作って戴いたものです」

メイドなんて聞くと、あの日本一の電気街にある特殊な店舗の従業員を思い浮かべる。だが、笹原ほどのお嬢様の家には実際に本業の方々が今現在も働いているのだろう。

全く、完全に住む世界の違う俺と笹原だが、今は同じベンチに座って、ヤキソバパンを食べている。

こんな事、一年前の俺に予想が出来ただろうか。

優奈と出会ってこれまで、よく話す様になったのは黒霧とか要とかちょっと変わった女子とばかりだったが――

「真堂君、私、修行します!!」

「修行!?!」

「はい! 真堂君に納得してもらうため、頑張ります!!」

笹原は急に立ち上がったと思うと、俺に一礼し、走り去って行った。俺はベンチに座ったまま、屋上のドアが閉じる音を聞いていた。

「……やっぱ、アイツも変わってるな」

見た目は可憐で美しいが、中身は完全に武道派なお嬢様――それが笹原詩音という少女。

彼女の逆襲はまだ続くのだろう。俺に納得してもらう為、そして、その果てに男というものを知る為に。

一度関わってしまった事だ。

俺は最後まで――笹原が自身が『納得する』まで、俺は笹原の修行に付き合う事にした。

――それが、どうしてこうなったんだ。

「真堂君、食べてください!!」

「い、いただきます……」

次の日から、笹原は毎日俺に玉子焼きを作ってきてくれた。その味は毎日少し改善されているものの、いまだ食後には塩分を求める程だ。

しかし、笹原の笑顔には勝てず、そして俺自身が笹原が納得するまで続けるつもりでいたのだが、それがいつ納得してくれるのか――
「さ、笹原、もうそろそろ玉子焼きも上達した頃だし……次は白米の炊き方について……」

「駄目です！」

「え」

「一つの道を究めるのに三日や四日で済む事はありません！あと一ヶ月は付き合ってもらいます！どうかよろしくお願いいたします！」

「……」

一ヶ月――お昼はずっと玉子焼き尽くしなのか。

俺は目の前が真っ暗になっていく様な気がして、思わず目頭を押さえる。

笹原はきつと容赦なく、毎朝作った力作を俺にご馳走してくれるだろう。

きつと、俺はそれを拒む事なく、半笑いで平らげるのだ。

そんな毎日が続く――なんて淡い希望が叶わない事を今は知らず、俺は甘い玉子焼きを口に運ぶのだった。

#4／END

#5／始まりを告げる少女

その日は、家族と久しぶりの外出で、遠くの町に買い物に行く事になっていた。

小学校に入学したばかりの俺は入学してから日にちも経たず、ある理由からランドセルをダメにしまった。新しいランドセルを買いに行くのと、有名なレストランで食事をする。この二つがメインだった。

早くもランドセルを壊してしまった事に、両親は怒らなかった。

形ある物はいつか壊れる——と父が慰めてくれた。

俺自身、そのランドセルをとっても気に入っていた為、落ち込んでいたのを見かねてそう言ってくれたんだろう。母も、大きくなったお腹を擦りながら、笑っていた。

いつも笑顔が絶えない、やさしい両親だった。これから生まれてくる妹も、きっと幸せになれる。そう信じていた。

だが——高速道路に入って間もない頃、あまりに突然すぎる悪夢が訪れる。
エルフアス

異次元生命体の出現。

その時まで、テレビのニュースでしか見たことなかった怪物の出現——それが自分たちの目と鼻の先に、なんの前触れもなくその姿を現したのだ。

その怪物から放たれる青い光が視界一杯に広がった時、俺は何故か心地よさを感じていた。

怪物が与えた絶望と恐怖が一瞬で拭い去られいく。

何も怖いことが無くなる——今まで感じたことの無いような安堵感に包まれた。

そして、それが収まった時、俺は焼けた道路に投げ出されていた事に気付く。

炎に囲まれ、先ほどの安らぎが急に失われていく中で、俺は目にす

る。

父が買い換えた新車——その新しい車の匂いにはしゃぎ、ついそのスーパーマーケットに行くだけのドライブにも嬉々として付いて行った。助手席で買ってもらったジュースを飲み、今日一日学校で起こった話を話す俺と、それを真剣に聞いてくれる父親。そして、母親を病院に送って行く時もそれに乗って付いていく。

幼かった俺の全てだった父さんと、母さんと、父さんが買った新しい車と、これから迎える事になる新しい家族——妹の全てが、全てが、怪物の青い光に飲み込まれ——結晶になっていく。

そして、唯一人、取り残された俺。

怪物がまだ空中に漂う中、結晶になった家族を見つめていた。

あまりに突然に、あまりに無慈悲に、俺の家族は奪われた。

まだ名前も決まっていなかった妹も——

俺は何もできなかった。

唯、空中を漂う怪物に、ありったけの『憎悪』をぶつける事しか出来なかった。

家族を奪われた怒り、憎しみ、悲しみの全てがごっちゃになって、自分でも訳が分からないまま叫び続け、怪物に向かって、ありったけの『力』をぶつける。

それでも怪物を倒す事は出来なかった。

小学生だった俺の何十倍ものサイズの怪物に、亀裂を入れる事ぐらいしか、その時の俺には背一杯だった。

遠い空の上で声が聞こえる。それは人間の発する声ではなく、怪物が鳴いている声だった。

とても悲しげな音だった。

俺は力尽き、その場に座り込む。

もう何もする気にはなれない。

空虚さが押し寄せてくる中で、俺はもういいやと諦め、目を閉じる。もう何もする気になれない。

諦めて、死んでしまおうと思っていた。

その時、今度こそ悲しげな声で家族を呼ぶ声が聞こえた。
振り向くと、炎を上げる車の向こうに、俺と同じくらいの少女がいた。

長い黒髪の女の子だった。

彼女が俺を見つけた時、「たすけて」と叫んだ。

それが耳に届いた瞬間、俺は――

○

「最近あいつどうしてるんだろ」

この数日、全く姿を見せなかった優奈が気になり始めてきていた。
美香先生から暫く会うのを控える様に言われたが、実際優奈の方が俺に会いに来ている方が多い。

しかし、ここ数日で俺の所に来てないばかりか、学校で姿を見る事も無かった。優奈は保健室に入り浸っているものの、図書室や購買などにも出没するので、会いに行かなくてもどこかでばったり会うだろうと思っていたのだが。

……まあ、こんな細かいことは今考えても仕方が無い。先生の言った暫くがどの程度のものか分からないが、優奈に会ってみれば分かるだろう。

それに、『マスター・オブ・ギャラクシー』の新しいデッキを組んでいる。

今度こそ、このデッキで優奈に一泡吹かせる事が出来るだろう。

そう心の中でほくそえみ、保健室の扉を開いた。どうせここに居るだろう、と。だが。

「あら、真堂君」

「先生……」

すぐ目に飛び込んできたのは、机に向かって書類を管理している美香先生の姿だった。保健室の中を見渡してみると、優奈の姿はどこにも無い。あいつがいつも転んでいるはずのベッドも、ほかのと同

じく綺麗にしてある。

「先生、優奈は？」

「ふうん、結構遅かったわね」

俺の質問に、先生は意味深な返答をする。いや、答えになってない。先生は書類を机に置き、立ち上がる。

「優奈ちゃんは今日はお休みさせてあるの。それで、もし良かったらだけどー」

と、先生は俺に近づき、白衣のポケットから取り出したカードキーを俺に手渡す。

「お見舞い、行ってくれないかしら？」

「お見舞いって……あいつ、どこか悪いんですか

「行って見ればわかるわ」

と、再び机に戻る。

おかしい、と疑問がすぐさま生まれる。先生は優奈の面倒を見る事も仕事の内に入っている筈なのに、なぜこんな投げやりにお見舞いを頼んでくるんだ？

しかも、つい最近まで俺に接触禁止令まで出していたのに。

俺がそういぶかしんでいると、先生が俺の方を向いて、言った。

「どうしたの？あの子に会いたいんでしょ？」

「先生……なんか俺に隠している事あるだろ」

「ええ、当然よ」

ごく普通に、それが当たり前だと言った風に、先生は告げる。

どうせこれ以上聞いても教えてくれないだろう。

先生のどこか吹っ切れているような、悪びれもしない態度から確信する。

なら、言われるまま行くしかない。

「じゃあ、今日の放課後に優奈の家に行きます」

「よろしくね。ああ、それと……まってて」

教室に戻ろうとした俺を呼びとめ、財布から出した五千円札を俺に渡しに来る。

「これであの子の好きなものをお土産に買って行ってあげてね」

「はあ……」

五千円は流石に多いのではないかと思いつつも、懷に仕舞い込む。頭の中では瞬時にこれを95パーセント着服する算段が整っていたので、自然と半笑いになる。

「まって」

「え！？や、やっぱ多いですよね！」

急に呼び止められたので、ギクリとして貰ったお金を返そうと懷から取り出す。

しかし、先生はそのつもりはないのか、俺の手を押し止めた。更に、体を密着させて来る。

「え——せ、先生？」

抱きしめられている、と言った方が正しいだろう。お金を返そうとした手は柔らかく、しっかりと握られ

、服の上からでも互いの鼓動が伝わってくる程密着し、余った手を俺の背中に回していた。

甘い、香水の香りが鼻の奥まで届く。

先生は、真っ直ぐな目で、俺を見つめていた。何を考えているのか分からない。理解させないといった目で、見つめている。

更に顔を耳元まで寄せ——

「『私達』は真堂君に期待しているから。何も心配しなくていいからね」

と——官能の入り混じった声で、告げる。

心臓が違った意味で跳ね上がった。

そこからくるのは得体の知れない何か——恐らく、恐怖ではないか。先生の顔を見ると、ほんの少しだけ上気した顔をしていた。間違いなく、俺の知ってる綾小路美香先生じゃない。

なんともいえない顔をした俺を見て満足気に先生が離れる。

「ふふ……それじゃあ、ね」

と、立ち尽くした俺に背を向け、保健室の扉を後ろ手に閉めた。人気の無い廊下に唯一人俺だけが残される。心臓が嫌に大きく高鳴っている。背筋を冷たい汗が流れ――俺はとりあえず、もらったお金でジュースを買おうと思った。

○

「何だったんだ、一体……」

さっきから何度この言葉を繰り返しているのか。

しかし、それほど美香先生が見せた、純情な少年には良くない顔が印象に残っている。

あれが大人の色気ってヤツだろうか。

「先生、本気出しすぎだろ……」

はあ、とため息をつく。危うく恋に落ちそうになる所だった。何の意図があってあんな事言ったのかさっぱり分からないが、優奈のお見舞いを頼むという事は、もう普通に会ってもいいのだろうか。

最近は先輩に絡まれたり笹原の願いを聞いたり色々精神的に疲れる事ばかりだったので、たまには一緒に居ても考えなくてもいい奴と遊びたい。

優奈は俺にとって一種の清涼剤なのだろう。刺激の強い連中と付き合うのもいいが、そればかりだと自分の自己同一性アイデンティティが揺らいでしまう。

唯でさえ、俺は誰かに影響されやすい。自分で言うのもあれだけど。だが、優奈は違っていた。他の誰かとも違う、完全に自分の世界で自分のペースで暮らしている。

物事の捉え方が人とあまりにも違う為か、理解出来ない事もよくするけど、何故か一緒にいても違和感がない。これはもしかしたら俺だけかもしれないが、そう信じている。

たまにケンカをする事もあるけど、先をあまり心配しなくてもいい

——そういう相手だ。

「持つて行くものはこれで十分だな」

先生から貰ったお金でマスター・オブ・ギャラクシーのブースターパック（一つ150円）を本屋で一つ買っていていき、それを手土産にする。おつりは今後の俺の生活に役立てる事を誓い、財布にしまった。

優奈の事だ。きっとレアカードが出なくても喜ぶだろう。

○

「ここか……」

その場所は、この町——山瀬町でもそこその金持ちが暮らしている高層マンションである。

高級な為かセキュリティ・システムは万全であり、フロアからエレベーターに向かう所にもカードキーが必要な場所がある。そこには0から9までの数字が刻まれたボタンが並べてあり、それを特定の順番で押した後、ボタンの横の溝にカードを通す事で開かれる。

しかし、俺はその暗証番号を無視し、先にカードを通した。

その瞬間、エレベーターに向かうドアがおもむろに開いた。

「これは特別なのか？」

先生から借りたカードはどういう訳だか暗証番号を無視してもいいらしい。当然このカードが優奈の部屋の鍵になっている訳だが、本当にどうなっているのか。

「先生もそうだけど、優奈も謎が多いよな……」

そして、その二人と関係が深そうな黒霧紗夜。

俺の窺^{うかが}い知る所ではない事だろうけど、あの三人には共通する何かがある。

俺は何となく、そう思っていた。

「ま、いいけど」

開かれた扉に向かう。さて、数日振りの再会になるが、何て言って

やろう。

○

かなぎ
巫と書かれた表札を確認し、ドアノブを回す前にノックしてみた。

しかし、何回か行っても中から反応が返ってこない。

「……入るか」

ほんの少し躊躇する。流石に相手が優奈と言っても、突然部屋に入る訳にはいかない。だが、一向に返事が返ってこない事から中に入らないんじゃないかと考える。

先生から預かったカードは優奈の部屋の鍵にもなっているらしく、これを預けてくれたという事は、気兼ねなく入ってもいいという事なのだろう。そうでなければ、人の家の鍵を他の人に預けてたりはしない筈だ。しかし、そうなると優奈の家族構成が気になってくる所だが……。

「まあ、アイツに色々聞いてみるか」

今回初めて優奈の家に来た訳だが、これもいい機会だ。今まで気にはなっていたが聞きづらかった事を色々聞いてやろう。久しぶりに優奈に会うからか、何か妙にテンションが上がり気味である。

カードを通し、それが認証された事を確認してからドアノブに手を掛け、ゆっくりと回す。

「お邪魔します……」

まず、玄関に靴が二つある事を確認する。

見慣れた優奈の靴が無造作に散らばっていて、キッチンと綺麗に並べてあるのは下駄箱に入っているもののみだった。外出して帰ってきたら靴を脱ぎっぱなしにするのだろう。玄関に上がる前に、それを綺麗に並べておく。

なんの物音もしない。とにかく静かで、本当に誰もいないかのようだ。

高級な部屋な為か廊下が広く他の部屋に続く扉もいくつかあるが、

辺りには何の飾りも無く、こういう家にありがちな絵画や高そうな花瓶などはどこにもない。まるで、この部屋を借りたままなにも手をつけていないかの様だ。

質素という言葉が良く似合う高級な部屋って一体……。

「……」

ふと、通りかかった適当な扉の前に立ち、そこを開こうとドアノブに手をかける。

まず玄関で優奈に自分が来た事を伝えるべきだが——好奇心が勝ってしまった。

そして、この部屋に入った時の様にゆっくりをそれを回し、扉を開いた。

——瞬間、呼吸を忘れ、立ち尽くす。

ぎぎいと扉がいい部屋に似つかわしくない無粋な音をたて、部屋の全貌が明らかになる。

そこには——大量のヌイグルミが部屋一杯に山を作り、真っ白な壁には幼児が描いたような絵がいくつも貼られてあった。

「な……んだ、これ」

猫やらウサギやらパンダやら——優奈が好きそうな動物のヌイグルミが足の踏み場もないくらい散らばっている。部屋の隅にはそれが山を作るほど大量に積み重なり、壁の落書きにはやはり好きな動物や、優奈の知り合いであると思われる人物の顔が描かれてある。

背に冷たい汗が伝い、俺はおもむろにその部屋に入った。

この部屋の空気は妙に重たく、不気味な雰囲気醸し出してした。

本当に——いや、仮にここが優奈の部屋だとしても、あまりに子供すぎる。

明らかに、ここは高校に通う少女の部屋ではない。だれか、優奈の知り合いに少女でもいるんだ——と、自分でも丸つきり信じられない結論で無理矢理納得する。

優奈の性格が子供すぎても、流石にこれはないだろう、と。

そうして部屋の中央に進み、壁に貼られた絵を見る。

子供の様な自由な発想で描かれた絵が無造作に貼られている。どうやらクレヨンで描かれたものらしい。

そういえば、優奈が描いた絵があノルールに持っていかれたと先生から聞いた事があるが、クレヨンで描かれたラクガキが本当に持っていかれたなんて俺は信じていなかった。

そもそも美術の教師があノルールの関係者なんてその時は知らなかったが。

真っ白な翼を生やしたライオン、真っ白な翼を生やしたイルカ、真っ白な翼を生やしたキリン——と、絵の中の動物は皆翼を生やしていた。哺乳類や草食動物など種族の垣根なく、しかもカラスやオウムといった、既に翼を持った鳥にまで白い翼が余計に生えている。まるで、全てが平等であるかの様に、白い翼が生えている。

「なんじゃこりゃ……」

そして、人間が描かれた絵を見る。

真っ黒で長い黒髪の女の子——これは、黒霧だろうか。

真っ白で短い、真っ赤なりボンの女の子は——要だろう。

茶髪でサングラスをかけた男の子は——仁。

色の明るい茶髪をおさげにしている女の子（？）は恐らく美香先生じゃないだろうか。

その他にも色々な人物が独自のタッチで描かれている。俺の印象にはない人物ばかりで、俺の知らない優奈の知り合いだろう。中にはどうみても宇宙人にしか見えない絵もあるが。

しかし——それらの絵の人物にも、白い羽を加えて描かれている。頭の上に輪がない事から天使を描いたつもりじゃないようだが。

絵を見ている内、ある事に気付く。

「……あれ」

絵の中の人物——羽の無い人物に、何となくだが共通点がある事に気付いた。

黒霧、要、仁の三人には翼が描かれていない。美香先生には翼が描かれてある。

他の人物の絵にも翼があったりなかったりして、動物とは違って全員に羽は描かれていない。

そして、俺が気付いた事とは、俺の知り合いの『超能力者』には翼が描かれてない。

美香先生は能力者ではないので、翼がある。

「よくわからんけど……」

色々考查しながら絵を眺めるが、もしかして、翼が描かれてないのは『能力者』だけじゃないのか？

ただ、知り合いが三人しかいないので断言はできない。

「……待てよ？」

絵を再び眺める。そこには別の意図があり、ある人物を探していた。……ない。

俺と、笹原の絵がない。恐らく笹原と優奈は接点が無い為か、笹原の絵が無いのは分かる。

しかし、俺の絵が無いのは何故だ。

「あいつ、俺の絵描いてないのかよ……」

どんな理由があるのか分からないが、ほんのちよつと寂しい気持ちになる。

優奈に聞いてみるか、と思ったその時、ぐしゃ、と何かを踏む。

その感触から紙を踏んだのかと思い、足元を見ると、そこにはヌイグルミに混ざって丸まった画用紙がいくつか散らばっている。かがみこみ、おもむろに踏み潰した画用紙を広い、広げた。

「え——」

そこに描かれていたのは、ツンツンに逆立ったオレンジ色の髪の少年——つまり、俺の特徴を持った俺と思われる男の子の絵と、ウェーブがかった長い髪の女の子——おそらく笹原の絵が並んで描かれてあり、水滴が落ちたような染みがいくつも広がっている。

「なんだこれ……」

他に落ちている丸まった画用紙を拾い、広げた。

そこには、青いハートの髪飾りをつけた少女——優奈と思われる女の子の絵と、俺の絵が手を繋いで描かれてあった。優奈には、白い翼が描かれてある。

「……」

他にも拾ってみる。

そこには、俺と優奈が仲良く遊んでいる絵や、一緒にご飯を食べている絵など、二人で描かれた絵が多く描かれていた。そして——

「優奈……」

優奈が、泣いている絵を見つけた。

そこには一人だけ、優奈だけが描かれていた。

「あいつ——泣いてたのか」

その絵にも、水滴が落ちたような染みが広がっている。

優奈は、この絵を描いていた時、涙を流していたのだろうか。

俺は絵を床に置いた。なぜか、これ以上見たくないという思いが大きくなっていった。

見るんじゃないかった——と、自分勝手に思う。

そして、『それ』はあまりに唐突に起こった。

「りゅうくん？」

「っ!!」

背後から声をかけられ、振り向くと、案の定そこに優奈の姿があった。

しかし、優奈の姿を見た途端、体が動かなくなる。

「りゅうくん、ゆうなのうちでなにしてるの？」

「お……お前、なんで素っ裸なんだよ!」

そう——優奈は裸だった。肉付きのよい様々なラインが目飛び込んでくる。

特におっぱい。おっぱいのかたちが存外よい。

「ええと、あの、なんで裸なの？」

「えへへ、ゆうな、さっきまでおふろにいたんだけど、おふろのな

かでねちゃったんだよ。それでさっき目がさめたの」

「ああ、そうなんですか……」

ははは、と笑い、もう一度優奈の生まれたままの姿を拝み、もう一度拝み、呼吸を整えもう一度拝み、言った。

「いや、俺優奈のお見舞いに來たんだ。美香先生に頼まれてさあ」

「ほんとう！？ やったあ！」

「ちょ、おい！！」

ぱあっと笑顔——優奈のいつもの笑顔——で、なんの遠慮もなく、産まれたままの姿で、俺に飛びついてくる。そして俺の耳元で楽しそうに言った。

「りゅうくんとひさしぶりにあそべるんだあ！ うれしいなあ！！」

「お、おい服！ 服着ろ！」

「ひさしぶりのりゅうくんのにおいだあ！」

「わ、わかったから服着ろって！」

なんて言いつつ、俺は少し安心していった。

いつもの優奈だ——と。

そこに何の根拠もないまま、知るべき真実から目を逸らす様に。

抱きしめられた俺から優奈の顔は見えなかったが——この時、本当に優奈は笑っていたのか？

○

『ハア……ハア……もうここまで来れば……ハッ、ハハハ……助かった……！ 俺は助——』

『ガオオオオ！！』

『う、うわああああああああああ！！』

「キャーッ！！」

……と、あまりの出来事に絶叫し、隣に座った優奈に思わずしがみつく。優奈はそんな俺の頭を撫でて、「えいがだからだいじょうぶ

だよ」と笑う。

そう、俺達は今、仲良くソファーに座ってホラー映画を見ていた。俺はヒーローアクション映画が大好きなので、過去3回もリメイクされた名作『キャプテン・アフリカ』を見たかったのだが、優奈がどうしても推してきたのがホラー映画の名作『死霊のねぶた祭り2001』である。俺はホラーが大嫌いだ。

優奈の手をしっかりと握り締め、次に来るであろう絶叫シーンに備える。

35型のデジタルハイビジョンテレビの中では、顔を恐怖に引きつらせ震える手で銃を握り締める男の姿が映しだされていて、その後からゆっくりと『何か』が近づいてくる様なカメラワーク……俺は生唾を飲み込み、優奈の手をしっかりと握り、画面を注視する。画面の男が危険を察知し、ゆっくりと後ろを振り返る――

「く、くるぞ……!!」

恐らく、テレビの中の男と俺の心境は同じ筈である。主観と客観の差は天と地ほどの差があるが、俺は感情移入しやすいのでここは同じといっておく。

カメラが男に近づく。その表情が、画面いっぱいに映し出され、その瞬間――男は振り返った。そこには――

『っ……』

「……!!……!!」

――何も映っていない。つまり、危険は無い。

男が安堵のため息をして、テレビの前の俺も安心して優奈の手を離す。が、次の瞬間。

『ガオオオオ!!!!』

『う、うわああああああああああああ!!!!』

「キャーキャーキャーッッ!!!!」

口いっぱい広がった死人の顔――響き渡る男と俺の絶叫。

安心してからの不意打ちはホラーの鉄板とも言える演出だが、本当にやめていただきたい。

「もう、りゅうくんうるさいよお」

「だ、だって怖いんだもん。ホラーは苦手だって言ってるだろ……」
「がうつ!!」

「キヤーッ!!」

「きゃはははははは! きゃーだってえ!」

優奈の不意打ちにソファから転げ落ちる俺。自分でも情けないと心のどこかで分かっているが、どうしてもこうなってしまうのだ。俺は立ち上がると、速やかに優奈にヘッドロックを決める。

「いたいよお!」

「天罰です」

腕の支配から逃れようと、腹にぽかぽかと柔らかい打撃を繰り返す優奈だったが、くすぐったいだけだった。

「はなしてよお! えいがおわっちゃううう!」

「いいんだよ! こんなもん見なくても!」

優奈を開放し、リモコンに手を掛け、電源を切る。あらゆる恐怖が一瞬にして灰色の画面の彼方へ消え去った。

「ああーっ!!」

「ふははははは! これで恐怖は去った!」

「りゅうくんのこわがり! りさちゃんにいつてやるんだから!」

「ははは……は? 黒霧?」

なんでこのタイミングでアイツの名を言うのか。

そういえば、優奈と黒霧の仲にも何か思うところがあったのを思い出し、せっかくなのでそれを聞く事にする。

「なあ優奈、お前と黒霧ってどんな関係なんだ」

「ふえ? ゆうなとりさちゃんとはともだちだよ」

えへへ、とテーブルの上に広がったポテトチップスを取る。

「いやそれは知ってるけど……なんか、お前の事詳しく知ってるん

だろ？」

本人を目の前にして変な質問だが——先生もそうだが、黒霧は俺の知らない優奈を知っている。

「なあ優奈、俺はなんで先生からお前に会うこと止められてたんだ？」

「……りゅうくんにはいつちやダメっていわれてるから、ダメ」
優奈は俯く。

「べつに、ゆうなのことなんかどうでもいいでしょ。それよりりゅうくん——」

すぐさま顔を上げた優奈は、笑っていなかった。

「ゆうなのへやで、なにしてたの」

底の見えない瞳で、俺を見つめる。

つい一時間ほど前の事がフラッシュバックする。

ヌイグルミで敷き詰められた床。

ラクガキだらけの壁

しろい

つばさをはやしたにんげんのえ

「あれ……お前の部屋なのか」

当たり前の事なのに、どこかでそれを認めたくなかったのか、胸に重く衝撃がのしかかる。

優奈は真っ直ぐ俺の目を見つめている。肯定も否定もしないという事は、肯定ととっていいのだろう。もとより答えはそれしかない。「そうだよ。あそこはね、ゆうなだけのへやなの。みかせんせいやりさちゃんもあそびにきてくれるけど、あそこにははいらないの」
ゆっくり立ち上がる——そして、近づいてくる。雰囲気が一変した事に俺はようやく気がつく。

「あそこはだれにもみせたくなかったんだよ？りゅうくんがくるなら、ほんとうはかぎをかけておきたかったの」

「っ……」

「ねえ、りゅうくん、どうしてきょうきちゃったの？あしたじゃだめだったの？」

「それは……先生に言われて……お前が……心配だったから……」
まともに優奈の顔が見れず、目を逸らしてしまう。優奈がすぐ前に居る。どんな顔をして俺を見ているのか——見ることが出来ない。さっきまでいい雰囲気で映画を見ていたのに、どうしてこうなった？——テレビを消したのは俺の責任だが、こんな事になるとは。あまりに白々しい言い訳が生まれてしまうほど、俺は動揺してしまっている。しかし。

「ゆうなのがしんぱいだったの？ほんとうに？」
「っ——」

この言葉に、つい頭にきてしまう。

「あ、当たり前だろ！？何日も姿見せずに、そりゃ先生に会うなって言われたし、俺だって色々あったけど、全く心配してなかった訳じゃねーんだからな！俺ん家であつた事とか、『アイ』って奴の事とか——先生達は何か知ってるみたいだけど、俺には何にも教えてくれねーし、正直訳わからねえんだよ！なんだっつうんだ！！」

「……りゅうくん、そんなにゆうなのこと、しりたい？」
「……それは」

知りたい、とうまく言葉に出ない。こんな言葉、口ごもらずに言えるはずなのに、何故かいう事が出来ない。

「りゅうくんがしりたいなら——いいよ。ゆうなのこと、ぜんぶおしえてあげる」

「優奈……」

柔和な顔をする優奈の顔を見て、俺はやっぱりこいつの事が知りたんだと確信していた。

それは聞いてはいけないという事も、心の中で思っていたのも確か

だ。しかし、何故か、そのタブーを破ってでも優奈の事を知りたいと強く願う俺が居る。自分でも何故それ程までに強い感情があるのかわからない。わからないからこそ、知りたい。

俺は何も言わず、黙って頷く。

「そう……ふふ……ふふふふふ」

「っ——」

優奈は何が可笑しいのか、顔を手で覆って笑い出した。

「りゅうくん、そんなにゆうなのことがしりたいんだあ」

「な、なんだよ」

「ううん——うれしい、かな……ふふ」

優奈はふらりと歩き出し、どこかの部屋へと消えて行く。そして、手に分厚い紙束を持って、俺の前に戻ってきた。一体それが何なのか、その一番上の表紙に『巫計画』と小さく記されている。

「ゆうな、おふろにはいるからかってによんでいいよ。どうせりゅうくんにはわからないとおもう」

「これ、資料……？」

ズッシリとかなりの重量があるそれを受け取り、一枚めくって見る。A4の用紙に敷き詰められた文字に気分が萎えていくのをどうにか堪え、一番上から読み出した。

「かんなぎ巫機関第三支部“エンジェルダスト計画”案……」

○

それは正直言って、吐き気のする内容だった。

掻い摘んで説明すると、『異次元生命体と接触を果たす為だけの特別な人間』の“製造”。

製造——つまり、人間を『造る』のだ。

人間同士の自然な交配によるものとは違う、いわゆるクローンだとか人造人間だとか、錬金術で有名なホムンクルスといった、非生物的な方法で人間を作成するといった信じられないものだった。

こんなSFの中の物語に出てくるような事を、本気でやっている——この計画の本質は、造った人間に異次元生命体エルファスの出現を予測させ、更にエルファスと『会話』をさせ、エルファスと意思疎通を成功させようといった全く現実味の無いものだ。

しかし最悪な事に、計画の現段階までの結果を見ると、どうやらそういう『能力』を持つ人間を造る事は可能であり、しかも実際何人も造られているばかりか、エルファスと接触させる所までいている。

だがしかし——その結果は他の『人間』と同じくエルファスに結晶化されてしまっていた。

奴らの出現を予測する事は出来ても、奴らの前に立てば他の人間と等しい結末が用意されている。

つまりは、それだけ多くの人柱が生まれている——造られているという事だ。

まるで人を人と思っていない——造った者を部品か何かか思っていない。

「なんだよ……なんなんだよこれは……!!」

優奈から貰った資料は『エンジェルダスト計画』でたった数ページしか占められておらず、後に控えた数十ページにも訳の解らんタイトルが記された計画書が幾つもある。その全てに目を通す気には全くなれず、その書類全てをテーブルに叩き付ける様に置く。

胸糞悪くてどうにかなりそうな気分だ。

しかし、これはこの世界で現実に行われている事だ。俺はそれを確信した。

「巫機関……巫かなぎって、優奈と同じ苗字だよな……」

そこに気付かない訳もなく、嫌な予感がした。とても嫌な予感だ。

「りゅうくんあがったよお」

優奈があまり宜しくないタイミングで風呂から戻ってくる。やっぱり産まれたままの姿でタオル一枚も羽織っていないが、今はそこに突っ込む気にはなれない。もちろん裸も見ない。

優奈はテーブルに置かれた書類の束を見て言った。

「もうぜんぶよんだの？」

「いや、最初の所だけだ……」

優奈がとおり過ぎた時、熱気とボディソープの柔らかな香りがした。

「えへへ、そうだとおもったよお」

「なあ、これが俺に見せたかったもののなか？」

「そうだよお。せんせいからいわれてたんだよ。もし、りゅうくんがゆうなのことをしりたいっていったらこれをみせなさいって。これ、ほんとはだれにもみせちゃダメってせんせいってたんだよ」

「……」

心臓の鼓動が、やけに大きく響く。

最近同じ事があったなとぼんやりと思う。

俺の頭の中では、最悪の予想が生まれていた。

それを信じる訳にはいかない。それを認める訳にはいかない。

だが、確かめない訳にもいかない——俺は重い口を開く。裸のままソファーに座り、テレビの続きを見ようとしている優奈の背中に向かって、言った。

「優奈」

「ん？ なあに、りゅうくん」

「お前さ……『コネクター』なのか」

「そうだよ」

それは、俺からしたらあまりにも呆気ない返事であり、結果であり、現実だった。

『コネクター』とは、エンジェルダスト計画で造られた人間のコードネームだった。

つまりはそういう事だ。そういう事だった。そのたった一言で止めを刺されてしまった。

「……嘘、じゃないよな」

「うん」

「どうして……なんだよ」

「どうしてっていわれても……ねえ、りゅうくん、これちゃんとよんだの？」

「エンジェルダスト計画って所だけだ。それ以上は読んでない」

「これ、ゆうなにがいうところだとくさんかいてあるよ。それだから、ここをいちばんうえにもってきてたんだよ」

書類のページをめくる音がする。俺は俯いて、拳を硬く握り締めたまま、何も言えずその音だけを聞いていた。

「ゆうなはね、できそこないってみんなからいわれてたんだよお。いろいろなことおぼえられても、あたまがよくても、いみがないから。でもみかせんせいが“せんでいかん”とおはなしできるようにいっしょにがんばろうっていつてくれたから、ゆうなはこれまでがんなばってこれたんだよ」

優奈は「なつかしいなあ」なんて言いながら、ページをめくり続ける。

「それでね、りさちゃんとあったのもしせつにいたときなんだあ。わたしがりさちゃんをりさちゃんってよんだら、りさちゃんは『私の名前は紗夜なんだけど……』っていうんだけど、ゆうなはりさちゃんってよぶほうがすきだから、りさちゃんのことりさりちゃんってゆうんだよお」

今更どうでもいいことを言いながら、ページをめくり続ける。

「それでね——」

俺は優奈の言葉を遮る様に——優奈の前に回りこみ、その肩を掴む。そして、

「ふつつつぎけんなああ——！！」

「！！？」

「なんでそんなにヘラヘラしてんだよ！？お前、お前自分が何なのか解ってのか！？なんで、なんでそうなんだよ、お前は——！！」

「なんでっていわれても、ゆうながゆうなだから、ゆうななんだよ」

「だからって、造られた事、何とも思っていないのか！？お前は、お前は——」

お前は——

俺は、優奈の目を見つめたまま、何を言おうとした？

お前は普通じゃない。

お前は人間じゃない。

お前はバカだ。

その全てが俺自身に当てはまる。

俺だって能力を持っている、普通の人間ではない。

そしてバカだ。こんな状況を自ら作り出しておいて、まだ全てを飲み込もうとしていない。

しかも、それを仕方の無い事だと納得しようとしている。

さらに、こんな状況の中、裸のままの優奈の肢体を堪能しようと、ちらちら視線を動かそうとしている。

精神年齢は肉体年齢と反比例しているくせに、なかなかの体だ。ふざけやがって。

「りゅうくん、さっきからなんでおこってるの？おなかすいたの？」

「いや、腹は減ってないけど……」

「じゃあ。どうしておこってるの？ゆうなのことでおこってるの？」

「お前……自分が何なのか、ちゃんと解ってんだよな……」

「うん。ゆうなはね、“せんていかん”とおはなしをするために、うまれたの」

「せんていかん……？」

さっきも聞いたが、『せんていかん』とは異次元生命体エルファスを意味する言葉なのか。会話の流れからしてそれに間違いはない筈だが——

どこかで、聞いた、事がある。

「せんていかん——」

草原。

塔。

結晶。

卵。卵。卵。卵。卵。卵。

天使。

——少女。

目にした筈の無いイメージが次々と頭に浮かぶ。

まるでそれが目の前にあるかの様に、鮮明でリアルだった。

なんだ、これは。

「っ……頭が……」

「りゅうくん？」

ピリピリと痛みを訴える頭を押さえる。そこに、なんの前触れもなく優奈の手が回され——抱きしめられた。柔らかい感触が顔一杯に押しつけられる。痛みはすぐにどこかへすっ飛んでいった。

頭を撫でられる。いい子いい子、というやつだ。遠い昔に、両親に褒められた時のと同じ。

「えへへ、ゆうなはね、りゅうくんがすきだよ」

「……」

「りゅうくんはいつもゆうなとあそんでくれし、ほかのみんなみたいにゆうなにいじわるしないし、だからすきだよ。ゆうなはいつもでもりゅうくんのともだちだよ」

「優、奈——」

する、と撫でられていた手が離れ、優奈と俺の距離が離れていく。もっと言いたい事があったのだが、さっきのでどこかへすっ飛んでいった。我ながらどこまでもアホだと思うが——

優奈の顔を再び見た時、頭の中でゴチャゴチャ考えていた事の全てが吹っ飛んだ。

優奈の目が金色に輝いている。

「な——お前、それ——」

「……」

更に、優奈の頭上に目と同じ輝きを持つ、環サークルが浮かび上がる。

優奈が立ち上がる。どこを見ているのか、解らない目をしていた。

俺は優奈から離れ、一体何が起こっているのか頭をフル稼働して考えようとするが、その電源すら入らず——

「うん……わかってる……『アイ』ちゃん……」

「『アイ』……!？」

優奈はアイツと話をしているのか？

ぶつぶつと天井を向いて、何者かと会話している。

「……来た、よ……」

「!？」

——来た？

何が来たのか、問いただす前に、『それ』は起こった。

この部屋の窓から見える、空——視界に映るその全てが光に包まれる。

「な……!！」

優奈を他所に、俺は窓を開け、テラスへ躍り出る。

空が輝いている。この光景が意味するもの、俺の記憶の中ではたった一つの事しか答えはない。

そして、優奈の豹変と、さっき読んだ計画書——俺の中の答えが一つになる。

それはあまりにも最悪の答えだ。

「うそだろ——」

光が輪になり、その中心から、光輝く巨人が現れた。

まるで子供の描いたラクガキの様な、足だけが異様に短く、伸びた手がまるで翼の様な。

始めてみる形だが、あれは間違いなく人類の敵——異次元生命体だ。
エルファス
しかも——

その背後から、同じ輝きを放つ“球体”が同時に現れた。

それは数日前、サンフランシスコに現れ、そしてすぐに消えた異次元生命体と同じ——

「きた……きたんだ……おはなし……しないと……」

背後でふらふらと動き出す優奈の気配を感じつつ、俺はその光景から目を離さないでいた。

十年ぶりにこの国に現れた敵——しかも二体。

俺はその圧倒的すぎる現実の前に、全く動けずにいた。恐らく、この町のどこでも俺と同じ様に動けずにいる者は多いはずだ。

二体の異次元生命体は全く別々の方々へ、動き出す。

その行動に何があるのか、伺い知る事は出来ない。しかし、危機である事には変わりはない。

「……あれ？優奈！？おい！」

振り向くと、ソファアの所に居た筈の優奈の姿が無い。

「優奈！？優奈！！」

ぬいぐるみの部屋や風呂場、他の部屋を見るがその姿はどこにも無い。テーブルに置かれた資料の束——それを見て、思い出す。

「アイツ——！」

優奈は異次元生命体のところに行ったのだ。

まだ信じられない気持ち強いが、優奈が奴らと接触する為だけに造られた存在なら、その使命を果たそうとするだろう。

さっきの豹変がその兆候なのだ。

俺はてっきり異次元生命体の出現場所や時間まで特定する事が出来るものと思っていた。

例の資料には、他のコネクタの実験結果にそれらの能力が備わっている事も明記されていた。

「ゆうなはできそこないだから」

その言葉を思い出す。優奈自身が言った言葉だ。

「っ……!!」

俺は優奈の部屋を飛び出す。外は既にパニックが起きている。

どこかで誰かの叫ぶ声が一番良く聞こえてくる。あの時と——10年前と同じ事が、10年ぶりに、この山瀬町で起きようとしている。

『球体”エルファス”がゆっくりと町の——学校へ向かって進んでいる。』

『“人型”エルファス』は丁度町の真上で静止したまま、動かない。

「あれは——まさか」

“人型”エルファスの頭——と思われる部分から輪が出現し、そこに光が集まっていく。

それは青色ではなく、深紅の輝きだった。

嫌な予感がして、足を止め、その光景を見る。俺のほかにもその光景を見ている者達も多く、異次元生命体^{エルファス}など生で初めて見るであろう子供達なんか、指差してはしゃいでいる。

“人型”エルファスの輪に集まった輝き——それが天に放たれ、幾つもの光のシャワーに変わって、町に降り注ぐ。

その瞬間、降り注いだ所から——多くの光の柱が上がった。

轟音が響き渡り、同時にアスファルトの大地が揺れる。

それはあらゆるものを結晶に変えてしまう輝きではなかった。

破壊——ただ、ありとあらゆるものを破壊する、閃光。

「え——」

光が俺の目の前に落ちた。落雷のような轟音と衝撃に吹き飛び、二、三回地面を跳ね、ようやく止まった時——

「うそ……だろ」

目の前にはぽっかりと大きな穴が開いていた。

光が落ちた所だと瞬時に理解する。

消滅——というしかない。俺の目の前にあった建物、道路、人、その全てが消え去ってしまった。

痛みを訴える体を見捨て、起き上がる。

人型のエルファスは大きな腕を振るい、周りのビルや他の建物を崩壊させていた。

そこから火の手が上がっている。それはもう派手に。

「始まってしまったわね」

聞きなれた声に振り返ると、そこには黒霧紗夜の姿があった。楽しそうに、佇んでいる。

「黒霧——お前」

「優奈は……行ってしまったのね」

黒霧は口元を歪ませ、俺の傍らに立つ。

「恐らく、貴方はまだ全てを知ってしまったというわけではないようだけど——」

俺の方を見て、右手を前に突き出す。

ごぼぼ、と不愉快な音がして、黒霧の右手に黒いドロドロとした何かが生まれる。

「な——なんだそれ——」

真っ黒な暗黒が広がり、どんどんと大きくなっていく。崩壊はすぐそこまで迫ってきているのに、俺は——こいつは何をしようとしている？

優奈は一体どこに行ってしまったんだ？

黒霧は右手に生み出した暗黒を更に広げつつ、俺を見据え、覚悟を決めた目をして、言った。

「貴方には消えてもらうわ。私の『混沌を渡り歩く能力』で——」
「はあっ!!!?」

#6／僕達は続いていく―前編

物語に始まりがあるとするならば、この俺——真堂龍介の物語にもどこかで始まりがあった筈だ。

そのスタートは一体どこからのだろうか。

母親から生まれた時？

自我が芽生え、好きなものとキライなものの区別が付き始めた頃？

『能力』に目覚めた瞬間？

両親を失った時？

新しい家族が出来た時？

優奈達と出会った時——？

それらの全てはこれまで確かに俺が経験してきた過去であり、人生そのものだ。

その中に幾つもの物語があるとするとするなら、確かにこれは、俺と優奈の物語だ——

○

「黒霧！！」

「動かないで。じっとしていれば、すぐに終わるわ」

不気味な暗黒を手に、黒霧は微笑む。

これが黒霧の能力——『混沌を渡り歩く力』

全く意味が解らないが……とにかくやばそうな事はよく解った。しかし。

「おい黒霧！何か知らないけど、今はお前と遊んでる場合じゃないんだよ！優奈が！」

「あの子から聞いたんでしょ？あの子自身の事を」

「そうだよ！だから——」

「なら探しても無駄よ。あの子は、あの子の使命を果たしに行った

のだから」

使命——その言葉に、あの資料を読んだときに生まれた怒りが湧き上がってくる。

「お前——全部知ってるなら一緒に優奈を探すぞ!」

「いやよ」

「な……」

ハッキリと言ったぞコイツ。

「お前——あれだけ優奈をオモチャにしてたくせに、見捨てるのか」

「貴方は何から何まで勘違いしているわ」

はあ、と深いため息をつく。

「これは全て計画の内。さすがにこんなに早くエルファスが現れるとは流石に思ってたかったけれど、始まってしまったのよ——『選定戦争』が——」

「選定……戦争……?」

「『選ばれた者』と『選ばれなかった者』……そのどちらにも大した差などありはしない。結局は『選択』を突きつけられた者がどんな『選択』をしたのか、その結果だけよ。その後の事が違ってくるのは」

そして——と、黒霧は一呼吸置き、

「私達『超能力者』はその能力に差はあれど、彼らの『声』を聞く事は難しいの」

「声……」

「彼ら——エルファスの『声』よ」

「あいつらが会話をしている……?」

こくん、と黒霧は頷き、視線を“人型”エルファスに向ける。破壊する光を放っていないものの、町を蹂躪するかの様に腕を振るっている。

そこでは、ここからでは見る事は出来ないが、きっと多くの命が失われているだろう。

「あの『執行官』は私達や普通の人間に対しても等しく語る言葉を

持たない——けれど」

視線を“球体”エルファスに向ける。それはゆっくりと俺達の学校に向かっている。

「あの『選定官』は、言葉を発している。彼らが放つ青い輝きこそが彼らの言葉——」

「……！」

選定官、黒霧は確かにそう言った。

「選定官の言葉はありとあらゆるモノへ語りかける。しかし、その言葉を『理解』してしまうと、結晶に変わってしまうのよ」

「なんだよ……それ」

超能力者以外のものを結晶に変えてしまう光が、奴らの言葉なのか。あいつらは一体、人間に何を語りかけているんだ？

「言葉の内容は『コネクター』を通して私達が解る様に交換されている」

「！」

「断片的だけど、『コネクター』を通して私達に伝わる言葉にする——『再誕』」

「再誕……」

「単語の通りの意味なら、『生まれ変わる』って事ね」

黒霧は右腕を下ろす。体の周りに暗黒を漂わせたまま、俺を見た。

「話はここまでにしましょう。まだ知りたい事があると思うけど、私、そこまで親切じゃないし……貴方を足止めできればそれでいいのよ」

「足止め——優奈の所へ行かせないつもりか……！」

優奈の言っていた「せんでいかん」が『選定官』なら、あの球体エルファスの所に向かったはずだ。

優奈が『コネクター』なら、やつらの声を聞くために——しかし、それを成し遂げてしまえば、優奈は結晶になって——

「黒霧……俺は優奈を止める」

「どうして？」

「わからねえのか。わからねえならそれでいい。でも、他の『コネクター』みたいにアイツを道具にさせたくねえ」

「それは貴方のわがままね。あの子はそれを望んではいないでしょうし、私も美香も望まないわ」

「そんなもん知ったことじゃねえ！お前や先生がどう思おうと、俺は俺のやりたい事だけやるんだよ！！」

黒霧の横を抜けようと、走り出す。黒霧は余裕の表情のままそれを眺めていたが、その距離が近づくと同時に右腕を掲げる。

「そんな偉そうな言葉、もっと強くなってから言ったほうがいいわ——」

黒霧の周囲を囲んでいた『闇』が、掲げられた右手に集まっていく。俺はやばい、とそう直感し、足元に落ちている拳大の石を念動力で持ち上げ、そのまま黒霧めがけ投げつける。

もちろん本当にぶつける訳はなく、黒霧の手に集まった不気味なものの正体を確かめるためだ。

「クスッ」

意味深に微笑む黒霧——石がうごめく暗黒に衝突した、その瞬間、ずぶずぶとまるで沼に沈んでいくかのように、石の姿がゆっくりと消えていった。

「なっ！」俺は足を止める。

「この『混沌』はありとあらゆるモノを飲み込む。無機物・有機物の区別なく——だから何したって無駄よ、真堂君」

その言葉が本当なら、かなり汚い力じゃないのか。

「な、なんなんだその能力！？」

「貴方の残念な念動力と比べて、使い勝手は抜群なの」と、左手からも『混沌』を出現させ、黒霧は言った。

背筋が冷たくなるのを堪えきれず、大きく息を吸い、吐き出す。深呼吸したっていい対抗策を思いつくわけじゃないが、油断だけはしない様に身構えた。

「真堂君、残念だわ」

「なにが……だよ」

黒霧の足元に『混沌』が広がっていく。まるで海の様だ。

足元の石ころを出来るだけ支配下に置き、それをいつでも飛ばせる様に自分の周囲に集める。例えば小石だろうと数を集めれば結構な重さだが、俺は自分の限界を理解している。その範囲で能力をコントロールすれば、こんな事ぐらい――

「――それは無意味よ」

「っ――!？」

ごぼ、と音がした。それは俺のすぐ後ろで、大きく伸びた闇の塊――『混沌』が俺に向かって覆いかぶさってこようとしていた。

俺は咄嗟に集めた小石を盾にするため、周囲の石ころを結集させる。

「くっ――!」

その場から離れた瞬間、盾にしようとした小石の塊があっさり『混沌』に飲み込まれる。

「言ったでしよう、無意味だと……」

「……!!」

「諦めなさい。どうあがいても、貴方に勝ち目はないわ」

「そんな在り来たりの台詞で俺は諦めねえぞ……!!」

何か他の手が無いか、動かせそうなものは無いか――

「ふふ――」

「!？」

黒霧の体が『混沌』に包まれていく。何が起こっているのか理解するより早く、その姿は完全に『混沌』に飲み込まれ、見えなくなつた。

ごぼごぼと不気味に泡立つ混沌が地面を這い、ゆっくりと俺の周りに集まってくる。

そして、俺の背後から――声が掛けられる。

「隙だらけよ？」

「なあっ!？」

俺はあまりにもマヌケな叫び声をあげ、振り向いた。そこにはいつ

の間にか黒霧の姿があった。

混沌の中を移動し、俺の背後に回った——そう判断する。

黒霧は俺の右手を掴み、強く握り締めてくる。俺はそれを振りほどこうとはせず、真っ直ぐ目の前の黒霧を見据えた。

「もう諦めたの？」

「いや、これからどうしようか考えてる」

「じゃあ、こうすればいいかしら」

と、黒霧は何の前触れもなく俺を引っ張り——抱きしめる。

「な、なんの真似ですか？」

「——二人つきりになれたのよ？ ようやく」

「え——」

何を言ってるんだ、こいつは。

いきなりこんな事されて戸惑わない筈もなく、黒霧はレズキャラじやなかったのかと頭を捻る。

ここまで接近されてしまったら、もう『混沌』のかわしようがない。しかし、黒霧は『混沌』を出そうとはせず、俺の背中に両手を回し、更に密着してくる。近い。近すぎる。

「真堂君——今どんな気持ち？」

顔の横で黒霧の声がする。どんな気持ちと言われても、この状況で緊張してしまって体が動かないし戸惑っている。

背中を撫で回す黒霧の手は妙に優しく、そこに攻撃の意識は全くない。

地を這っていた『混沌』も今は完全に活動をとめているが、しかし俺達を取り囲んで、誰も逃がさないようにしている。

「私はずっとこうしたかったわ」

「どういう事なんだ……」

「どういう事も何も、好きな人とは皆こうしたいでしょ？」

「好きな人——って、はあ!？」

黒霧が……俺の事を好き、だと。

「おい!俺にこんな色仕掛が通用すると思ってんのか!？」

なんて言いながら、俺はどうする事も出来ない。密着した黒霧の感触を嫌でも堪能してしまう。いや、それは完全に俺が悪い。それは解っている。

黒霧は若干息を荒げながら、俺の首筋に唇を押し付ける。瞬間、そこから全身に電流が駆け抜けた様な衝撃が走り――

「ひゃん!」と高ぶった声を上げてしまい、体を震わせる。

「……可愛い反応するのね。まだ誰にも穢されていないからかしら
いや、単に首筋が弱いだけです。」

「ねえ、真堂君。これから少し時間があるのだけど、どうする?」
「どうするって――」

「私は貴方を思いつき穢したいと思っているの。だから、これから誰の目にも触れない所へ行きましょう」

「なん……だと」

穢したい、なんて女の子に言われたのは勿論初めてだ。初めてなので、どうすればいいのか全くわからない。

勿論こんな事をしてる場合じゃない――黒霧を振り払い、今すぐにも優奈がいると思われる“球体”エルファスに向かうべきだ。

向かうべき、だが、その事を考えると別の感情がわき上がってくる。恐怖。

あの球体に向かう――10年前、俺の家族を奪った異次元生命体エルファスに似たあいつに。

「ねえ、真堂君。まだ優奈の事を考えているの?」

「……」

「貴方が行った所で、結果は何も変わらないわ。だったら私と事が全て終わるまで、楽しい事をしていればいいと思うの」

「……」

「私は貴方の事、本当に好きなのよ?男の中では一番大好き。優奈や蒼にイタズラするけど、それは貴方の反応が面白かったからで――」

「……」

「私は、ずっとこうしたかった……」

黒霧の顔が離れ、俺の目を真っ直ぐ見つめてくる。その背後で町が燃えているにも関わらず、俺はどこか他人事のような気持ちでそれを眺めていた。

俺が何を思っているのか解ったのか、それとも解ってないのか――黒霧はそんな事お構いなしに、顔を近づけてくる。

このまま行けばどうなるのか、誰でも予想はつくだろう。しかし、俺は黒霧の体を引き離した。

「……栗霧、やっぱり俺はアイツを止めに行く」

「……ふうん。やっぱり貴方ってそうなのね」

ふふ、と笑い、黒霧は俺から距離をとる。また『混沌』を生み出すかと思えば、一向にその気配はない。

「行けばいいわ。そして現実を思い知ってくるのね。私は影でそれを見守っているから」

黒霧はそう言って――姿を消した。悲しげな面持ちだったのが、俺の胸に何かを残す。しかしそれに捉われる訳にいかず、走り出した。“球体”エルファスは俺達の学校に向かって移動している。

黒霧の言った『選定官』があれば指すならば、優奈もきっと学校に向かっているに違いない。

そう確信し、騒然とする住宅街を駆け抜けていく。

○

「嘘でしょ……!」

山瀬高校保健医・綾小路美香は、町に顕れた二体の異次元生命体^{エルファス}を目にしていた。「こんなに早く現れるなんて、聞いてない……!」美香は書類の束を無造作に鞆に突っ込むと、携帯電話を取り出し、どこかへかけはじめた。

「え、何あれ」

「嘘でしょ、宇宙人じゃん!! テレビで見たことある!」

「いや異次元生命体だって！つか、光ってねえ？」

「え、なにあれ……」

保健室で休んでいた陸上部の少女達が、窓に駆け寄り、騒ぎはじめる。それはここだけではなく、廊下や校庭に居る生徒たちも異変に気づき、騒然となっていく。

「先生！あの丸いの、こっち来てる！」

「……あなたたち、早く避難しなさい」

美香はそれだけ言うと、繋がらない電話をごみ箱へ投げ捨て、保健室から出て行った。

惨劇が始まるうとしている——その気配を美香は『経験』から察していた。

「優奈ちゃん……！」

異次元生命体エルファスが現れたという事は、優奈に変化が顕れているという事だ。

美香はその場に居る事は無かったが、優奈の『変化』は優奈を調整していた美香自身が一番理解している。

『コネクター』として不完全な存在である優奈は、失敗作として処理される筈だった——

その理由として、精神年齢が子供のまま成長した事が第一に上げられ、異次元生命体エルファスを感知する力も弱い上に、ワガママ・食いしん坊・アホの子等、『コネクター』として欠陥だらけな事が多く上げられていた。

本来、『コネクター』には健全な肉体と精神が揃っている事が大前提で、それは異次元生命体エルファスと接触した時に、結晶化に対抗する力の強さに関わってくる。

これまで繰り返されてきた実験の結果から、『コネクター』は平均的に異次元生命体エルファスと接触後、数十秒間結晶化に耐える事が出来、その間だけ彼らと対話する事が可能になる。だが、優奈はその性質から数秒も持たず、つまり超能力を持たない普通の人間と等しい時間で結晶化してしまう。

欠陥製品は破棄されるのが世の常、優奈もそう判断されるのもそこでは仕方の無い事だった。

しかし、『優奈』と名づけられたコネクターには、優れた感性と記憶能力、学習能力が備わっていた。

優奈がこれまで処分されず、育てられてきた一番の理由がそこにある。

かなぎ巫機関の中で極めて特異だった優奈は存在が認められてからも周囲の風当たりは強く、その厳しい環境に耐える為、自らの力で『別人格の形成』を行った。

その結果産まれたのが『アイ』。優奈の苦痛のみを背負う、少女。これには機関の誰もが驚いた——と、美香は思う。

自分の逃げ道になるための人格の形成は、人間ならば珍しくない行為と言える。

しかし産まれた『アイ』は多重人格障害とは少し異なり、主人格の優奈とのコミュニケーションが可能であるばかりか記憶の共有をする事が出来ていた。

優奈の辛い記憶を全て受け取り、優奈自身は苦しみや苦痛からほぼ無縁の生活を送る事が出来るようになり、機関内での生活を快適にさせていった。

しかし、それだけでは優奈自身が成長する事は不可能なので、当時研究員の一人だった美香が優奈の教育を任される事になった。自分を姉の様に慕ってくれた優奈の顔が次々と浮かんでくる。

しかし——それももう、今日で終わりだ。

思い返せば、この仕事も正直あまり楽しいと言える事ばかりでは無かった。

優奈に会った当初、その性格に何度も苛立ち、手を上げてしまった事もある。

他の計画で集められた子供達に苛められていた時は、泣いてばかりだった。

『アイ』が優奈の中で生まれた時から涙を見せる事は無くなり、逆

に誰も寄り付かなくなった。

「それも全部、今日で終わり……」

何となく、寂しい気もする。

これが終われば、機関へ戻る事も出来るだろう。優奈を同年代の子供と接触させ、精神の成長を図ろうとした実験は、結局なんの意味もなかったが――

「真堂龍介……くん」

彼は、優奈と深く関わろうとした稀有な少年だ。今、一体何をして
いるだろうか。

自分の思惑通り、あの資料を見たのなら――助けに行くだろうか。
少し、残念な気もする。結局は何も変わらない事もそうだが、これ
で龍介とも別れる事になるだろう。

これまで何度か男子生徒に告白された事はあるが、年下にはあまり
興味が無かったので一切その気になる事はなかったが、何故か龍介
には惹かれる所があった。

もう二度と会う事はない少年の顔を思い浮かべ、少し感傷に浸る。
教師生活も終わる事になるので、そういう意味でも寂しい。

「教師もなかなか悪くなかったわ――」

と、感傷に浸る事を終えた、その瞬間。

美香の目の前が真っ白に染まった。

“人型”エルファスの放った光の第二波が、校舎を、校庭を、撃ち
抜いていった結果、起こったものだった。“球体”エルファスが着
くよりも早く、起こってしまった悲劇だった。

音が遠くなっていく――美香は廊下に倒れたまま、意識が薄れてい
くのを感じていた。

真横になった視界に、赤い色が広がってゆく。足の感覚が無かった。
目を動かすと、天井に大穴が開いていて、上の階や更に上の階まで
丸い大穴が広がっている。

“人型”エルファスの放った光が校舎を射抜いた為に起こった現象
だった。

そして、光が到達した場所に居た美香と廊下にも、大きな穴が貫通していた。

美香のへそから下が完全に消失している。その下の廊下にも丸い穴が広がっていたが、美香自身にそれを確認する事は永遠に出来ない。
「……」

全てが真っ白になっていく瞬間、優奈の笑顔が見えた。
美香の口元にも、自然と笑みが浮かんだ。

○

「みかせんせい」

「……」

「みかせんせい……」

「……」

優奈は倒れたまま動かない美香に何度も呼びかける。

もう美香とは二度と話をする事は出来ない事を理解していたが、納得は出来なかった。

「せんせい……」

美香の姿を見て何を思ったのか、優奈はフラフラと歩き出した。
屋上に行かなければならない。そこなら、選定官との対話もしやすい。

これで全てが終わる事を、優奈自身も理解していたが、まさか美香自身も終わってしまうなんて、夢にも思っていなかった。

「ゆうなができそこないだから……ごめんね」

焦点の合わない目線を漂わせ、優奈は歩く。時間がなく適当に着替えた制服はどこも乱れていて、靴下も片方しかなかったが、恐らく対話にはなんの関係もないだろう。

○

学校に着いた。

校庭や校舎も穴だらけで、さっき人型のエルファスが放ったビームがそれらを撃ち抜いた為にそうなったのだろう。校庭には人が居ない。この時間なら外で部活をやっている生徒が居るはずだが――

「っ……」

考えたくない。校庭の穴になった所に人が居たならば、結果は考えなくても解る。

俺の頭の上には、球体のエルファスがゆっくり近づいて来ていた。体の表面にいくつも目を顕し、何かを探しているかの様に動かす。

「真堂くん！」

「真堂……」

聞きなれた声がした方に振り向くと、笹原と要の二人が息を切らせている。

「お前ら、まだ学校にいたのか！」

「ええ、私は図書室で勉強を……」

「ボクは食堂でうどんを……」

「そ、そうか」

理由はそれぞれだが、ここにいとあまりに危険だ。

「二人とも、優奈を見なかったか」

「優奈……見てない」

要が首を振って否定する。笹原も知らないみたいだ。

「これがエルファス……」

笹原は俺達の丁度真上に来ていたエルファスを見上げ、それに見入っている。

青い輝きを纏うその球体はあまりにも現実感がなく、幻想的な雰囲気気を醸し出している。

二人は恐らく、こいつを始めて生で見ているのだろう。

十年ぶりに、その姿を見て俺自身手の震えが収まらない。何とか二人には気づかれまいと後ろ手に回す。

「真堂、紗夜を見なかった？」

要が携帯電話のカメラ機能を使って、球体を撮影しながらぼんやりと言った。

「黒霧なら――」

さつき、優奈のマンション前で別れたきりだ。あいつなら無事だろうが、要には何の連絡をしてないのか。

「知らない。俺は優奈を探しに来たんだ」

「巫さんを……？」

笹原が何を思っているのか俺の顔をジッと見つめる。

「優奈がどうしたの」

「それは……」

どう説明すればいいのか、わからない。優奈の事を話してこの二人はどう思うのか、その不安が先に来てしまい、正直に全てを話す事がためらわれる。

しかし、優奈を止める為に二人の力があれば、事は満足に運ぶのではないか。

『コネクター』について話して二人がどう思うのか、不安の大きい所だが、俺は意を決し全てを話そうとした——その時だった。

『待ってたぜ！この時を！！』

スピーカーで拡大された声が、空から降り注いでくる。

「あ、あれ！」

笹原が指差した方を向くと、穴だらけになった校舎の屋上――しかも貯水タンクの上に、ギターを構えた仁が立っていた。

その正面に、近づいてきた球体エルファスを望み、今、仁はピックを振り上げる。

『ウエルカムトウザ山瀬町!! さあ宇宙人! 俺の歌で友達になろう
!! 行くぜえー!! ツツ!!』

完全なるバカの出現に、一同嘩然として仁の能力で学校中に響き渡る音を聞いていた。

もし仁がやつらに遭遇すれば、きっと本物の宇宙人でも同じ事をするだろう、と予想はしていたが、校舎も攻撃されているし、生徒達が逃げ惑っている中、本当に歓迎ライブを行うとは、きっと要や笹原——学校中の生徒達が予想していなかっただろう。

ある意味感動的な、本物のバカである。

「おい仁！なにやってんだ！」

何をやっているのかは既に理解していたが、それでも叫ばずにはいられない。が、俺の声は仁まで完全に届いていない。この響き渡る爆音、オンチな歌声のせいで、ここは本当にリサイタル会場に変わってしまった。

「遠くで聞いててもやっぱヘタクソ……」

要の嘆息とともに吐き出された毒舌すら、仁には届かない。当たり前だった。

球体エルファスはその巨体をどんどん校舎に近づけ、とうとうその体を校舎に沈みこませる。だが、校舎は崩壊するどころか窓ガラスでさえ全くの変化を見せず、その巨体を受け入れていた。何が起きているのかよく目を凝らせば、球体の表面がまるで水面のように小波立っている。

まるでその体が液体で構成されているかのようだ。

「融合……してる？」

要の呟きに、俺は無意識に頷いていた。異次元生命体は、学校やニユースで習う知識の中では何年もその正体が不明な生物であるため、こういう事も平気で出来てしまう——と頭の中で納得してしまっていた。

「音宮君を止めないと——」

と、笹原が思い出したかの様にそう言った瞬間、球体エルファスの全身がまばゆく青い輝きを放つ。

「あれは——仁！」

ぱん、と破裂する様な音の後、俺達の視界が瞬時に光で覆われ、球体エルファスが沈んだ部分を除き、校舎の全てが結晶に変化する。逃げる、というたった一言さえ言えず、仁の音楽はその奏者ごと光の中に――消えず。

『うおっ熱っ！まぶしっ！でもまだまだ行くぜええ――って、なんだこりゃあ！！』

……ここからでは見えないが、恐らく校舎が結晶に変わってしまった事に驚いているにちがいない。

能力者以外を結晶化させるあの光は、自分の身につけているもの意外は全て結晶になってしまう。

10年前の経験から、俺もよくわかっていた。

「ぶ、無事みたいですな……」

「……バカはしぶとい」

「おい、二人とも頼みがある」

『え？』

同時に振り向いた笹原と要に言った。

「二人はあのバカを殴っても止めてくれ。俺は、やる事がある」

「え……殴ってもいいんですか……？」

「殺すんじゃないくて？」

殴る、という単語に目を輝かせる笹原と、物騒な単語を素で言った要を、今は無視する。

「とにかく、頼めるか？」

「はい！了解しました！」

「……仕方ない」

「ありがとう。出来れば、まだ他の生徒が残っていたら避難させてくれ」

「わかりました！行きましょう、要さん！」

「……」

要は何か俺に言いたげな目をして、先に校舎に走り出した笹原についていく。

周りを見るに、逃げ遅れている生徒は居ないようだが、校舎の中にはまだ残っているかもしれない。

「……悪いな、笹原、要」

俺は優奈を探す。頭の中ではそれしかなかった。

○

そこは完全なる別世界だった。

見慣れたはずの廊下は全てクリアに透き通り、あちこちから不思議な輝きを放つ水晶を生やしている。

ここから見える教室の中に結晶となった人間の姿が無い事が、俺にとって唯一の救いだった。

恐らく、この校舎に誰も残っていないだろう。

俺達の通う山瀬高校は空から見下ろせばアルファベットのHの形をしていて、ここ西棟にあるのは三学年の生徒が通う教室だ。

誰も残ってなければいいが――

「うっわこれヤベェ！マジヤベェーよ！！」

「ちよつとレオ！こつちもすごいよ！」

――そういう訳にはいかないらしい。今、俺の目の前に爬虫類じみた顔の先輩と、その彼女が携帯電話を片手にはしゃいでいる。

やはり石動獅子という男は、こんなこんな時でもぶれる事のない、ある意味尊敬できる男のようだ。

「先輩、何やってんだよ！」

俺は二人に掴みかかる。

「んだテメェ！って、お前かよ。おい見ろよコレ！すごいぞ！」

「いや、はしゃいでる場合じゃないですから！アンタ能力者？」

先輩と一緒にってはしゃぐ女生徒にそう声をかける。しかし、彼女は首を振って答えた。

「あたしノーマルだし。てゆうか、これやばくね？レオ」

「やばすぎて逆に笑えるレベルだわ」今ツイッターで『今被災なう』

つてつぶやいた」

「レオセンスありすぎゝやばすぎゝ」

「今本当にヤバイのは貴方達の頭です……」

はあ、とあまりの能天気ぶりにため息をつく。これがゆとり教育の生み出した弊害なのか。

それでも、見捨てるわけにはいかない。

「先輩達、ここに居ると危ないから逃げてください」

「はあ？何言ってるんだオメエは。せっかく宇宙人が久し振りに日本に来たんだぜ？だったらトモダチになるっきゃねーだろ！」

「あんたもあの音楽バカと一緒にかよ！」

「ああ！？今なんつったあ！？」

「いえ、なにも」

くそ、この人を説得する事はどうやら東大を受ける事くらい難しい様だ。

なら無理矢理引っ張って行くしかない――

「ね、ねえ、それなに？」

女子生徒の声に、『え？』と同時に振り返った。そこには――

『――』

結晶と化した天井から、ずるりと伸びた透明な蛇――に似たなにか――が、俺達を眺めていた。

蛇の先端には目があり、それをギョロギョロと不気味に動かしている。

「な、なんじゃこりゃ……」

と、先輩がその蛇に触れようとした、その瞬間、蛇の目が青く輝く。俺はすぐ隣に居た女子の腹に手を回し、廊下に押し倒した。瞬間、真後ろで青い閃光が閃く。

「ちよ、なにすんのよおゝ！いてえじゃんかゝ！」

「……っ」

女子の言葉を見せしめ、起き上がった。見ると、さっき先輩が立っていた所には変わりに一際大きな結晶の塊が置いてある。

ゆっくりと天井に消えていく蛇を眺めつつ、その結晶の表面に手を触れる。

「ね、ちょっと、レオは！？レオどうしちゃったの？」

「……あんだ、先輩の何番目の彼女？」

「はあ？レオの彼女は私だけだし！何言ってるの！？」

「……先輩は結晶化した。これが先輩だ」

「えっ」

女子はおもむろに結晶体に近づく。彼女が先輩に触れる事はこれまで何度もあっただろう。だが、それも今日で終わりだ。

先輩が付き合っている他の彼女達には申し訳ないが、最後に先輩に触れる事が出来たのは、名も知らないこの女子だった。

「なんで……なんでこんな事になってんのよ！信じられない！まじうざいんだけど！なんなのよこれ！」

「エルファスの事知ってるだろ。能力者以外の人間は、こいつに結晶にされるんだ。だから早く校舎から避難しろ。お前もこうなるぞ」

「え……れ、レオはもどるよね、もどるんだよね？」

「今の所、結晶化した人間を元に戻す方法は見つかってない。こうなった人間は死亡扱いになる……」

その後は、政府が軍を寄越して後処理を始める。10年前のあの時も――そうだった。

結晶化した両親が、軍用トラックで運ばれていくのをどこか他人事の様に見つめていた、10年前の悪夢の終わりを思い出す。

「うそ……」

女子はその場に座り込み、俯いたまま静かに泣き始めた。あれ程結晶と化したこの空間にはしゃいでいた者が、急にこの状態である。

それ程先輩のことを本気で好きだったのだろう。

だが、彼女もここに残していく訳にはいかない。

「早くここから出るんだ。あんだもこうならない内に」

「……」

俺の言葉に納得したのか、静かに立ち上がる。

そしてそのまま、力なく歩き出した。俺はその背中を見届けた後、もう一度先輩を見る。

「……結局、貸した金返してくれませんでしたね……」

○

——呼んでいる。

——誰が？

——記憶の中には、この声に該当する者はいない。

——では、誰が自分と呼ぶのか。

『優奈』

——この声は知っている。

——自分の心の中から響くこの声は、もう一人の自分自身だ。

——辛い事や悲しい事全てを押し付けた、押し付けてしまった、もう一人の自分。

『優奈、大丈夫？』

「えへへ……だいじょうぶだよお……ゆうな、ちゃんとできるからあ……みんな……みんな……ゆうなをほめてくれるよお……」

『龍介が近くにいます』

「りゅうくん……りゅうくんもゆうなのこと、ほめてくれるかなあ

……」

——もう一人の自分は何も答えない。

——彼女はあの少年を嫌っている。

「もうすぐ……もうすぐ……ぜんぶおわる……やっとな……ぜんぶ……

……うふ、ふふふ、ふふふふ」

——これで何もかもから解放される。

——嫌な事、悲しい事から逃げていいのだ。

しかし——

『優奈っ！』

両肩を掴まれる。

振り向くと、そこには見知った顔があった。いつもと何か様子が違うが、確かにそれは私の良く知る顔だ。

三白眼につり上がった眉、一件不良にも見えなくはないオレンジがかった金髪。

この学校に入って初めて出来たトモダチ。

いつの間にか、一緒に居ることが当たり前だった存在。

その少年が、何やら必死な顔で、自分を見ている。

『優奈！何してんだよ、お前！』

「りゅうくんこそ、なんでこんなところにいるの？わすれものしちやったの？えへへ、うっかりやさんだなあ、りゅうくんは」

『め、目がいっちゃってる……おい優奈、しっかりしろよ！』

ガクガク両肩を揺さぶられる。そう、この少年は私に対して暴力的な事をする。

勝手に家の中に入っても怒るし、彼の所有物を自分のもののように扱っても怒るし、ゲームで勝っても怒る。

わざとゲームに負けてあげてもやっぱり怒るし、私がトモダチにイタズラされていても私に怒る。

そんな怒りっぽい彼が、何故今泣きそうな顔をしているんだろう。

『計画はもう終わってるんだよ！だから、優奈がエルファスと話す必要なんてないんだ！』

「けい……かく……」

『お前を結晶化なんてさせねえ！だから、逃げるぞ！』

少年は私の手を掴み、どこかへ連れて行こうとする。

このまま、彼と一緒に行くのもいいのかもしれない。どうせもうすぐ終わってしまう世界だ。

どこにいても終わってしまうのなら、最後は好きな人と――

『だめよ』

「……あい……ちゃん」

『私達——私が生まれてきた理由を思い出して』

「わたし……は」

理由。

生まれてきた、理由。

『コネクター』^{エルファス}は、異次元生命体と対話する為に生まれた。

その平均12・39秒の僅かな時間の為、生まれたのだ。

何人もの兄弟達がその実験に使われ——命を落としていった。

自分はたまたま欠陥を抱えていた為、この極東の地に送られてきたのだ。

今は亡き、綾小路美香と供に。

『ようやく、その時が来たの。私達で、ようやく終わるの……終われるの』

「……そうだよね。ようやく、だもんね」

『優奈!?!』

私は見知った顔の少年の手を振り解き、対話の場所へ向かって再び歩き出す。

「さようなら……りゅうくん」

『おい!!』

「さよなら……」

手を、伸ばす。

伸ばした先は結晶と化した天井。そこから、透明な何かが降りてくる。

私はそれに優しく触れられ、その何かがいくつも体に巻きついてくる事を許した。

ゆっくり、足が廊下から離れ、私は天井に吸い込まれていく——

○

『優奈……』

俺はただ見ているだけだった。

さつき先輩を結晶化させた、おそらくエルファスの触手であるだろう透明な蛇に優奈は連れて行かれてしまった。

屋上に向かったのか、天井に消えていった。

俺はその一部始終をただ立ち尽くして見守るだけで——何も出来なかった。

「……くそっ！」

だが、しかし、それでも、まだ、まだ俺は——

「もう諦めなさい」

一步、優奈を諦めまいと廊下に踏み出したその一步が、暗黒のぬかるみに^{はま}嵌る。

背後からしたのは黒霧のもので、それに気付いたのは俺の下半身が全て暗黒に飲み込まれた時だった。

「これは！うわあ！」

「……貴方はよく頑張ったわ」

——頭上を黒霧の足が通り過ぎる。その時、制服のスカートの最奥、穢れ一つない純白のショーツが辛うじて見えた。

黒霧のやつ、キャラにあわないモノを穿いてやがる——！

「なにすんだよ！うわ、沈む！ちよちよちよ、まったまった！！」

足をバタつかせるが、深い泥沼に沈み込んだかの様に体はどんどん闇に飲み込まれていく。

ゆっくりと、しかし確実に。

黒霧のおみ足がまるで塔のように高く伸びている。見上げればそこに悲しげな顔の黒霧の顔があった。

「く、黒霧！優奈が連れてかれたんだぞ！」

「もう貴方に出来る事は何もないわ」

「ならお前がなんとかしろ！」

「私は優奈の監視役の一人よ。これで任務も終わる」

「ふざけんなブサイク！」

ぐり、とローファーで頭を踏まれ、一気に首元まで沈み込む。なんて無慈悲な一撃であろうか、せめてもう一度パンツを拝もうと頭を振るが、黒霧は強く踏みつけたまま動かない。

「や、やめろ！沈む！沈む！おい黒霧！！」

「これでいいのよ……心配しないで。全て終わってから貴方を解放する」

「くそっ！！くそおおおおお！！」

「……どうして、貴方は……」

黒霧の悲しげな声が、混沌の中に沈み行く俺の耳に届く――

黒霧が何を言いかけたのか、音も何も聞こえなくなった俺にとって、もはや意味のない事だった――

――後編に続く。

#7／僕たちは続いてく 一後編

「うふふ、うふふふふ」

「なに笑ってんのよ気持ち悪い……」

「だってだって、素敵ではありませんか」

「なにがよ」

「この光景、その全てです」

60メートル近いビルの上から、皇帝学園の制服に身を包んだ二人の少女は、真下に広がる光景に目を細めた。突如現れた異次元生命体^{エルフ}によって、破壊の限りを尽くされた町は、建物や道路にいくつも大穴が開き、まるでその部分が最初から無かったかのように綺麗にくり貫かれていた。

少女達が到着したのはほんの数分前だったが、その時は既に人型のエルファスの攻撃は終わっていて、当のエルファスも宙に浮かんだまま、静かに佇んでいた。

「ようやくこの時がきたんですね。私達『超能力者』が巨大な敵と戦う……十年前の日本では当たり前だった事が、ようやく私達の世代に回ってきた……!」

少女の一人は楽しそうに口元を歪め、うっとりとした目で頭上の人型エルファスを見つめる。

その隣の、彼女の相手となる少女も軽いため息を吐いたあと、相手と同じ様に口元を歪める。

「ま、そこらの不良を苛めるのも悪くなかったけど、やっぱり人類の敵と戦う方が燃えるっしょ」

「ええ、その通りです」

「エリート達みたいに海外遠征とかないし、ここでいいところ見せないか」と

「ええ、ええ、その通りです」

ふふふ、と笑う二人の美少女――

まるで、自分達の為だけに用意された闘いだ、と言わんばかりの面持ちで、目前の敵を見据える。

「さあ、行きましようか、佐藤さん。私達も、戦場へ」

「そうね鈴木。また『宵』や『氷室』達『生徒会』だけにいい恰好はさせないんだから!」

お互いが頷き、いざその場から戦場へと飛立とうとした、その瞬間。

『――――』

轟音、天を貫き真っ直ぐと人型エルファスを脳天から光が撃ち抜いた。

その後、人型のエルファスは音もなく地上に落ち、ガラスが砕ける音と共に消滅した。

一瞬――ほんの一瞬で、猛威を振るっていた強大な敵は、さらに強大な力によって押しつぶされた。

そして、呆気にとられる佐藤と鈴木の二人だった。

「いまのは……」

「白銀さんの『天覇神弓』……」

無力な一般市民にとって、暴虐の限りと言える力を振るっていた人型エルファスは、更に暴虐な力を持つ能力者によって、瞬時に塵と化する。

鈴木と佐藤の二人だけでなく、その光景を目にしていた者達皆が呆気にとられていた。

そして、タイミングを見計らったかのように、二人の耳にあったイヤホンから怒号が飛ぶ。

それは幼い声だった。

『あんた達! まだ一匹残ってるでしょ! さっさと行きなさい!』

佐藤と鈴木だけに飛ばされた言葉では無かったものの、二人はため息を吐いた。

「はあい」

「了解……」

二人は自分達の見せ場を奪われたことにショックを受けつつ、残りの球体エルファスに向かうため、踵を返した。それが自分達にとってもっとも害の少ない存在である事は重々承知していたが、仕事なので仕方が無い事だった。

○

落ちて行く。

視界は混沌に飲み込まれた瞬間から真っ暗で、上も下も右も左も全てが黒一色に染められ、深い深い沼の中に沈められていく。しかし、ここには酸素がある。これが本物の沼だったならば、俺は既に肺やら胃袋やらが泥水で満たされて溺死していただろう。

だが黒霧が作り出した“混沌”の中は、呼吸が可能な程の酸素は存在している様だった。

押入れの中の空気——といえば、想像に難くない。

「くそ——！」

俺は何とかしようと手足をバタつかせる。真上にはまだ僅かに光が輝いていて、そこから落ちたのだと理解できる。

体が深淵の底に近づくほどその光は小さくなっていき、都会の夜空に輝く一等星の如く僅かなものに縮んでいく。

ここに底があるのか解らないが、どんどん後戻りが出来ない深さになっていくのは実感できた。

まだ、ここからでる手段はある——俺はそう信じ、手足を動かすが、体は浮上するはずも無く、無慈悲なまでに下へ下へと下がっていった。

「優奈……っ！」

優奈は、行ってしまった。

学校と融合(?)した球体エルファスに——あの資料にあった、『対話』とやらを始める為に。

そんなもの、資料に書かれた結末通りに運べば優奈は確実に結晶になって死ぬ――

俺は、そんな結果に納得できるわけがない。

この眼で見た、両親と産まれて来る筈だった妹が奪われた瞬間。それを再び見る事になる。

「っ――」

優奈――俺は彼女の事が好きだ。

頭がいくせに、精神疾患だかなんだかしらないが中身は子供で、自分の好きな事しかない邪気まみれの無邪気さが、好きだ。

まるで自分の妹みたいに、思っていた。いや、今もそう思っている。妹が居るとはこんな感じなのか――と。

あの居心地の良さは、要や仁と過ごす中では見つからない、味わえないものだった。

他の奴らがなんて言おうと、俺は優奈と一緒に居たい。卒業してバラバラになってもたまにあったりして『変わってねえな』と嘯きたい――

そんな単純で面白みの無い、大切に当たり前の事すら、俺には許されないのか。

「ふざけんじゃねえ……!」

大切な友人達と大切な日常を過ごす――当たり前すぎて失いそうになって初めて価値が解る、そんな単純な事に今更気付いた。

体が沈んでいく。

俺は遅すぎたのだろうか。

「……」

俺は結局、何も出来なかった。

「……っ」

あの時と同じだ。むぎむぎと結末を受け入れようとしている。

「……!!」

俺は――>目を閉じた――

誰の運命も変える事が――>深呼吸する――

でき——>力を発動する<—————その時、俺の体は、す
んど地に足を着ける。

「できる!!」

俺の持つ念動力テレキネシスは世界でも最低ランクに近い、ちっぴけなものだ。
自分の体重より重いものは中々動かす事が出来ない。

ただ——そう、ただ、自分の体重より軽い、例えば“今俺が履いて
いる靴”なんかは、何の苦も無く、瞬間に“空中に固定”する事が
出来る。

すなわち。

「うおおおおおおおおお!!」

能力を発動し、靴を宙に固定する、この事により俺は『履いている
靴の上に降りた』状態になり、その反動で両足に軽く衝撃がはしる。
そして、靴に俺の体重が上乘せされた瞬間、能力は解除される。

しかし、ここはまるで泥の溜まりの様にぬかるみ、能力が解除され
た所ですぐさま落ちて行く事もなく、数秒くらいなら例え空中や水
の中でも踏みとどまることが出来る。

よって、見えない階段を登る様に、一步ずつ天に向かっていく事が
出来る。

一步踏み出し、固定。また一步踏み出し、固定。

この連続——踏み出した足の靴を固定していく事により、俺は一步
一步確実に、天に近づいていく。

「これなら——!!」

昔、高い木に引っかけた風船を取ろうとして、編み出した念動力
技。

あの時は、風船を取れたけどその後降りられなくなり、院の皆に見
つけてもらうまでずっと木の上で泣いていた。

だが、今はもう泣くわけにはいかない。

今、泣いている優奈の為、俺は再び天を目指す——!!

「……」

黒霧紗夜は、全てが透明になった校舎の廊下で一人佇んでいた。
真堂龍介は保護した。

自分の中でも最も安全と確信する場所だ。混沌の中に閉じ込めてしまえば、空を飛ぶ力が無い限り出で来る事はない。もしくは、自分と同じ『空間に干渉する』能力者ならば、混沌から脱出する事が出来るだろう。

「もう、何もかも終りなのね」

学校生活も、監視生活も。

始めはただただ下らない任務だと思っていた。

既に廃棄したコネクターの観察など、下っ端にさせておけばいい仕事だ。

本来の自分の仕事は“組織”の敵となり得る者の排除——つまり暗殺である。

そして自分の『混沌を渡り歩く』力は最もその仕事に適していた。

音も無く、迅速に、証拠も残さず、対象を消去する。

消去と言っても混沌の中に閉じ込めるだけでは相手をすぐに殺せないなので、永遠に続く深淵の中で餓死するか発狂してしまうか、そのどちらかを待つだけでいい。

後は、引越す時に便利で普段から荷物を持たなくてもいいので、任務のない日常で使う事など殆どなかった。

要や他の可愛い女の子と過ごす日常に、この力が必要が無かった——それが、今日で何もかも終わる。

数年ぶりに会った『命の恩人』と過ごす日常も。これで終りだ。

結局、龍介は自分の事を思い出す事は無いだろう。

第一、出会ったその日に思い出したのは自分だけだった。

否、龍介の事を忘れた事など、ただの一日も無く、組織に保護され

沌の狙いは大きく外れ、クリアな天井を真っ黒に塗りつぶす。

「なっ——！」

栗霧はその場から退こうとバックステップで飛び退る——事を見越していた俺は、更に能力を発動する。

「喰らいやがれっつ！」

右手の親指を下に向け、狙いを定めた。

「ひゃ——！？」

あまり聞きなれない、黒霧の小さな悲鳴。飛び退ろうとした黒霧は、足を滑らせ床にすっ転ぶ。そんな彼女の膝あたりに、穢れ一つ無い純白のショーツが——

Q. 歩いてる人のパンツをいきなり降ろしたらどうなるの？

A. 転ぶ。

「これこそ禁断の奥義、『墮天』フォールダウン！！！」

これは決して女の子にしてはならない念動力の技。

小学生の頃、幼馴染を苛めていた悪がきを懲らしめるのに使っていた技で、彼らのズボンをこの技で遠距離から下げていたが、ある時同じ院に暮らしていた少女にしてしまい、その結果フルボッコにされた挙句1週間も口を聞いてもらえなかった苦い記憶が蘇る。

優奈に見せられなかったのはこの事に起因する。

「な、なんて事をするの——！」

珍しく顔を真っ赤にさせ、スカートの裾を押さえ込む黒霧に不覚にもトキメキつつ、着地した俺は距離を詰める。

黒霧の脛辺りまでに下がったショーツにチラチラ視線を送りつつも、俺は歩み寄った。

「勝負あったな……」

「こんな事しておいて、よくもそんな顔で言えるわね！」

「だってこうでもしなきゃ止められねえだろ！俺弱いんだし！」

「それなら、飛び掛るなり殴るなりすればよかったのよ！」

「お前にそんな事できるか!!」

「っ——!」

ハッとした後、大事な所を押さえたまま、黒霧は俯いた。廊下に座り込んだまま、足をしっかりと閉じている。

「それじゃな」

と。黒霧の横を走りすぎようとした、その時、

「……待って」

と、黒霧の手が制服のズボンを掴む。

「本当に行くの？行ってどうするつもりなの？」

「さあな。俺の出来る事をやる」

「貴方の力で？無理よ」

「だろうな——でも、昔はアイツを傷つけるくらいの力はあったんだ」

「え……」

俺は自分の右手を見つめ、思い出す。

両親を奪い去ったエルファスに、全力で念を飛ばした。

俺の後ろで震えていた長い黒髪の少女を守るため、全身全霊と言ってもいい力を、エルファスに向けて。

結果、表面に僅かに亀裂を生むだけで済んだが、でも、確かに守れた命もあった。

「今なら、優奈を取り返せそうな気がする。だって、あの暗闇から戻ってこれたんだし」

「それは……」

「黒霧、だったらお前の力も貸してくれよ」

「え……」

黒霧は驚いた顔をしている。当然だった。黒霧は、優奈を監視し、この時の為にここにいるのだから。

「あの時は俺一人でエルファスを倒せなかった。けど、黒霧はあの時よりも強くなっているだろ？今の俺よりも、ずっと」

「——貴方、まさか」

俺は呆然とする黒霧の手を取り、立ち上がらせた。

その顔に、かつての事故の時、俺に助けを求めていた少女の顔が重なる。

「できるよな、紗夜」

俺は、あの時名前も聞けず別れてしまった少女の名を、改めて、呼んだ。

「どうして——憶えているの」

「いや、ただ何となく、あの時の子かってずっと思ってた。お前と会った時から。確信は無かったんだけど、お前の泣きそうな顔で解ったんだ」

「……最低だわ……本当……」

紗夜は俯いたまま、俺の胸に頭を押し付ける。俺はあの時の様に、彼女の肩に手を置き、言った。

「大丈夫、何とかなる」

「……龍介……くん……」

小刻みに震える紗夜の頭を撫でる。しかし時間は待つてはくれないだろうから、俺はひとまず紗夜に別れを告げる。まだやる事が残っている。

「悪い、俺行くわ。その気になったら助けに来てくれ。というか絶対きてくれ！それじゃな！」

紗夜をこの場に置いて、今度こそ立ち去る。

目指すは、エルファスの大部分が融合した屋上——俺達がよく集まっていたあの場所だ。

自身も根拠もないが、きっと優奈はそこにいる——

○

ここは一体どこだろう。

どこまでも真っ白なそら、どこまでもまっしろなじめん。

じぶんは立っているのか、それとも浮かんでいるのか。

どうでもいい。
もうどうでもいい。

これから自分は終わってしまう。

この何も無い世界の中で、ただ静かに消えていく。

○

「大きいですね……」

「俺もいつかこのエルファスみたいにビッグなミュージシャンに……」

「……絶対無理」

エルファスの融合した校舎の屋上、超能力者である三人の少年（少女）達は、初めて間近でみる異次元からの侵略者の大きさに、呆気に取られていた。

当のエルファス自体、何もする事無くただブルーの表面を水面の様に揺らがせていた。

その時、天から降り注いだ光が町を蹂躪していた人型のエルファスを貫く。

「な……っ」

詩音が声を上げるよりも早く、人型のエルファスは跡形も無く消失する。

「何が起きたんだ」

校舎から遙か遠くにあるその場所を見つめる三人だったが、自分達の後ろにある扉から龍介と紗夜の二人が駆けつけてくる。

○

「おい、お前ら無事か！」

「真堂君！」

「蒼、怪我は無い？」

「紗夜……」

「おいドラゴン、さっきの見たか？空からいきなり光が……」

「今はそんな事どうでもいい！」

俺は三人が無事な事を確認すると、すぐ目の前にある巨大な球体のエルファスの前に駆け寄る。

その表面に触れると、まるで水に浸けたように小波が立つが、奥に手を沈ませる事は出来ず、押し返される。この中に優奈が居る事は間違いない。

「おい優奈！出で来い！おい！」

「どうしたんですか！？」

「あの中に優奈がいる……」

「本当なの……？」

「YU—NAはあの中で何やってんだ？ライブのリハ？」

エルファスは当然の如く無反応だった。

蹴っても叩いても何事も無かったかの様に、表面を漂わせるだけで何もしてこない。

「くそっ……！！」

だん、と両手を叩きつけ、うなだれる。

この中で何が起こっているのか、地球の裏側くらい解らない。もしかしたら、もう『対話』が済み、コネクターとして役目を終えた優奈がゆっくりと結晶になっている——もしくははなった後ではないのか。

「真堂君……」

黒霧が俺の肩に手を置く。『あきらめろ』とでも言いたいのか。

「なあ……お前の力で俺をコイツの中に入れてくれないか」

「残念だけど、私の力は私の視界に映った場所にしか混沌を作り出せないの。向こう側の見えない壁とかには作れないわ……」

「……」

ここまでなのか？

俺は結局、優奈の事を何も知らないまま終わってしまうのか。

俺はアイツに一回もカードで買った事がない。

まだ、二人でしてない事が沢山ある。皆でしたかった事だって、無かった訳じゃない。

このメンバーで修学旅行だって行くだろう。職業見学だってしただろうし、休日みんなどこかに行ったり……今までそんな事した事無かったけど。

優奈が居なかったら、無意味に引っ掻き回す奴が居ないのでつまらない——もう、あの賑やかな日は帰って来ないのか。

「優奈……」

「真堂君！」

——妙に気合の入った、笹原の声が響いた。

振り向くと、右手を空に、左手を地面に向け、片足立ちした、奇妙な構えを取った笹原がものすごい形相で睨んでいた——俺の後ろのエルファスを。

「お、おい笹原？」

「私の拳法は私の『振動を操る能力』を合わせる事で完成します……！今までは能力無しに使ってきた武術ですが、今日始めて、本気でモノを殴ります……！」

「えっ、ちょ、笹原さん？」

「この拳で——砕けない壁はありません！はあああっ……！」

だん、と結晶化した床を蹴り、笹原が急接近する。そのままエルファスに激突するかのような勢いだったが、それは大きな勘違いだった。

「武神争覇奥義——！」

天と地、二つの相反する方向を向いた手が、弧を描き、重なる。

「征天双龍震禍砲……！」

——それはまるで雷鳴が間近で轟いたかのような轟音で、俺を含めこの場の者達が全員始めて聞く、打撃音だった。

その衝撃とは、一番エルファスの近くに居た俺が巻き添えで吹き飛ばぶもので、ちゃっかり離れていた黒霧を横目に床をごろごろと転が

っていく。

「おいおい、嘘だろ……」

「……人間じゃない」

「笹原さん、貴方……」

三人の何かに呆れた様な声を聞き、やり遂げた感一杯に笹原が振り向く。

「えへへ、ちょっと強すぎましたか？」

エルファスに空いた巨大な空洞を背後に、笹原は微笑む。俺は立ち上がると、一目散にその空洞に向かって走った。

「待ちなさい！何があるのか解らないのに！」

案の定、黒霧の声が後ろから追いかけてくるが、俺はそれを無視した――

「なあ、ドラゴンはYU－NAの事が好きなの？」

「ええっ、やっぱりそうなんですか！？」

「……見ればわかるでしょ。それよりエルファスの壁が……どうするの？」

「……」

蒼は哀しげな面持ちをした紗夜を見つめる。詩音がその拳で砕いた壁は見る見る内に閉じていくが、それを見つめる紗夜は、ただ無言でその様子を見つめていた。

○

「ここがエルファスの……」

勢いで入ったはいいが、数十秒で絶望が俺を襲う。

床、天井、全てが真っ白で、立っているのか浮いているのか解らなくなる。

「おい優奈！居るんだろ！」

声は空しく響き、優奈の声は愚か、自分の声以外何も返って来ない。

「……優奈……」

入り口は完全に閉じられていた。つまり、俺はここから出る事さえ不可能になった。

黒霧の時とは違う。完全なる一方通行の袋小路に入り込んでしまったのだ。

もう、後に引く事は出来ない。

笹原が再び壁を砕いてくれるかもしれないが、俺はそれをただ待つ事は出来ない。

優奈と一緒にだ。

帰る時は、一人じゃない。

「優奈！優奈！！」

俺は優奈の名を叫びつつ、走り出す。エルファスの中は明らかに本体のサイズと釣り合わず、どこまでも広大に見えた。

「おい優奈！どこだよ！おい！」

相変わらず、何の返答も無い。見渡す限りの景色に、見慣れた少女の姿はどこにも見えない。

俺は立ち止まり、その場に座り込んだ。打つ手を考えなければならぬのだが、全く浮かんでくる様子もない。考え無しに突っ込んだ事を今更ながらに悔やむ俺は馬鹿以外の何者でもない。

「くそ……っ！」

○

こえがきこえる。

私をよぶ声が、近いところから聞こえてくる。懐かしい声だった。

でも、それが誰の声だったのか思い出せない。

○

突如、ぐらりと地面が揺れた。

笹原がエルファスに穴を空けてくれたのかと当たりを見渡すも、それらしいものは全く見えない。

『ここで何してるんです』

「――優奈!？」

顔をあげると、虚ろな目をした優奈の姿があった。しかし、俺はすぐに優奈じゃないと解る。

こいつは――『アイ』だ。優奈を守る為、優奈自身が作り出した別人格。

俺はそれでも、優奈に――『アイ』に駆け寄り、その肩を掴んだ。

「無事だったのか……よかった」

『よかった……?』

「ああ、どこも怪我はないか？」

その全身をざっと眺めてみるが、特に目立った怪我は無いようで、胸を撫で下ろす。

しかし、『アイ』は目を虚ろにさせ、何か哀れむような目で俺を見ている。

「なんだよ……どうしたんだ」

『あなたは本当に愚かな人です』

「はあ? いきなりどうした」

『……』

『アイ』は黙って空を指差した。どこまでも真っ白なエルファスの内部――その天井、『アイ』の指差した先に、何かがぶら下がっている。

それは、透明な十字架に磔になった優奈の姿だった。

「な……」

それは紛れも無く、さっきマンションで別れたばかりの優奈の姿で、だらしなく着崩した制服がその証拠だった。俺は『アイ』に視線を戻すと、思わず後退ってしまう。

「お前……誰だ」

『……彼らから、体を頂きました』

「彼ら……まさか、エルフアスカ」

はい、と『アイ』は頷く。

『もう、アレは用済みの体なので、これから結晶にしてもらいます』
磔になった優奈の体が、足の先から徐々に透明になり、縛り付けられた十字架と同じ色になっていく。

「な……おい、やめろよ！やめろ！」

『……』

思わず、『アイ』に掴みかかるが、見えない壁に阻まれ、『アイ』に近づく事が出来ない。

『対話は終わりました。優奈は役目を終えた……もう楽にしてあげてください』

「ああ！？ふざけた事言ってるじゃねえ！！」

『今回の対話でも……彼らは人類に何の希望も見出す事が出来ませんでした……やはり“我々と同じ”になってもらう方がいいと』

『アイ』は抑制のない言葉で淡々と喋る。その間も優奈は結晶に変わって行く。ゆっくりと、だが確実に。

「優奈っ！起きろよ！おい！」

『貴方がた『超能力者』は選ばれなかった存在——しかし、誰もその事に気付かない』

俺がいくら叫んでも、優奈は一向に目を覚ます様子はない。ならば、と俺は能力を発動させ、階段を登る感覚で、空中を駆け上がっていく。黒霧の『混沌』の中に飲み込まれた時と同じ様に。しかし、周りは普通に重力の働いている場所の様なので、一瞬でも気を抜けば、真っ逆さまに落ちてしまうだろう。

だが——今はそんな事気にしている場合ではない。

「優奈！優奈っ！！」

「……」

優奈が磔になった十字架に取り付き、全力でしがみ付く。

優奈はまるで死んでいるかの様に眠っていて、俺はその頬を往復ビ

ンタしながら声を掛ける。

「起きろ！起きろよ！！おい！！」

「……」

優奈は目を開かない。片手で捕まっている為か、限界が思ったよりも近い。全く、自分の体重くらい支える事が出来ないのか——何が超能力だ。

俺は無力だ。どこまでも無力だ。でも、無力でもやりたい事は沢山ある。山ほどある。

優奈にカードゲームに勝ちたい。

優奈にジャンケンで勝ちたい。

優奈に、優奈に、優奈に、優奈の笑顔をもう一度見たい。

皆と一緒に、優奈を迎えてやりたい。

ここが、お前の居場所だ。

こんな世界だけど、お前が居ていい場所なんて腐るほどある。

皆という場所が、お前の、俺達の居場所なんだ！

「優奈……！」

俺は、もう一度全力を振り絞って、自分の靴を空中に固定する。

そして優奈に向き直り、その唇に自分の唇を近づけていく——そして。

「優奈、お前は出来損ないなんかじゃない」

「……」

「俺は、お前の事が大好きだ。黒霧や湊や仁だって、お前の笑顔が見たいんだ」

「……」

「だから、帰ろう。帰って、お前の好きなもの何でも食わせてやるから——」

ちゅ、と軽いキスを、した。

「おい笹原、もうやめろ！」

「いいえ！やめません！こうなったら、禁じられた最終奥義を……！」

「……なにこれ……『わたしのかんがえたいきょうのぶじゅつ』？」

「えっ……ああっ！そのメモ帳は！か、返してください！！」

「……優奈……龍介くん……」

○

一瞬、外の四人の姿が脳裏に浮かんた。あいつら全く何をやってるんだ？

でも、あの四人がこの学校で俺達の『居場所』になってくれる『仲間』なんだ。

俺達の帰る、居場所――

「うう……ん」

「……優奈？」

「むにゃ、りゅう、くん……？」

ゆっくりと、優奈の目が開いていく。

「えっ、マジ？マジでちゅーで目が覚めんの？マジ？」

余りにも信じられない光景に、自分自身が一番驚いている。

完全にノリでやっただけなのに、本当に目が覚めるとは思わなかった。

こんな事が本当に起きるとは、やってみるものである。

そして、透明化していく優奈の体は、いつの間にか普通の状態に戻っている。

「こんなのアリかよ……」

○

「え、あれえ？ここどこ？」

優奈は今自分が置かれている状況が全く解ってないのか、キヨロキヨロと辺りを見回した。今優奈の目には、どこもかしこも真っ白な景色が映っている筈である。

「ねえりゆうくん、ここどこなの？」

「エルファスの中だよ！お前覚えてねーのか！」

「……ああ、そうだった。でも、なんでゆうなはぶじなの？」

「しらねえよ！というか、俺もう限界……！」

能力が解除されつつあり、俺の足元が不安定にぐらつく。

こんなに長い間、俺の力が持った事は無かった。俺は、ありったけの力で優奈を磔から開放し、その身を抱きしめる。

「わあ！」

「しっかり捕まってる！」

駆け上がってきた要領と同じ様に、宙を急いで駆け下りていく。

今度は倍以上の重量がかかっているの、完全に俺の能力の限界を超えていた。

しかし、俺はバランスを崩す事なく、優奈を抱きしめたまま駆け下りる。

「りゆうくん！？ゆうなたちとんでるよ！」

「飛んでるじゃない！ほぼ落ちてるんだよ！」

「すごいすごい！」

地面が近づくにつれ、俺の腕も限界に近づく。余りの筋力の無さに泣けてくるが、今俺の背中を押してくれるのは他でもない、腕に抱いた優奈の存在だった。

俺は今、幸福を感じている。

優奈の存在を確かにこの腕に感じている。

その事が、この上ない幸福だった。

「あ——」

「……」

『アイ』と優奈の目が合う。お互い同じ姿をしているが、雰囲気は

全く違う。

俺達は『アイ』の前に駆け下り、俺は優奈を地面に降ろした後、地面にへたり込んだ。

そして、対面しあう二人の優奈を見上げた。

「……アイちゃん、なの？」

『……はい、優奈。貴方はどうして解放されたのですか？』

「よくわかんない」

開放された優奈自身、原因は解っていないようだ。

『アイ』はチラッと俺の顔を見て、優奈に淡々と告げた。

『優奈……どうやら貴方は選ばれていなかったようです。最初から、私を貴方から分離させる為に貴方を呼んだ……』

「ええ？ そうなの？ ？」

なんだあ、と優奈はガッカリした様に、俺の隣に腰を降ろした。

そして、俺の顔を見て、俺が一番見たかった笑顔で、言った。

「りゅうくん、そういうことだから、これからもよろしくね」

「……」

「りゅうくん？」

「ああ……そうだな！ うん！」

俺は手を伸ばし——優奈の頭を撫でた。

気になる事は多々あるも、この際もうどうでもいい。

気になる事は、ここから出てから考えればいい事だ。

「えへへ、りゅうくんになでなでしてもらってるよお」

「よし、優奈も取り返した事だし、帰ろう」

「うん、帰ってカードゲームしよ！」

俺達は自然に手を取って、立ち上がる。しかし。

『ここから出るつもりですか？』

「ああ、そうだよ。もちろんお前も一緒にな」

「うん！ アイちゃんも一緒に帰ろお」

優奈は『アイ』の手を掴み、引っ張ろうとした——が、『アイ』はその場から動こうとはせず、静かに俺達を見つめている。

「……アイちゃん？」

『優奈……残念ですが、それは出来ません』

「え……なんで？」

『私がコネクターである事に以前変わりなく……私はこれから彼らと共に、この地を去ります』

「え……」

『優奈……できれば私は貴方について来て欲しかった。ですが――』

『アイ』は俺を見て、言った。

『龍介には特別な“何か”があります。それはきっと、貴方を幸福に導いてくれる――』

「アイちゃん……！？」

『アイ』の体が、徐々に周りの白い景色に溶け込んでいく。

優奈は『アイ』に手を伸ばすが、その体に触れる事無く、すり抜けてしまう。

「アイちゃん……やだ……やだあ」

『優奈……貴方には本当に迷惑ばかりかけられてきました……貴方の弱さには怒りすら覚えます』

「そんなあ」

優奈の顔はもはや決壊しそうなダムであり、それとは対照的に『アイ』の顔は穏やかだった。

俺は優奈の隣に立ち、その手を握る。

『龍介、貴方には心底驚かされました。というわけで、これからも

『優奈』を宜しく頼みます』

「しかたねえな」

俺は『アイ』に出来る限りの笑顔を見せる。

優奈は俺の手を強く握り返してくる――その目に一杯の涙を溜めて。

「アイちゃん……ごめんね……ごめんね……」

『アイ』の透明な手が優奈の頭に伸びる。その感触は優奈に伝わる事が無かったが、確かに優しく撫でていた。

「『アイ』、お前はこれからどこにいくんだ……？」

『遠くです。こんな星にはもういられませんから』

「なんだよそれ……」

『アイ』の姿はもう殆ど見えなくなるほど薄くなり、声だけが辛うじて伝わってくる。

それでも、優奈は悲痛な面持ちで消えつつある『アイ』の姿を追っていた。

「アイちゃん……!」

『優奈……さようなら……』

その気配が完全に消えてなくなった時——俺達の視界が暗転する。しかし、俺達はしっかりと手を繋げたまま、最後の瞬間まで離す事が無かった。



「あ……!」

「お、おいエルファスが!! 待ってくれ! 俺の歌を……!」

「……二人はどうしたの……」

「見て、皆!」

紗夜が指差した先に、一筋の光があった。

ゆっくりと浮上していくエルファスが、その巨大な姿を徐々に夜空に重ねていく。

その中で、その一筋の光は段々と大きくなっていき——二人の少年と少女の姿に変わっていく。

それは、この場にいた誰もが知っている姿だった。



それからの話をしよう。

結局のところ、数年ぶりのエルファスの襲来のせいで、山瀬高校は暫く閉鎖し、俺達『超能力者』は別々の高校に送られる事になった。

笹原は有名なお嬢様高校に。

要と黒霧は星帝に。

仁は——『武道館で会おう!』というメールを残し、行方が解らなくなつた。

勿論探す気も無い。どうせどこかで好き勝手に歌っているだろう。俺達は続いている。

黒霧や要とはちよくちよく会うし、星帝でもよろしくやっている。どうやら、エルファスの出現は予期されていたらしい。詳細は不明だが、黒霧と別れる際にそう聞いた。

あれから、犠牲になつた生徒や教師——美香先生の葬式やらで色々忙しかったが、俺達は立ち止まる訳にはいかなかったのだ。

俺——真堂龍介は、巫優奈と一緒に星帝学園高校に送られ、俺はそこでエルファスと闘う訓練を積みされる事になってしまったのだ。黒霧や要と会うのは学校が同じになるからで、初登校を一週間後に控えた俺と優奈は、結晶と化したいつもの屋上に集まっていた——

「あゝあ。まじかよ。行きたくねー、星帝なんか」

「ともだちたくさんできたらしいなあ」

俺と優奈は結晶の床に寝転がり、ボケーと空を眺めていた。

勿論、手を繋いだままで、俺は『アイ』との約束を忠実に守っている。

「なあ優奈、星帝には俺の孤児院の兄弟が沢山いるんだよ……やだなあ、会いたくねえ……」

「だいじょうぶだよ、りゅうくん。ゆうながいっしょだから」

「いやそうだけどさ……あゝあ」

流れていく雲を見つめつつ、ため息を吐く。

それでも少し、ほんの少しだけワクワクしていた。

この握った手から、なんだか力を貰っている気がするのだ。勿論肉体的なものではなく、心の底から湧き上がってくる様な——

そんな力だ。

これが、『愛』ってヤツなんだろうか。

これから、こんな感じで、俺達は続いていくんだろう。

世界がどうなっても、俺達は俺達のまま、ずっと続いていく。

俺は変わらない青空を見ながら、そんな風に思っていた。

それはある種の願いであり、祈りであった。

「そうだ！」

優奈は体を起こし、ニツコリと微笑んだまま、俺の方を見て言った。
この時、確かに俺には見えていた――

「ねえりゅうくん、カードゲームだよ！」

――優奈の背中には、天使の翼が生えている。

おわり

#7／僕たちは続いてく　―後編（後書き）

ここまで読んでくださったユーザーの皆様にも多大な感謝を捧げます。本当にありがとうございます。そして、更新が遅くなってしまう、誠に申し訳ございません。話もお粗末なものながら、ただ暇つぶしの一心でここまで書く事が出来たのも読んでくださったユーザー様のお陰でございます。

この作品を続けるか、また別の作品を書くかは全く決めてません。しかし、キャラクターだけは気に入っているので、同じキャラで別の話を書く事もあるかもしれませんので、その際はどうかよろしく願います。

このサイトのお陰で趣味の幅が広がった事に感謝しつつ、今回は筆を置かせて頂きたいとおもいます。それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2937v/>

ぼくらの選定戦争<開戦編>

2011年10月10日10時59分発行